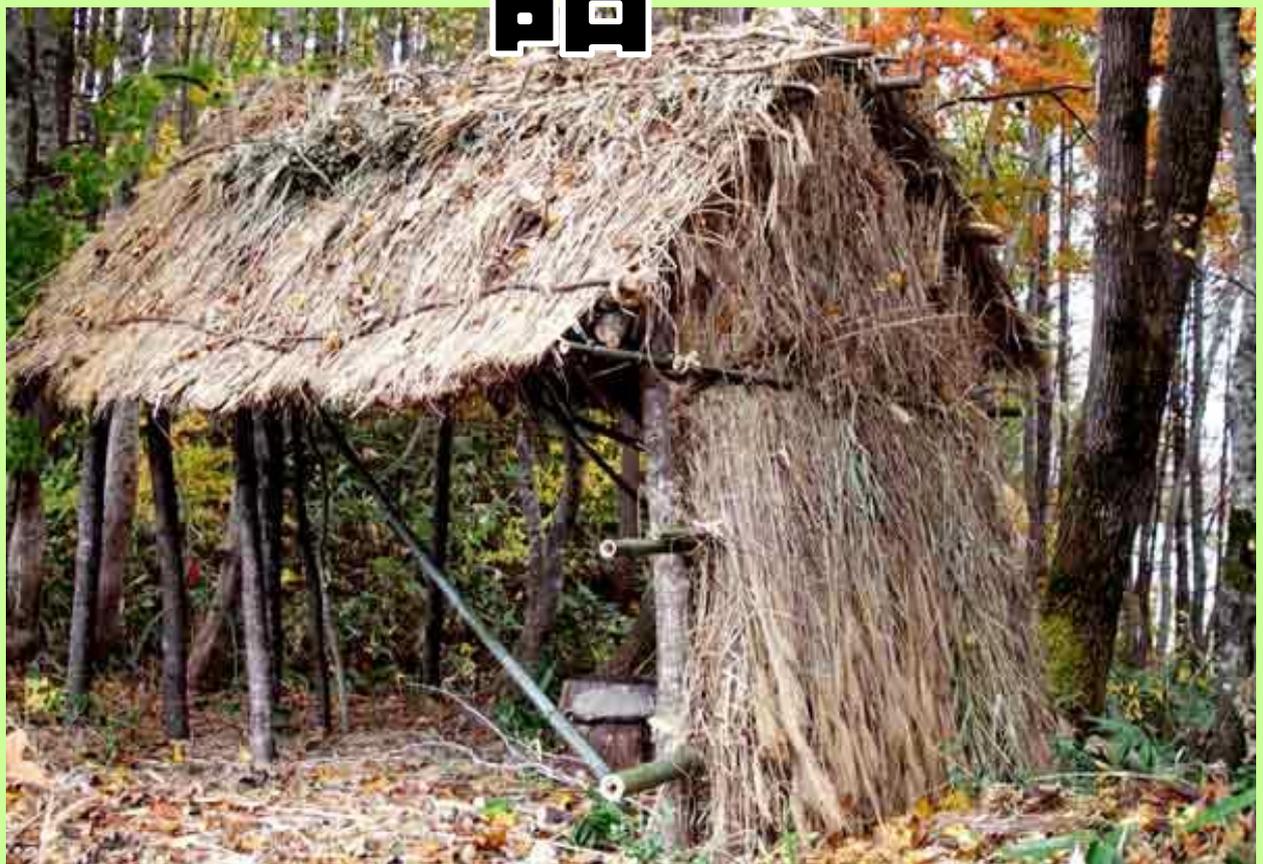


# 栗沢の民話



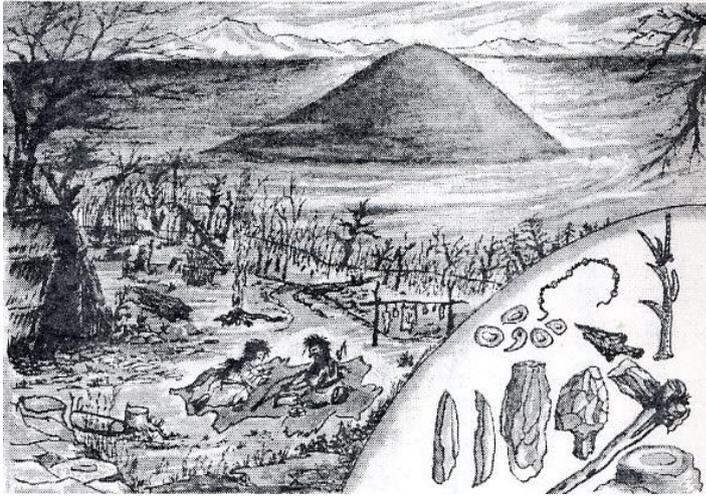
栗沢の民話は、「栗沢の昔ばなし」として、平成13年10月に第1集、平成17年1月に第2集が発行されていきましたので、若干の校正と参考資料等を追記して再掲いたしました。

きゆうせつきじん

## 旧石器人からの手紙

みなさんこんにちは、わたしたちは由良の大地に住んでいた旧石器時代人です。今から一万五千年ほど前は、由良地区が海と陸との境目でした。まだ大陸とは陸続きで氷河期といわれたところで、気候は今のアラスカと同じくらいだったでしょう。ですから、わたしたちは一年中動物の毛皮を身につけて生活していたのです。

ここフリヌプリの丘は、今でこそ一番高いところが一五六メートルにもなっていますが、わたしたちが暮らしていた時代は、海辺に近い豊かな草原地帯でした。所々にハイマツやチョウセンゴヨウが茂り、コケモモやキイチゴ、クルミなどもたくさん実っていました。はるか東には真夏でも雪を



残したなだらかな丘陵が広がっていました。今の夕張山系です。

豊富なえさを求め動物たちもたくさんやってきました。マンモス象、オオツノシカ、野牛、ナキウサギ、ときにはナウマン象まで、わたしたちは、動物を追いながら数家族がいつしよに暮らしていました。

獲物をとったり、解体するための道具もいろいろ工夫したものです。器用な仲間、動物の骨や角をけずって飾りものを作ったりもしていました。生きるのに必要な分だけをとってみんなで分け合おう。

そんなわたしたちの間では、争いごとなどありませんでした。

栗沢のみなさん、一度フリヌプリの丘に立ってみませんか。わたしたちが草原をかけめぐり、獣を追ったさわやかで豊かな光景が見えてくるはずですよ。

さあ、ページをめくってください。現代人がとくの昔になくしてしまっただけなものが、きつと見つかるはずですよ。

## ジッコ渡し

東三号近くの夕張川に、『ジッコ渡し』という渡し舟がありました。

『ジッコ渡し』の名の由来ですが、『嫁っこ』と同じく『爺っこ』と親しみを込めて呼んだのだそうです。

自転車二台と人が二人も乗ればいっぱいの小さな渡し舟で、終戦のあとも五年ほど運行していたでしょうか。この渡しで長いこと船頭をやっていたのが、出口藤松というおじいさんでした。

農業は息子にまかせ、長沼側の堤防地に小さな小屋を建て、夫婦二人で住んでいました。

電気もないようなところでしたが、駄菓子やアンパンなども置いていて、これがまたけっこう商売にもなっていたようです。

戦前の船賃は、人が五銭、自転車車が五銭でした。出口じいさんはいつも長沼側の小屋にいましたから、栗沢から渡るときは、「おーい」と声をかけます。

するとじいさんが舟を回して迎えにきてくれるのでした。

真冬になると出口じいさんは、岸から岸へ太い針金を何本も張って柳の枝を並べ氷の橋を作ります。この氷橋を馬橋に乗った花嫁さんが何人も行き来したのだそうです。



## 開拓とヒグマ

明治時代になると、自然豊かなフリヌプリの丘にも開拓の鋤が入られるようになりました。

内地から移住してきた人たちが、もつとも恐れていたのは何といつても

ヒグマでした。栗沢村でも開拓期には村のあちらこちらに熊が出没して

いました。ですから、人々は熊に

おそわれないよう掘建小屋に合宿し共同で作業したのです。夜どお

しノコギリをたたいて警戒したと

いう砺波の片山又次郎さんの話や、

一度に四頭を射止めた耕成の熊射ち名人兼崎兄弟の話などが伝えられています。小西では、移住後数年間で四十数頭が射止められたという記録も残っています。

さて、ここで四人のお年寄りから聞いた熊の話を紹介しましょう。



まず、東谷弥三久さんです。

わしは、村の収入役をやっていた、小林榮三郎さんの話をしようかね。ある日の夕方、役場から『鈴木沢』にある家に帰る途中のことだった。小林さんは道の曲がり角でひょうこり熊に出会ってしまったんだと。小林さんと熊との距離は五メートルほど。小林さんは立ちすくんでしまったが、熊のほうもびつくりしたのか動かない。しばらくはにらみ合っていたんだと。そのうち小林さんは精根つきで道にひざまづいてしまった。

「おやじ、助けてくれ」と言つて、小林さんは目を閉じた。バサツという音があったのでおそろおそろ目をあけて見ると、熊のすがたは消えていたそうだと。

「おやじと言つた言葉を聞きつけた父親が、守ってくれたのだ」とみんなは言っていたが、「山親爺」ともいわれる熊のことだ、何かを感じたのかもしれないな」

本田榮三郎さんはこんな話をしてくれました。

開拓小屋を作るために刈つておいた葦を横取りされたり、近くの古川に繁っている水芭蕉を食われたり、足あとを見かけることなんぞしよつちゆうだったね。

あれは明治二十七年のことだった。

常照寺の入仏式の日、九号道路の真ん中に熊が座りこんでいて大騒

ぎしたこともあったな。わしが夫婦らしい二頭の熊と出会つたのもその年だった。大豆畑の朝露を鋸ではらいながら林の入口まで来てふと見ると、二十メートルほど先に熊がいたんだ。

このときは肝を冷やしたよ。走つて逃げようと思つたが、熊には背を見せるなといわれていたからじりじりと後ずさりした。

すると熊も同じように後ずさりしていく。何歩か離れたところで熊のほうで林の中に逃げ込んでしまったんだよ。

小西の本多小三郎さんはもつと危険なめにあつて居るのです。

忘れもしない明治三十二年の九月だった。とうきび畑が熊に荒らされて居るのを見つけ隣の杉本さんに知らせたところ、長沼から知り合いの猟師を呼んでくれたんだ。だが、その日は熊を見つけることができなかった。次の日、わしらは四人で熊を追つた。

猟師は熊が歩いたあとを見つげたり、指先で糞の温度を調べ、熊との距離を確かめながら進んでいった。みなが昼ごはんをすませ歩きはじめたときだ。十メートルほど先にひそんでいた熊がうなり声とともに立ちあがったんだ。逃げる間もありはしない。わしは襲われて倒れこんだ。熊は次に与左衛門の右腕をひつかいたあと走り去つた。

幸い与左衛門の傷は浅く、わしも着物の背中を裂かれただけですんだ。

この熊はその日の夕方、ぬかるみに足を取られているところを射止められたのだが、あぶないところを命拾いしたよ。

昭和に入ってから熊の話は尽きません。上幌の井上政義さんから、次のような話を聞きました。

昭和十二年の秋、茂世丑二の沢に住んでいた斎藤さんたちが、熊の親子を見たといつて猟師の家にかけてこんできたのです。

あいにく鉄砲玉は鴨猟かむりように使うものしかなく、熊射ち用の玉を作ることから始めなければなりませんでした。

次の日、関口米吉さんという古参こさんの猟師も含め、五人ほどで熊の出た場所へ向かいました。猟犬りようけんを連れて行つたおかげで、間もなく熊を見つけることができました。射止めたあとは、若い者を五、六人たので担かいでもらいました。さあそれからがたいへん。記念写真をとつたり、見物にきた人たちに肉を分けたり、そりやもう大騒ぎでした。

毛皮と熊の肝きん(胃い)は、干ほしたあと富山の薬屋くすりやに売つたそうです。

関口米吉さんは、兄さんの仁平さんともども熊射ちの名人で、米吉さんの家では熊の毛皮しほを敷物しきものにしていました。

また、この時の様子について、渡辺すすさんが著書『夕張川のあたり』の中で、次のように記述きじゆつしています。

私の家(現在の渡辺登宅)の向かいに関口八郎さんというりようじゆう猟銃射ちの名人がいました。関口さんは部落の人から、「茂世丑二の沢に熊が出た」と聞き、上幌の井上さんというしゆりよう狩猟仲間と二人で熊射ちに出かけました。二人は二日目に熊と出会い、笹藪ささくから出てきた時、生のつばを呑み心臓しんぞうを下キドキさせながら狙ねらいを定め、「それっ!」とばかりに引き金を引きました。弾丸だんがんは熊の急所に命中、熊はその場にどつと倒れました。また、その場所から少し離れたところに子熊もいたので、それも素早すばやく射止めたそうです。

わたしも熊を射止めた話を聞きドキンとしました。茂世丑二では熊を射止めたことは初めてなので、部落中お祭り騒さわぎとなり部落の人たちが、一の沢いちのさわから道端みちばたまで運んで馬車に積み、関口さんの家の前で柱を二本立て、横に一本くりつけて母熊と子熊を立たせて並べました。近所の人たちと上幌からも部落の人たちが大勢集まってきた、隣の東さんのおばあちゃんも稲刈いねかり鎌かまをもつたまま



田んぼから走ってきました。

私も長女と四女を連れて見に行き、部落の人といっしょに記念写真を撮っていたきました。腰に銃弾を入れた弾帯をつけ、笑顔でいた猟師の人たちの姿が時折思い出されます。

ところで熊にも言い分がありそうです。ちよと聞いてみましょうか。

「ヒグマさん、ヒグマさん、人間ばかりがいろいろなことを言ってきましたが、熊さんたちは、わたしたち人間のことをどう考えていますか？」

「言わせてもらえば、この北海道に住みついたのは、おれたち熊のほろがずつと先なんだ。昔はよかつた。春の山には香りのいい若竹、秋の平野は木の実がいっぱい。川に降りれば鮭はとりほうだい。それが明治とやらになって原始林がすごい勢いで伐採された。おれたちは山奥へと追われた。食料が足りなくなつて、山から出ていこうものなら、畏はかけるし鉄砲で撃つし情け容赦もありやしない。

いいかい、おれたちの生きられる環境をぶっこわしておいて、絶滅だなんていつたつて遅いんだ。少なくともおれたちは人間どもと違つて、必要もないのに人を襲つたりはしない。人間のほうがおれたちのすみかに入りこんでいるんだつてことを、忘れないでくれよな」

ほうとくざか

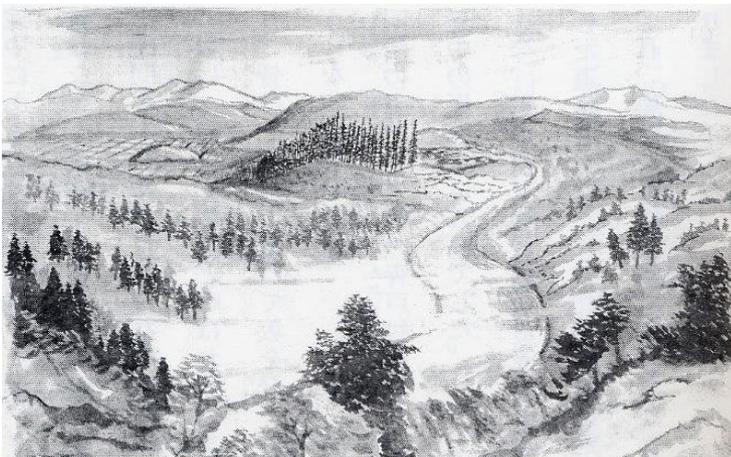
## 報徳坂ものがたり

「おーい、阿部の坂でまた馬車が谷に落ちたぞー」

明治三十二年に清真布から茂世丑までの茂世丑道路ができたのですが、南北に横たわるフリヌプリ山脈を超えなければなりません。

フリヌプリは、一番高いところで一五六メートル、山幅はおよそ四キロメートルで、見かけはなだらかですが途中にある坂は勾配が急なうえ七曲がり八坂もあり、危険な場所も多く、雑穀などを運搬する馬車や馬櫓がよく谷底へ落ちたそうです。冬の峠越えは一時間半もかかったといわれています。

坂は『阿部の坂』と呼ばれていました。それは坂の入口に阿部さんという家があり、皆はその前を通つて坂を登つたので誰ともなく阿部の坂というようになったそうです。



明治の末頃、当時の青戸村長さんが茂世丑道路を改良しましたが、それでも途中の坂越えは大変でした。今、私たちが通っている茂世丑道路は、昭和七年に別ルートで新しく完成した道路です。これで長いあいだ大変な苦勞をして通った阿部の坂も改良され、馬車や馬櫓が谷に落ちることもなく、トラックも楽に通れるようになりました。

この坂が、『報徳坂』と呼ばれる由縁ですが、茂世丑道路の改修に力を尽くした当時の村長、山田勢太郎翁が唱えた報徳精神の村づくりを偲んで名づけられたと語り継がれています。

## おんぶお化け

昭和の初めころのお話です。

まだ蒸し暑さの残る闇の夜にとでした。親戚の法要でお酒をこちそうになった源さんは、ほろ酔いきげんで家路につきました。

手にぶら下げた風呂敷包みの中には油揚げの煮つけや、仏様には供えたお菓子のおさがりが入って



います。家で待っている年老いたお母さんへのお土産にとわたされたものでした。煙るように霧雨が降っていましたが、源さんは雨具も借りずに親戚の家を出ました。しばらく行つて源さんは首をかしげました。

家まではいくらの道のりでもないというのに、いつまでたつても明かりが見えないのです。どうしたことだろうと立ち止まると、急にぞくぞく寒気がしてきました。それどころか、誰かに後をつけられているような感じすらするのです。源さんは走つて逃げようと思いました。

でも体じゆうがガクガクしていうことをききません。

そうこうするうちに、右の肩が何かにのしかかられたように重くなりました。ひよつとして風呂敷包みのせいかもしれない。源さんは包みを持ちかえてみました。すると今度は、左の肩がずしりと重くなるではありませんか。風呂敷包みを両手で抱え、体をゆすつても肩は重くなるばかりです。精も根も尽き果てたとき、おんぶお化けだと源さんは気づきました。

「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ」、気が遠くなりそうになるのをこらえ、源さんは懸命に手を合わせました。

するとどうでしょう。あんなに重かった肩がすうつと軽くなったではありませんか。いつしか雨もやみ星が光っています。

お母さんの待つ家の明かりもすぐ近くに見えています。源さんはころがるようにかけだしました。家についてみると、あれほど大事に抱

えていた風呂敷包みがなくなっていたのです。

この話を聞いた人々は、「油揚げをねらったキツネの仕業だ」と言って笑い合いました。

## 宮村の五本松

太平洋戦争が終わるまで、全国どこの学校にも小さな神社のような建物が校庭に建っていました。奉安殿とか、奉置所と呼ばれていました。正面の扉は頑丈な鉄でできていて、まるで銀行の金庫のようでした。

中には御真影といって、天皇皇后両陛下のお写真と、教育勅語が保管されていました。

そのころ天皇陛下は神様としてあがめられていましたから、登下校のとき、奉安殿の前では一人一人が帽子を取り最敬礼しなければな



りませんでした。栗沢では、宮村にあった上幌小学校の分教場だけは奉安殿がありませんでした。おもだった式は本校であげるため、宮村分教場には奉安殿がなかったのでしょう。

空知管内には、こうした分教場が三か所あったのですが、それぞれに皇太子殿下（後の昭和天皇）のお手播きの落葉松の苗木五本の御下賜があったそうです。宮村分教場では、五本の苗木を校舎前に植樹し、記念碑を建立しました。戦争が終わるまで、児童たちは奉安殿と同じように最敬礼したのだそうです。戦争が終わってもすくすくと育つ落葉松を、宮村の人々は『五本松』と呼んで地域のシンボルのように親しみをこめて見守っていました。大きく太った五本松でしたが、十数年前、そのうちの一本が枯れてしまいました。こうして五本松は四本になってしまいました。この四本松をよくよく見ると、一本の木肌が少し赤みをおびているのに気づきます。これには隠された話があるのです。

御下賜になった五本の松は大切に育てられていたのですが、どうしたことか一本が苗木のうちに枯れてしまったのです。

「さあ、たいへん」と、同じような苗木を調達して植えたのがこの赤い木肌の苗だったようです。以来およそ八十年、四本の落葉松は歴史の証人として今も宮村に残っています。とりわけ、赤い木肌の一本は控えめな、いぶし銀にも似た姿で人々を見守っているのです。

# ぼっかんどうぐべんしよ

菜種おとし(脱穀)も燕麦おとしも終わり、小豆や大豆の刈り取りまでは少し間のある初秋でした。トキさんは珍しく一人で夕食をすませたあと、昼間の草取りの疲れもあつて茶の間でうたた寝をしていました。思えば、女のきょうだいの多かつたトキさんは、両親に追い出されるようにして十五歳の時この家の嫁に来たのです。

しきたりに厳しい姑に任せ、何がなんだか分からぬうちに、翌年には長男が生まれていました。だから息子とは、たった十六しか歳が違わないのです。息子が十歳になったとき、頼りきっていた夫が不慮の事故で亡くなってしまいました。三十歳の若さでした。わずか二十六歳で後家(未亡人)になったトキさんは、姑の言い付けに従つて、お齒黒に染め、黒い生地(ほうし)の帽子を被り野良にでました。こうしてトキさんは、傍目もふらずに前だけを見て働き抜いて、息子が二十歳になった年の春に隣り村から十八歳の花嫁さんを迎えました。

トキさんには、息子に嫁をもらうまでは何がなんでも辛抱しなければという大きな目標がありました。それが果たされた今、たとえようのないむなしさにさいなまれるのです。ちようどその夜は、嫁の実

家の秋祭り(とくだん)で若夫婦を送り出したあとでした。

特段に厳しかった姑も二年前に他界して、若夫婦が出かけたあとの静けさも胸にしみます。おりからの雨は、うたた寝から目覚めたトキさんをいつそうさびしくさせました。家の裏手には山がせまり、一筋の小川が流れていました。耳を澄ませば、せせらぎが間近に聞こえてくる距離でした。トキさんは思いました。『私の人生って何だったのだろうか……。息子を一人前に育て、嫁をもらつて、充実感があるはずなのに、何が不足なのだろうか』と……。

雨はいつの間にか激しく音をたてています。小川のせせらぎもいつしか荒々しさを増し、ごうごうとうなり始めていました。

突然、闇をうらみ、人を呼ぶような声が聞こえてきました。

「トキさーん、トキさーん、トキさーん」

この夜更けに、こんな大雨のさなかに何ごとだろう。それも聞いたことのない鼻にかかった薄気味悪い猫(ねこ)なで声(こゑ)でした。しかも雨音を縫うようにひたひたと、何者かが家の方に近づいてくる気配です。

「トキさーん、トキさん、いないかい」トキさんの背筋に冷たいものが走りまわりました。「まさか……。こんなときなせ……。どうして……」

このとき、トキさんの脳裏に古老の言い伝えが鮮やかによみがえりました。その昔、雨の夜更けにカワウソが人に化けて現れ、人の言葉(ことば)を巧みに操りながら人をだまし、あげくの果ては強引に水中に引き

ずり込むというものでした。トキさんは、昔からカワウソの相手になつた者には碌な結果がなかったことを聞いていましたので、半ば金縛りになりながらも、意識の底では息を殺して黙り込む以外、なす術がないのだと自分に言い聞かせていました。

「トキさん、トキさん、いるんでしよう」カワウソはひとしきりトキさん呼びながら家のまわりを歩き回っていました。

「トキさん、トキさん、いるんだつたら返事なさいよ」

カワウソは、トキさんが失神寸前になっているのを見透かしているかのような声色で続けます。

「トキさん、居留守使ってるんじゃないの」

「……」

「トキさん、いるはずなのに、

おかしいな」

「……」

「トキさん、ほんとにいないのかな」

「……」

「トキさん、あほくさ。無駄骨折つてしもうたかな」

「……」



「これだけ呼んでも返事がないのは、いないということか」

「……」

「ほんじゃまあ、今日のところは帰るしかないかい」

どうにかカワウソは、トキさんをあきらめて水中に潜る間際に、まともやトキさん呼びました。

「トキさん、トキさん、トキさん」

「……」

そして最後に捨てぜりふのような呪文を唱えました。

「ぽつかんどうべんしよ。ぽつかんどうべんしよ。ぽつかんどうべんしよ」

## 越前沼風説

開拓前の栗沢の平野部は、東側が原始林、西側は湿地帯でした。

この中心を母なる『きよまつぶ川』が流れていました。

たくさんの支流もここに注がれていましたが、どういうわけか沼らしいものはありませんでした。ちなみにきよまつぶ川の語源は、アイヌ語の『キ、オマ、プ』（キは葦、オマは多い、プは茂の意味）からきているといわれています。西側に広がる湿地帯や川の付近は、まさにキ、オマ、プで、葦や茅がみごとに育ち野鳥や動物の楽園だったのです。

そうそう、今の自協地区に越前沼という二ヘクターほどの細長い沼がありました。

これが栗沢の数少ない沼の中では横綱クラスだったようです。

沼の周辺には、特に鹿の角が折り重なるように残されていて、あるいはエゾシカのオアシスだったのかもしれない。沼は深い所では三メートルくらいあって、コイやフナ、ウグイ

などが手づかみできるほどたくさん

さん住んでいました。カラス貝も

多くいました。五、六寸（十五、

十八センチメートル）あるものも

珍しくなく、中には黒味がかった

大きな真珠をつけたものがあつた

そうです。言い伝えでは、亀まで住

んでいたというから驚きです。

北海道には野生の亀はいません。

どこかの家で飼っていたものが逃げ出したのでしょうか。

一時は越前沼の主としてあがめ

る人さえ出てくる始末でした。

そのうちに、もう一匹別の亀を

見たという話も出てきて、「ありやいや、そんな偶然があるのだろうか」と、話題になったものでした。



「いよいよ、誰かが要らなくなつて、沼に捨てたんだ」

「そんな……、亀を捨てるなんてバチ当たりだ。きつとカラスがどこからかくわえてきたんだ」とかなんとか、一時はああでもない、こうでもない、といういろいろな噂が流れましたが、そのあといくらもたたないうちにぶつりと亀の姿は消えてしまいました。

人間どものさわぎがいやになつてしまった二匹の亀は、沼の底に深く深くもぐりこんでしまったものやら一五〇年も生きられる亀のことで

すから、どこかで元気に生きているかもしれません。

今では、越前沼がどのあたりにあつたのかさえ分からないほど水田

が広がり、わずかに小川の上流としてなごりをとどめているくらいのも

のだそうです。

越前沼の名前のおこりは、むかし、自協と越前をふくめて越前開墾

といっていたもので、その名がついたのでしょう。

# 易者になった稲荷大明神

えきしや

いなりだいみょうじん

これは、明治四十三年の夏、本田栄三郎さんが経験した不思議な出来事です。直接、本田さんにお話してもらいましょう。

その日は北海道には珍しく、大地をこがすような暑い日でした。午後の二時ころ、私は志文から清真布へ鉄道伝いに重い足を引きずっていました。やることなすことうまくいかず、そのうえ土功組合の仕事にもかかわって、気持ちのふさぐことばかりでした。

いったいどうしたものかと深いため息をつき、ふと顔を上げると、目の前の枕木の上に、白いあごひげを胸までたらしした老人が立っているではありませんか。歳は八十歳を越しているようで、白装束に下駄履き姿です。私は暑さでもうろうとなった頭を二、三度振って目を凝らしました。よく見ると、老人は白の風呂敷を袈裟懸けにし、そのうえ小さな袋を背負っています。

袋の中に入っているのは、どうも易者の筮竹のようです。心の中が悩み事でいっぱいだった私は、その老人がきつと易者だと思いい、すがりつかんばかりに声をかけました。

「ひょっとして、あなたは易者様ではありませんか」

「はい、おつしやるとおり易者でございます」

老人はゆつくりとうなずきました。

こんなところで出会ったのも何かの縁。私は老人にこれからのことを占ってもらおうと思いました。

「線路の上で、それもこのように暑い中、あまりにも申しわけ

ありませんが、どうかお力を貸してください。私は今、

重大な岐路に立たされているのです。ただ迷うばかり

でどうすることもできません。

「ご迷惑ですが、あなた様の占いで進む道を教えていただきたいのです」

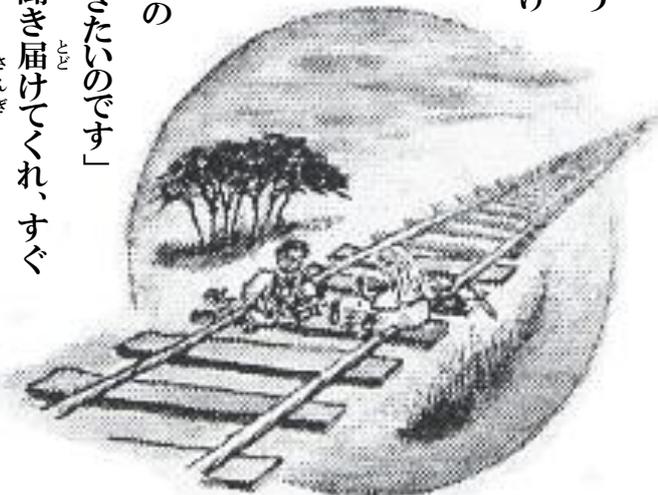
老人は、私の願いを快く聞き届けてくれ、すぐ

に風呂敷包みを肩からおろすと、算木や筮竹を取り出しました。

老人がゆつくりと枕木の上に正座したのになら、私も老人の前に座りました。私は流れる汗を拭くことも忘れ、算木を枕木に並べたり筮竹を振る老人の手元をじつと見つめていました。

やがて老人はこう言いました。

「あなたは、今住んでいる處から離れようとしているようですが、



それはおよしなさい。しかしある程度ていどのものは手放さなければなりません。いつとき困こまることがあるでしょうが、少しの辛抱しんぼうです。

必ず何事もうまくいくようになります。とにかく、今移ることはやめたほうがよろしい」

私は驚おどろきました。というのは、これまで何度なんども清真布を離れ、沼田村へ移住することを考えていたからです。この占いを聞いて、私は行く手に一筋ひとすじの光が見えたような気持ちになりました。そうして沼田村への移住を思い止とまったのです。さらに私は占いをお願いしました。

易者は再び枕木の上に算木を並べ笹竹を振りました。「あなたは今、大事業をもくろんでおられる。この事業はきつと成功します。しつかりおやりなさい。

この卦けを分かりやすく説明すると……」

私は身を乗り出して易者の顔と手元をかわるがわる見つめました。

「たとえていえば、ここに千人の力がなければ起おこせないような岩がある。その岩をあなたは起おこそうと奔走ほんそうしている。加えてたくさんの人がこれに共鳴きやうめいして骨折りしておられる。岩はたしかに起きるでしょう。何も心配することはありません。思う存分ぞんぶんおやりなさい」

さらに易者は続つけるのです。

「この岩の下には、たくさんの黄金おんごんがある。岩が起きるとたくさんの黄金を皆みなで分けるという卦にもなっている。仲間は皆金持ちになり、

あなたの尽力じんりよくに感謝かんしゃするでしょう。それから後は、あなたが災難さいなんにあつたとき、皆が手をさしのべてくれるはずですよ。まことに結構けつこうな卦です。あなたの成功は間違まちがいない」易者の力強い励ましはげを得た私は、ここぞとばかり、土功組合設立と造田計画を打ち明あけました。

「それは大変結構な計画です。国や社会のためににおおいに働いてください。来年中に工事はだいたい終わることができ、再来年さらいねんには造田も完成するでしょう。たくさんのお米も穫とれるはずですよ。そのとき私はちょうど八十八歳だ。米という字は八十八と書くくらいだから、米には深い因縁いんねんもあることです。まことにめでたい。事業が成就じやうじゆしたあかつきには、この私もお祝いわいに寄よせてもらいますよ」

自信じゆんたつぷりな易者の言葉に、私はしばらく放心状態ほんしんじたいでした。そして、ふと我われにかえつたとき易者の姿はどこにも見当たりませんでした。

私は迷いをふつ切ることができました。そして、仲間とともに事業を成功させることができたのです。

私にはあの易者が、

稲荷大明神いんねんの化身けしん

思おもえてしかたがありません。

ですから私は仲間と

相談さうだんして、村の一隅ひとすみに

稲荷神社を建て、今でも信心しんしているのです。



# 栗沢空襲

北海道新聞では、平成七年七月から八月にかけて、『五十年前を讀む』と題し、太平洋戦争終結五十周年記念特集を連載してしました。『昭和二十年七月十六日の紙面から』というところを紹介しましよ。

十四日に続き、十五日も札幌や函館、室蘭、小樽などが空襲にさらされた。「敵の本格的戦爆連合攻撃がいよいよ緊迫した」と紙面の緊張も高まり、火を噴いて落下する米戦闘機の写真二枚が目を引く。特攻隊司令の大佐は、「必死必中その命中率において、古今東西を通じて、如何なる兵器もその比を見ない特攻機があり、諸子の如き義烈の士がある」と日本が勝つ理由を説明。さらに、「沖繩の喪失という犠牲によって、敵の実力というものを知ったが、これは勝利のための捨石である。本土決戦こそは、決戦中の決戦である」と隊員へ訓示した。だれもが皇国不滅を信じ込んでいた。沖繩戦で失われた多くの命を『捨石』と呼ぶ論理が、本土決戦を叫ばせていた。

なお、栗沢町史には、当時の模様がつぎのように記されている。その頃、本道太平洋沖にはアメリカ艦隊高速空母隊(航空母艦十三

隻が主力)が結集していた。戦火のなかつた北海道も、七月十四日、米軍のB29約二十機と艦載機、延べ三百機が函館、室蘭、帯広、釧路などを攻撃、各地に大きな被害をもたらした。翌十五日には、旭川や小樽も目標となり艦載機延べ四百八十機が爆撃を加えた。(中略)『幸いにも栗沢は空襲の難を免れた』あたり一面が徹底的に破壊されたり、火の海となって多くの人命が失われたわけではなかつたとはいえ、栗沢にも空襲にまつわる話はあるのです。

第二次世界大戦も敗北に近い、昭和二十年七月十五日午前十頃、雷が一度に十個も落ちたような大音響が、上幌全域を揺がしました。現在のレインボー線の附近、鷹巣、中島の堰止めに爆弾が投下されたのです。堰止めの片側の堤防が吹っ飛び、川の水が一瞬にして空になり、驚いた蟹が両岸にびっしり這い回っていました。堰止めを狙つたものか、誤つて落としたものかわかりませんが、あの時はほんとうに戦争を身近に感じたものでした。B29の姿は見えませんが、たから、艦載機のしわざだったのでしよう。拾い集めた爆弾の破片は、大きいものでも数センチメートル程度でしたが、その一片一片の断面は鋭く裂けていて、戦争の恐怖をまざまざと見せつけられました。

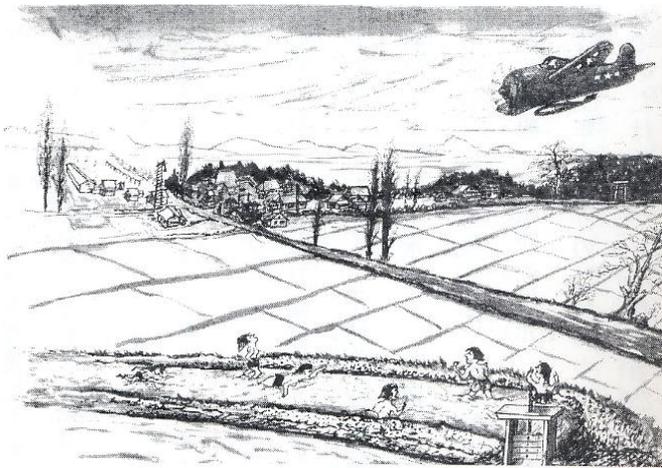
そのときの様子を、砺波地区の女性は次のように話しています。その日、七月十五日は日曜日だったのでしよう。国民学校高等

科二年の女子数人が誘い合わせて、本線川(灌漑溝)に泳ぎにきて  
いました。当時はもちろん土水路で、本線の方は今の一倍半ほど  
の川幅があり、流れも急でとても恐ろしくて入れるものではない  
ません。本線と並行して流れ  
る副線(本田朋紀地先)が私た  
ちの遊び場だったのです。

高等科二年というのは今の  
中学二年と同じですから、胸  
もけっこうふくらんでいたけ  
れど、上半身は当然のように  
裸。下は普段着のパンツそ  
のまま泳いでいたものです。

午前十一時頃でした。しよ  
うか、突然東の空からものす  
ごい爆音が聞こえてきました。顔を上げると今まで見たこともな  
い大きな飛行機が超低空で追っってくるではありませんか。

誰かが「B 29だ!」と叫ぶと同時に、私たちは必死で水をかき、岸  
辺の草むらにしがみつきました。一瞬、飛行機の影で頭の上が真っ暗  
になりました。体は恐怖で石のようにかたまっていました。機影はま  
もなく南西の空へ消え去りました。あの飛行機がほんとうにB 29だっ



たのかどうかも分かりません。艦載機のことには知りませんでした。

敵機といえばB 29だとばかり思い込んでいたのです。北海道でも  
昭和二十年は、六月に入ってから毎夜九時になると決まってB 29の  
侵入がありました。偵察だったのか、神経戦を狙ったものだったのか。  
幸いにも泳いでいるとき機銃掃射にはあわなかったものの、今でも  
あの時のことを思い出すと、体がこわばってくるのです。

また、同じこの時の空襲を、近くで体験した上幌地区の男性は、そ  
の様子を次のように生々しく話しています。

大東亜戦争(第二次世界大戦)も日本の敗戦が一段と濃くなつてき  
た昭和二十年七月十五日十時頃、雲が低くたれこめ真夏だというの  
に寒い日でした。その日も朝から警戒警報のサイレンが鳴り響いてい  
ましたが、毎日のことなのであまり気にもせずにはいました。

急に空襲警報のサイレンの音がしたと同時に飛行機の音。  
「来たな……」と思う間もなく、突然すさまじい大音響。

急いで外に出て音の方を見ると、山の方にもうもうと黒煙が立ち  
上っています。茂世丑川の鷺巢さん、中島さんのコンクリートの水門  
を直撃したらしく、四〇〇メートルほど離れた田んぼで草取りをし  
ていた人のすぐ近くまで爆弾の破片が飛んできました。爆弾の破片を  
拾ってみると、先の尖った鋼鉄の塊であったそうです。空襲は一回で

終わったので、しばらくして爆弾の落ちた水門に行ってみると、水門は壊されて、いっぱいたまっていた水が流れ、

底にあった石の間や草の中に川海老や

川蟹・魚がいっぱい、底一面で跳ねて

いました。また、近くの立木の枝も

五寸(約十五センチ)くらい太い

ものまでポツキリと折れており、

爆弾の力の恐ろしさをまざまざ

と見せつけられました。

もう一つ、五〇〇メートルほど離

れた林さんの畑にも落としていった

ようで、畑には大きな穴があいたそうです。それまで空襲警報でもあ

まり気にせずにいきましたが、それからは空襲警報のサイレンが鳴ると、

防空壕に入ったたり木の下に避難したりしました。当時は食糧難の

時代だったので、子どもたちにとっては防空壕に入って豆や乾パンなど

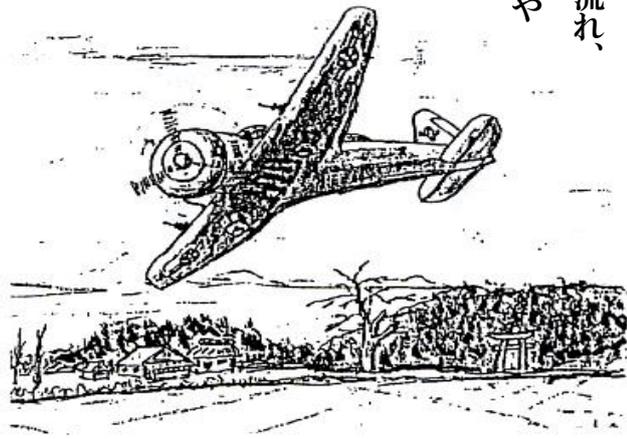
の非常食を食べるのが楽しみでした。

後で聞いた話では、茂世丑は戦争に関係ない場所なので、アメリカの

飛行機が爆弾が邪魔になつて落としていったとか。

それから一か月後の八月十五日、神風の国といわれていた日本も敗

戦となり大東亜戦争が終わったのです。



## 清幌橋の怪音

かい おん

清幌橋は、夕張川に架かる橋で、清真布市街(栗沢町)と幌向村(南幌町)を結んでいます。この橋は、昭和十年に完成したのですが、長さが約五百四十メートル、幅は約五・四メートル。当時は信じがたいほど大きな橋でした。

戦争中には、鉄を供出するため

に橋は解体され、半分くらいが木の

橋になったため、戦後元どおりにす

るのに長い年月がかかりましたが、

荷馬車の頃は充分だった橋の幅も、

車時代に入ると大型車が交差でき

ず、たいそう不便な状態が長く、

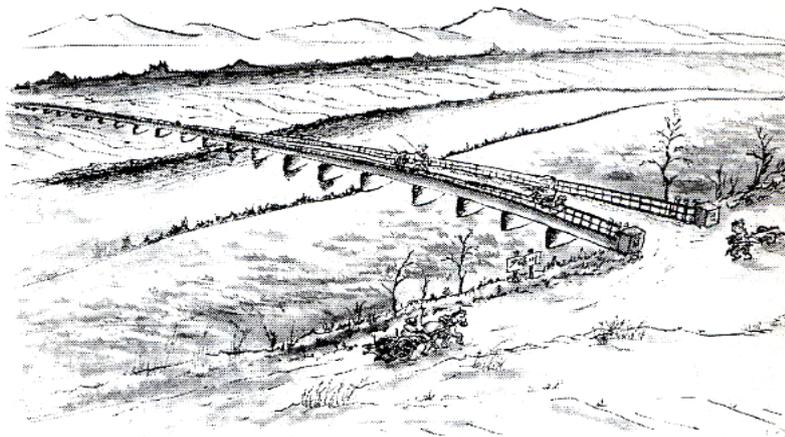
現在の形に改修されたのは、なん

と昭和六十一年のことでした。

さて、最初の橋が完成して間も

ないころ、真夜中に橋の中ほどを

自転車を通りかかると、地から



突き上げるような音がするという噂がたちました。長老たちは、橋の工事が困難を極めたころ、多くの労働者やタコと呼ばれた土工夫たちが酷使され、人柱となつて埋められた者もあつたことなどを思い出し、この音は犠牲者の靈魂が救いを求めているのではないかと恐れました。ところがこの話も、橋げたと橋げたの間隔が広い中央付近が、気温の変化などのために鳴るのではないかということになり、噂もしだいにすまづつていったのでした。今はこの橋から川を見おろしても過去にどんなつらく悲しいできごとがあつたのか、知る人は少なくなつてしまいました。

## おへその神祕

一時期中断されていた北海道未開地貸下げ制度が復活したのが明治二十六年でした。

- 一. 土地は無償(ただ)で与える。
- 二. 土地は肥沃なので、無肥料で耕作できる。
- 三. 税金は免除される。
- 四. 酒は安くてもある。
- 五. 徴兵令が布かれていない。

このような宣伝に、狭い農地しかなく苦しい生活をおくつていた人々は色めきたちました。

たとえば、物荷という荷運びを職業としていた北陸地方の人々は、鉄道の発達により仕事が少なくなつていました。

「ほんじゃまあ北海道に渡り、ひと旗あげて故郷に錦を飾ろうか」といつたふうに、大移動が始まつたのです。

ところが現実はなまやさしいものではありませんでした。

土地はただでくれるはずだつたのが手続きに時間がかかり、許可がおりたところには予定の原野は、ほとんど手つかずのままほかの人に転売されて値上がりしているのです。事情のよくわからない人や資金不足の人は、もつと奥地に入るか小作として入植するしかありませんでした。おまけに、せつかく小作として開拓したのに、無肥料でよかつたのは二、三年だけで、その上、病虫害や水害に悩まされました。

農作物の価格も不安定で、とても故郷に錦を飾るところではなく、多くの開拓者は、その日その日を暮すのがやつとでした。

田子作さんもその中の一人で、休むことなく働き続けていました。とくに刈り入れどきは、夜遅く泥足のまま囲炉裏まで這いあがり、飯をかつこむが早いのか、そのままゴロ寝。ちよつとまどろむと朝になっているというありさまでした。

そうした着のみ着のままの暮らしが幾日も続いたある秋のことでした。

田子作さんはお腹のあたりがちくちくするのに気づきました。

でも、どうせゴキウくずだらけの体なんだからしかたがないと、着ているものを脱いで調べることはしませんでした。

ほうつておけば体のほうが慣れてくれるだろうし、調べる暇があったら、稲の一株でも余分に刈ったほうがいいと思っていました。

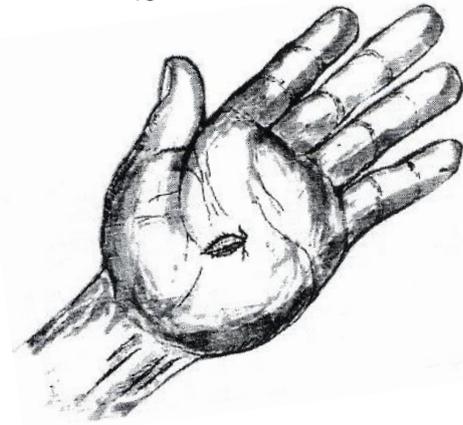
やがて、ちくちくした痛がゆさもおさまり、一週間がたったころ今度は今までと違った痛みを感じるようになったのです。

田子作さんは、やつと裸になる決心をして、おへその点検にとりかかりました。するとどうでしょう。おへそのくぼみから、白い糸のようなものが見えるではありませんか。

およよ！ 田子作さんはおもむろに、おへその穴に巣食う白い物体の掘り起こしにかかりました。丁寧に取り出したものは、なんと発芽したもみ粒だったのです。

さてこの話は、田子作さんには申しわけありませんが、もみをそのままにしておいたら、どこまで成長したものでしょう。

体温で温かいし、あかだらけの体は栄養十分だし、本葉の一枚でも開いたら、ギネスものだったでしょうね。



## お菊人形

通称フルーツロード沿いの万念寺は、『お菊人形の寺』として、ちょっとした観光スポットになっています。万字幸町の万念寺に安置されているお菊人形は、身長三十センチメートルほどのごく普通の日本人形です。そのお菊人形がどうして日本中の人々に知れわたるようになったのかお話ししましょう。

この物語は、大正七年（一九一八年）八月十五日、鈴木永吉さんが、ちようど札幌で開催されていた大正博覧会を見物したことから始まるのです。札幌に出かけた永吉さんは、狸小路商店街で、妹菊子へのおみやげに、おかつは頭の胸の鳴る人形を買い求め家に帰りました。菊子はいたいそう喜び、寝てもさめても人形を抱えて楽しんで遊んでいましたが、不幸にも翌年の一月二十四日、わずか三歳で死んでしまったのです。お葬式の時、大切にしていた人形を棺の中に入れて持たせるのを忘れた鈴木家では、お骨といっしょに仏壇に祀り、菊子を思い出しながら毎日お参りしていました。

そんなある日、ふと気づくとちようど肩のあたりまでしかなかった人形の髪の毛が、肩をすっぽりおおうほど伸びているではありませんか。

鈴木家では、菊子を思う気持ちが通じたのかも知れないと、ますます熱心にお参りしました。

やがて時は流れ、昭和十三年八月十六日、樺太に移住することになった永吉さんは、父親助七さんのお骨と菊子の形見の人形を万念寺に託して旅だったのです。万念寺では、人形を納骨堂に安置していましたが、由来を聞いた人々が参詣に訪れるようになったため、お内陣に祀ることにしました。預けられたときの人形はローソクや線香でひどくすすけていて、顔や着ていた着物も真っ黒だったのですがきれいに拭かれ、着物も新しいものに替えられて、金箔の厨子に安置されたのです。

終戦後、樺太から引き揚げ、供養のため万念寺を訪れた永吉さんは、人形の髪があきらかに伸びているのに気づき、あらためて驚いたということ。近頃では、髪伸びもゆるやかになりましたが、毛先は腰のあたりまできているそうです。しかも、閉じられていたはずの口元が、いつのまにか



わずかに開き、ほほえみかけているように見えるとか。菊子の人形はいつしかお菊人形と呼ばれ多くの人々がお参りするようになりました。今でもお菊人形は四季折々晴れ着に着替え、柔らかなお顔は参詣者の心をなごませてくれているのです。

## 裏通りの芝居小屋

清真布市街地の道路は、表通り（一条通り）裏通り（二条通り）茂世丑通り（駅前通り）と、およそ三つの呼び方が戦後まで続いていました。表通りは、本通りだったかも知れませんが、裏通りに対して表通りという呼び方が定着したのかも知れません。

表通りは商店街、裏通りは住宅街、茂世丑通りは飲食店街という形は、現在もそう変わっていないようです。

表通りの道幅が、昔とほとんど変わっていないことは、先人に将来を見る目があったというべきでしょう。

それに比べて茂世丑通りは、冬になると馬そりが頭上を通るようになるほどひどく狭い道でした。この通りは、清真布に製麻工場があった明治後期から大正期にかけ、飲食店が繁盛したそうで、道の狭いことがかえって良かったのかも知れません。

さて、いよいよ裏通りの話です。

裏通りといえば、人生の裏街道といった言葉やさびれた裏町を連想しがちですが、清真布の裏通りは、呼び名とは裏腹にいつも活気づいていました。この通りは南と北ではかなり様子が違っていました。

茂世丑通りを境に、南の方は商店が軒を連ね、どちらかという第二商店街のような雰囲気がありました。北の方は、茂世丑通りに近いところから、一、三軒の飲食店、魚菜市场、芝居小屋、太子堂などがあつて住宅が続いていました。栗沢座という芝居小屋があつたのは、今の市民センターに通じる交差点付近です。

初代栗沢座が茂世丑通りに建つたのは、明治三十六、七年頃のことです。小屋主は佐藤平作という人でした。ここでは芝居や浪曲が興行されていたようですが、同四十四年の大火で全焼したのです。

そのあと佐藤は同じところに小屋を再建しましたが、これも大正四年に二階から出火して、休止状態になっていました。

三代目の栗沢座が裏通りに開業したのはいつだったのか、定かではありませんが、井原徳太郎が建築し経営を始めました。

時の流れとともに、興行は活動写真(映画)へと移っていき、呼び込みも盛んになっていきました。ちんどん屋も人目を引きませんが、馬車や馬そりの上で太鼓を打ち鳴らして呼び込みが通ると、子どもたちが大勢その後について歩いたものです。

このように、裏通りは歩行者天国と遊園地が共存しているような楽しい空間となることもしばしばでした。

芝居小屋の前にはのぼりが立ち、入ろうかどうしようかと迷う人々がたむろしていました。

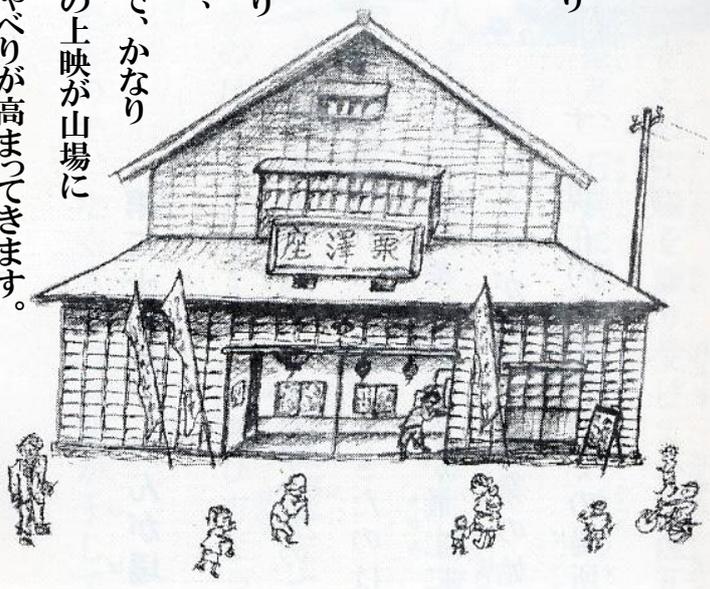
小屋の中は寄席劇場の造りで、両側が小上がり

のような少し高い板敷き、真ん中の客席は畳敷きで、かなり

の広さでした。活動写真の上映が山場に差しかかると、弁士のしゃべりが高まってきます。

期待通り正義の味方が現れると、このときばかりは大人も子どももいつしよになつて歓声をあげ、拍手を送るのでしたが、こうしたにぎわいも、戦争が激しくなる中で次第にさびれていき、昭和十八年の火災で栗沢座は完全に消滅してしまいました。

昭和二十五年、表通りに栗沢劇場ができるまで、こうした娯楽の場はなかったのです。



# 電報の功罪

栗沢町の農村地帯に電話や自家用車が普及しはじめたのは、昭和四十年頃ですから、そんなに古い話ではありません。つまり、最近までは足腰を使って生活していたということです。

さて、電話がない、車がないという時代の急ぎの伝達は、どのようにされていたのでしょうか。たとえば葬儀の連絡などは、必ずといっていいほど電報が利用されていました。その電報も、郵便局で指定された一定の距離であれば、なんとかその日のうちに配達されましたが、少しへんぴな場所になると、真夜中か翌日に届けられました。

料金は一字毎に計算され、濁音や半濁音はさらに一字加算となっていました。経済的に細かな時代でしたから、利用者はできるだけ電文を省略するように心がけました。

次の電文は、昭和十年頃のもですが分かりますか。

『アンサンソクシ』

この電文を読んで、家族はあわてました。

アンサンをそのまま読めば、兄(あん)さん、すなわち長男のことだと思ってしまう。ソクシとは即死(そくし)でしょう。

大変なことです。ところが兄さんの奥さんは出産が間近でした。

これは『安産即死』と読むのかも

知れません。

人の死に重い軽いがあるはずは

ありませんが、働き盛りの兄さんが

急死したのと、お産の状態が悪くて

生まれたばかりの赤ちゃんが死亡

したのでは受け止め方が違います。

電報を受け取った方にも、やはり

二通りの解釈があつたそうです。

葬式のとときは、手伝いの人が家族

のかわりに電報を打つことがよくありました。

アンサンという呼び方は敬称です。手伝いの人が打つたのだろうか

ら兄さんに違いないとの結論になるのです。というわけで、おいおい泣

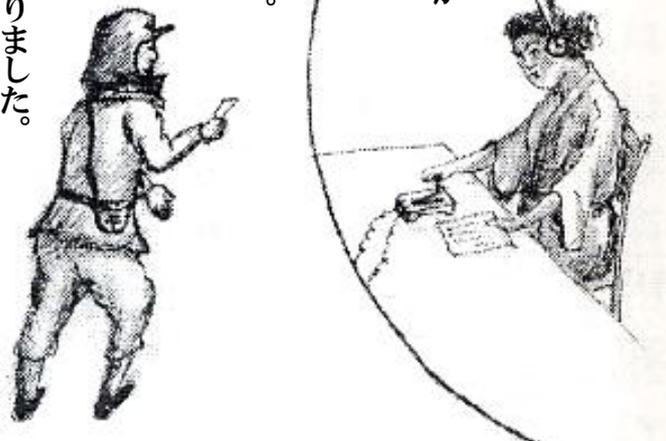
きながら兄さんの家にかけてつけたのでした。ところが兄さんは元気で

ぴんぴんしています。びっくりするやら恥ずかしいやらの大騒ぎ。

もとをただせば、兄さん本人が安産の濁音の一字分を儉約したば

かりに、とんだハプニングとなつたのでした。

こんなときに料金を儉約した兄さんは、ひたすら謝(あやま)ったそうです。



# マドマイは帰らない

マドマイは十八歳。コタン(集落)では最も将来が有望な勇気ある青年でした。ここには同じ年頃の青年が三人いるのですが、一人は病弱、一人は狩猟にかける意気込みが足りませんでした。その点マドマイは、五、六歳ころから父親に連れられて、原始林の中のイオルという生業上の領域をくまなく歩いていたので、地形はもとよりよく知っていました。況判断も確かでした。

このイオルは、幌向川と夕張川の間にあつて、となりのコタンとの仲も良く三十年来、争いごとはありませんでした。

「和人が勢力を伸ばしているときに、仲間同志が争っているのは話にならない」というのが、コタンコロクル(村長)の信念だったからです。

とは言いながら、生活するためには狩猟をしなければならずまた、和人と交易もさかんになり、特に熊の毛皮が求められていたことから、マドマイもよく狩りにでかけました。

狩りに夢中になっていると二里や三里は知らぬうちにかげぬけてしまい、イオルの細かな約束をはつと思ひ出してあたりを見回すこともしばしばでした。でも、こちら側で手負にした獲物は、イオルを越え

ても権利が認められたため、かなり深追いすることもありました。

このイオルを生活圏としたコタンは石狩川の近くで、周辺には湿地が多く住居はやや高台にありました。

五里ほど上流のヤムオナイ(栗の多い沢)まで入ると、栗の木がたくさん見られ、秋ともなると鮭が群をなして川を上ってきます。そして鮭をねらうヒグマなどの獣も奥地から下りてくるのでした。

この獲物を求めコタンの男たちは勇んでコタンを離れるのでした。

マドマイの父は、数年前にキ、オマ、プから二里ほど離れた幌向川左岸にクチャ、チセ(狩り小屋)をこしらえました。間口九尺、奥行二間の笹ぶきの拝み小屋です。男たちは狩猟のため、季節毎にかなりの距離を移動しなければなりません。そのため住居兼狩猟基地として仮小屋が必要でした。マドマイ父子は、幌向川を丸木舟でさか上り三日がかりでこのクチャ、チセまでやって来ました。

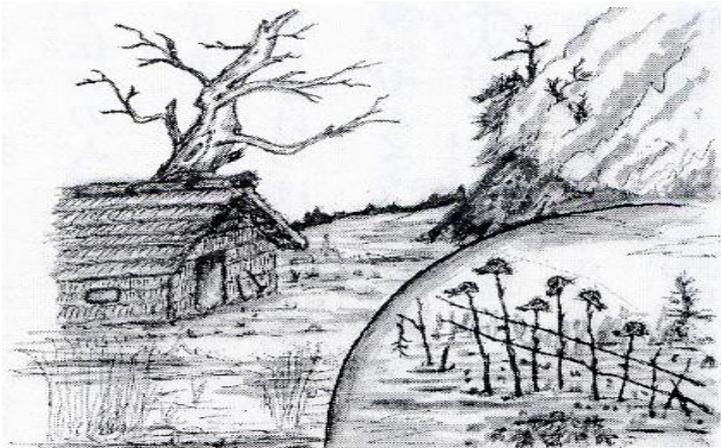
太陽が右に見えたり左に見えたりするような曲がりくねった川でしたが、陸地の道なき道を踏み分けるよりもずっと楽です。舟は長さが十五尺、手間ひまをかけヤチダモを削って作ったもので、生活に必要なものも積み込むことができました。舟はタシロというカイで動かします。これは舟と同じくらいの長さがありました。

目的地に到着し荷物をおろすと、舟を引き上げ持ってきた鎌で穴を掘ります。二尺ほどの深さになったところで舟を埋めるのです。

これは洪水こうすいになったとき、舟の流出を防ぐためのものでした。クチャ、チセの中には物干し竿ぼほのように横木が渡されていて五頭の熊の頭が吊るかされていきました。クチャ、チセで過去かこに五回のイヨマンテ（熊祭り）が行われたことを意味します。熊はキムン、カムイと呼ばれ、その霊れいが食糧しょくりょうに困こっている人々に肉にくという食糧をもたらしにくれると信じられていました。熊祭りで子熊を殺すことは、キムン、カムイの化身が、背負せおってきた荷物（肉、脂あぶら、毛皮、胆きせなど）をおろし、霊となつて天上てんじやうに帰る儀式ぎしきなのです。

子熊を捕とらえると、コタンでは「幼い神様がいらした」と唱となえて「迎え人間のお乳ちちで育てます。」

そうして歯はが生はえると、今度は丸太を組んだ檻おりにいれて飼育しよくするのです。熊祭りはヌサ（祭壇さいだん）の広場で二、四日にわたつて行われます。このとき狐きつねや兔うさぎなどの霊（神）は熊の霊に荷物（お土産など）を背負う役を引き受けるのだそうです。こつしたことをマドマイは父親から教おそわるうち一年が過ぎました。



その年、ちょうど四十歳になる父親が病気になる、クチャ、チセに來ることができなくなりました。マドマイはコタンの仲間に手伝つてもらい、ささやかな熊祭りを行いました。六個目の熊の頭が吊るされ、新しくシナの木の皮のイナウ（木幣きへい）が目と口につけられます。祭りが済むと、コタンの人々はそれぞれのチセ（家）に戻り、マドマイは生まれて初めて一人で熊撃うちにいとむことになりました。

ある日の夕方、仕掛しかけてあつたアマツポ（畏わなの一種）が鳴りました。マドマイが駆かけつけてみると、射止められたはずの熊は影も形もなく、そこから幌向川の上流に向けてなまなましい血のあとが点々と続いていました。マドマイはいつになく胸騒むなさわぎを覚おぼえました。これほどでもない大物だ。なんとか仕留しとめてコタンで待つ父を喜ばせたい。手負こわいの熊の怖こわさを知りながらも、マドマイはやる心をおさえることができませんでした。勇気ある青年マドマイが、再び仲間のもとへ帰かへつてくることはありませんでした。

それから十数年、栗部開拓のさきがけとなった松崎半五郎がこの地に入植してきました。松崎は、アイヌの残したクチャ、チセを開墾かいこんの仮小屋として利用しました。

小屋の近くにはハンノキの幼木が生えていたそうです。もしかしたらマドマイが小舟を埋めた場所だったのかもしれない。

# 昭和十五年の学級だより

今でもみなさんの学級担任の先生は、学級だよりを作っていたらうっやいますね？ クラスのみんなの顔を思い浮かべながら、心あたたまるおたよりを書いてくださる気持ちは今も昔も変わりありません。

ここで、昭和十五年に書かれた小学六年生担任の学級だよりをご紹介します。文中で『二六〇〇年』とあります。

この年は初代天皇が国をおこしてから二六〇〇年目にあたるといふことで、日本中でいろんな行事が行われました。

忘れえぬ数々の思い出を包みながら、紀元二六〇〇年は間もなく暮れようとしています。ここに、二学期の仕事をほぼ完了して、この学級だよりを書いています。

今ふり返ると、新学期早々から猛勉のくせをつける計画をたてました。その基本として、「何クソ負けるものか」という向上心と、「自分の行動には絶対に責任を持つ」という、自立心の二本柱を目標にしました。どうでもいいんだという気分をふりはらい、責任感のある、やる気充分の子どもに育てたいという考えからでした。これは、春に植えた苗が秋でできるようにはいきません。教育は百年の大計です。

そこで私は、左記の七項目を重点的に考えました。

一・勉強の道具を決して忘れぬこと  
忘れたら取りに行く事。

二・家では毎日のごとく勉強する事。

三・宿題をびしびし出す事。

四・日記を書かせ、日々を反省させる事。

五・買え得るなら、木山の読方、  
算術を買って勉強する事。

(木山 Ⅱ 参考書の出版社)  
六・規則に反すれば罰当番。(お叱り  
があるやもはかりしれず)

七・各組に分かれて勉強を競争させる事。  
しかし、こうびしびしやっていたら、落ちつきのない子どもから

ぬ子どもになりやせぬか。おおらかな子どもを育てる事は不可能か。

これが最大の疑問でしたが、私は休み時間を全部子どもと共に大いに遊んで、お互いの信頼感を深めるように努力しました。

夏休みも三週間で終わり、すぐに勉強にかかりましたが、児童は自分たちで組を作って大いに活動していました。慰問袋などもどんどん送っているようでした。



兵隊さんの喜ぶ郷土の品、兵隊さんの家の稲穂、手製の人形、鬼の面、ふうせん、そうしたものを送ってもらった兵隊さんの予想外の感激が、学校の方へぞくぞくとお礼状となって届いています。

九月には、東、西、由良、岐阜尋常小学校の四校連合運動会が、我が東校庭で行われました。全校一致力闘の結果、まことにみごとに制覇をなし遂げました。三年ぶりに見る優勝旗に歓喜する児童の笑顔を見て、私の頬には快心の笑みをかくす事はできませんでした。十月一日から十日まで農繁休暇を行い、各自家庭において懸命に働き、出征家族の田んぼに児童だけで手伝いに行く組もありました。冬に入ってから私は、風邪をひいた事をうっかり子どもたちに話したところ、翌日男子生徒が全員で、「先生早く風邪をなおしてください」と、真新しいユタンポを買って持ってきました。私はその夜、温かいユタンポに足をつけながら、子どもたちの美しい心にほろりとなりました。

一学期の成績は非常に好いです。  
これによって子どもたちを発奮させる意図ですから、父母の方々には愛情をもって奮励させてください。

## 太郎兵衛の猫

日が沈むとそこかしこでケラの声がして、どこからか聞こえるやぐら太鼓の音が、穂の出たばかりの田んぼの上を流れていきます。

今年、夢にまで見た造田がなつて三作目。どうやら豊作まちがいなしのようです。この地方の踊りは、開拓以来、『おんど』や『ちよんがれ』に合わせて踊る『さかた踊り』が主流です。おんどは浄瑠璃の台本を独特の節回しで歌うもので、ちよんがれは節回しがまるく、踊り衆のはやしも入つてにぎやかです。ともかく御盆のころは、お寺を中心にして大勢の人々が集まり、踊りに夢中になったものです。

その夜、境内はいつになくごったがえしていました。ちよんがれの中でも一番人気の『目蓮尊者』が、笛や囃子とともに響きわたっています。

♪ 弟子の目蓮 涙を流し さてもいたわし

母びとさんや あとへ帰らぬ

ありさまなりと とかく嘆かせ給うなり

ちよんがれがひと区切りついたとき、突然ひとりの若者が歌い出したのです。

♪ わたしやつのだの 太郎兵衛の猫じゃ

にしんぼ食いたい かいぼし食いたい

姿かたちは人間なれど なにをかくそう 化け猫じゃ

踊りの輪が乱れ、聞いたこともな

いちよんがれに人々はどよめき

ました。歌声は男のものとも女

のものともつかぬ不思議な声で、

旋律にも言うに言われぬ哀調

がこもっています。

櫓の太鼓の音がやんだ一瞬、

数人の若い衆が、声の主を取り

囲みました。そこには猫背の若

い衆が立っていました。手ぬぐい

で顔をかくしています。足元を

見ると、白くきれいな足が二本。

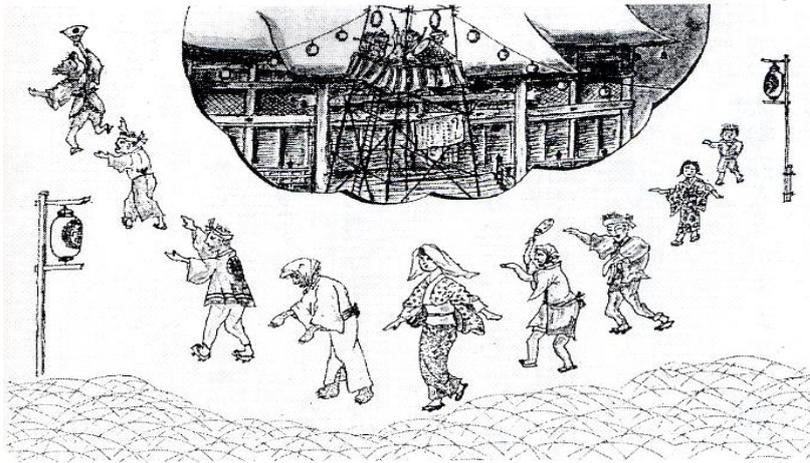
よくよく目をこらすと、足は

真っ白い毛でおおわれているではありませんか。

「猫だあ！ 化け猫だあ！」、境内は大騒ぎ。騒ぎがしずまったとき、

その猫は姿を消していました。はたしてそれが化け猫だったのか、誰か

が仮装して皆を驚かしたのか今もって分からないのです。



## 馬バツの話

道道三笠栗山線の幌向川に

かかる上幌橋は、今なら数秒で

通過してしましますが、昔は

渡船場でした。その名残として岩見沢側の

地名を渡し場といい、小市街地の形状がある

のです。このルートは、明治二十年代に作られた

岩見沢から夕張へ通じる二ルートの幹線道路のうち

の一方でした。その頃、幌向川右岸の旧渡し場に石井

藤造という人が住んでいました。駄馬十数頭、アイヌの若者数人を雇

い運搬の仕事をしてたと伝えられています。当時の運搬手段は、駄

馬に荷を乗せて引いて歩くのが一般で、馬車の普及はもつと後のこと

でした。荷馬車はすでに作られていましたが、ひと握りの砂利も入って

いない悪路では荷馬車を引くことなどできませんでした。しかも、二、

三日雨が降り続けると、馬の足跡が『馬バツ』と呼ばれる大きな深い穴

になり通行はますます困難になります。

当時の様子が想像できる二点の文章をあげてみましょう。



◎ 辻村もと子作『馬追原野』より

今年の雪解けは早く、三月の終わりにはどこの道もすっかり乾いてい  
たが、この夕張道路この場合は、現国道二三四号線の一部は、土地  
が粘土質のために四月になってもまだひどくぬかっていた。そのうえ  
馬蹄のあとで、こねかえしこねかえししているのだからまったくもので  
はない。凸面に足をかけたと思うとつるりとすべって、ピシヤリと泥水  
の中に足が落ちる。はね上がった泥は足や腰だけではない、顔にまで  
はね返ってきて、気がついてみると誰の顔にもうす青く乾いた泥がこ  
びりついていて、さすがにみな尻まくりで歩いている。

後から馬子が一人、道に沿った林の中を走るようにして巧みに七、  
八頭の駄馬を追いながら近よってきた。これはまだ鉄道の通じない夕  
張へ物資を運搬する唯一の方法であった。馬はどれも毛色もわからぬ  
ほど泥を浴び、バシヤンバシヤンと悪路を喘ぎ、背中の荷をゆすりゆ  
すり速足で一行に追いついて来た。

◎ 開拓者 本田栄三郎談（昭和三十九年刊 栗沢町史より）

明治二十九年秋から収穫物を相当な量を販売するようになり、  
十月の雨期になって駄馬で搬出したが、『馬バツ』といって、一足一足  
の穴ができ、その深さは馬の足の中ほどまでぬかるため、馬は小豆二  
俵をつけて道路に立往生することも珍しくなかった。

（中略）

当時は道路に砂利が入っていないため、秋になれば膝までぬかる悪  
路となる。そこで次から次へと道路わきの畑を通行して、道路幅が十  
間にも十五間にもなる。ところがその踏み固められた畑は翌年耕す  
のに非常に困難するばかりではなく、作物のできも悪い。そこで畑主  
は横木を置いたり、落とし穴を掘ったり、糞尿を撒き散らしたりし  
て通行を防いだが、それでも道路を通るよりは歩き易いため畑へ入っ  
たものである。道路ひとつ歩くにも、舗装に慣れた私たちには想像も  
つかぬ苦勞があつたのです。

なお、確かではありませんが、馬バツの『バツ』は、『鉢』が訛つたのでは  
ないかという説もあります。

みる と

## 美流渡の地名のおこり

すぐそばにいても気づかないことがありますか。そのよい例が栗  
沢町内の美流渡です。このように『美しい流れを渡る』という地名は、  
おそらく全国どこを探しても見つからないでしょう。

一時、駅名切符のブームがあつたことを覚えていますか。旧広尾線  
の『愛国から幸福行き』などは特に有名でしたが、旧万字線の『美流  
渡から志文行き』は、地元のP Rが足りませんでしたね。だって、『美

しい流れを渡り文に志す』なんて、すぐロマンチックじゃありませんか。少しは売れたと聞きましたが、時の流れの彼方です。

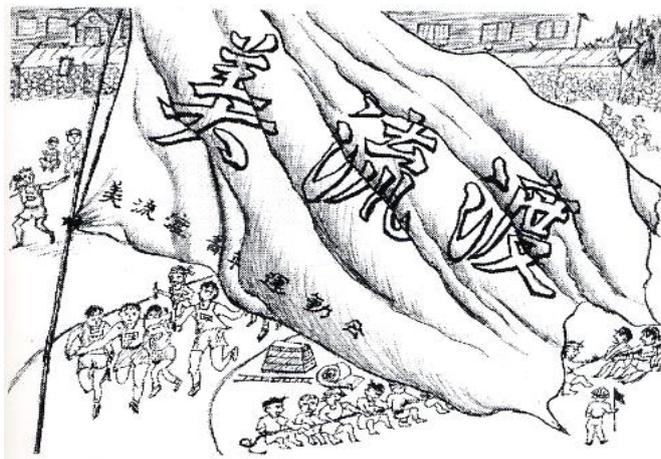
みなさんは、このように素晴らしい美流渡の地名のおこりをご存知でしょうか。これはアイヌ語のミルトマップ、またはミユルトマップから名づけたものだといわれています。しかし町史などの文献によると、語源が分かっているが意味が不明なのです。ところがこのことで最近とても歴史的な発見がありました。町内の小学校が統合される前まで砺波地区にあった、東豊小学校の記録の中に郷土資料と題されたものがあると分かったのです。それは同校の前身であった東尋常小学校が、昭和八年に独自の調査をしたものらしく、両面罫紙にペン書きで、一一六ページにわたり記載された当時の貴重な文献です。内容は十六項目に及び、その第二項目に『地名考』があります。ここで美流渡のところを紹介しましょう。

美流渡（みると） 原名 ミルトマップ || 川の先にある沼

今は沼はありませんが、余程古い時代にはたしかに沼があったらしい事は付近の地形から見ても考えられます。この沼のことについては辻村氏の奇談も残っています。これらの記述から推測すると辻村氏とは、志文開拓の祖辻村直四郎（一八七〇〜一九四一年）であることが分かります。ただ、歴史的証言ともなった奇談ですが、辻村直四郎の日記に、『山歩きをしていて道を見失いさまよっていたところ、坂東

氏に助けられた』との記述があり、その場所が美流渡の沼あたりだったのかもしれない。また幌向川は、美流渡付近でシコロの沢川やマップ川などの大きな支流を集め、下流でもさらに大小数本の支流を加えています。古老の話を総合すると、かつて美流渡にはかなり大きな湿地が広がっていたそうです。それが炭鉱の開発とともにズリによって埋め立てが進み、今となつては当時を想定することが難しくなっています。ただ、この地では川の曲がりや突然急になるなど、著しい蛇行を考えると沼があつても決して不自然ではありません。その昔、アイヌの人たちは狩猟などの移動のために、舟で奥地へ上流へと幌向川を遡って行つたのでしよう。

「よつしゃ、もうひとふんばりだ。少し先へ行つて右へ曲がると沼があるぞ。そこでひと休みだ」本当でした。じきに急流がおさまり、沼が見えてきました。湿地も広がっていて、水鳥が羽を休めています。あちらこちらに魚の描く水紋が安らぎを与えてくれます。人々はそこで思いきり自然のエネルギーを蓄えたのでしよう。



# 茂世丑神楽

茂世丑備後神社の神楽について、地元の人さえ詳細を知る人はほとんどいなくなりました。茂世丑神楽の全盛期は大正年代であり、

当時の栗沢における郷土芸能は、礪波獅子舞と茂世丑神楽が双璧で、世間の注目を浴びていました。北海道で郷土芸能が育つ条件としては、同郷であること、同宗であること、血縁であることなど、いくつかの条件が重なり合っていることは確かです。茂世丑神楽については、茂世丑に入植した備後団体を知らなければ、いきさつを知ることができません。備後団体は、広島県備後国沼隈郡百島の村上宗一の提案で五十九戸を組織し、明治二十八年に九〇万坪の未開地貸下げを受けて、茂世丑に移住したことに始まります。

百島は人口増加にもかかわらず、農地が狭く、営農生活が年を追って苦しくなってきたことから、村上は事前に来道、各地を踏査してこの地に新天地を求めたのでした。入植人口は総勢二五五人。

明治二十七年の百島人口二二三七人の十二パーセントにあたる大移動であったことが分かります。艱難辛苦の末、開拓も進み安定した明治四十年頃に、移住者の郷里への強い思いから、有志が集まって、百

島の神楽を受け継いだのです。神楽は開拓の御神霊を崇め、悪魔払い、願掛け、先祖の供養、家内安全等を祈願するものでしたが、楽しみの少ない当時は、健全娯楽としても移住者の心を癒したものでした。

例年九月の備後神社秋季祭典には、十種余りの神楽が奉納されましたが、出演者と観衆は知らず知らずのうちに一体感を育み、地域の団結は揺るぎないものに発展していったのです。

特に大正十二年の開村三十周年記念式のアトラクションとして出演した時、演目は悪魔払いや盆踊り、天の岩戸、牛若丸などが大盛況で観衆は夜半まで酔いしれました。その陰には稽古の上に稽古を重ねる厳しい練習がありました。

例年お盆を過ぎると備後青年会の会員たちは、先輩から連夜のように指導を受け、秋祭りの出演に向けて猛練習に励みます。

その後、時代は移り戦時体制となつて、若者は兵隊に取られ神楽の継続は困難になりました。こんな中で、悪魔払いだけは赤松清一郎（一八八四～一九六七年）によつて終戦直後まで継承されてきたと伝えられています。

当時の事柄を断片的につないでみると、次のようになります。道具や衣装は多種多様で、長持二棹にびっしり収納されていたそうで、中でも衣装は、赤地に金糸のししゅうがほどこされた鎧用の袖なし、ピンクの基盤じま様の絞り染めの着物、豪華紋様の袴、これ

らの赤系に襷や袖口が目のさめるような水色に彩られると、その絢爛さは異次元世界のものでした。

面については、天狗、

鬼、おかめ、ひよつこ、

そのほか人の表情を巧みに

表現したものなど多種。烏帽子

は深紅の地に金色の太陽を模したもの、

オレンジ色や赤にしつらえた頭髪の被り

ものなどがあつたそうです。手に持つ道具

は、竹の葉のついた枝、御幣、鈴、太刀、薙刀、

鉞、扇子、盆などが演目によって使用されてきました。

このように得がたい郷土芸能も、戦後は継承者の高齢化、町外への

転出により、急速に過疎化が進み次第に先細り、昨今ではすっかり過

去のものとして封印されてしまったのです。こうして残念ながら茂世

丑神楽は消滅してしまいましたが、風の便りによると、郷里の尾道

市百島では百島神楽保存会によって立派に継承されているそうで、ま

じかに嬉しんでいます。

(編集註)

衣装や道具の説明や呼称に間違いがあるかも知れません。



## 蛸壺造田

このお話は、それほど昔のことでは

ありません。昭和三十年代後半

から四十年代前半にかけて行われ

た、丘陵地帯の蛸壺造田のお話

です。でも、わずか三十数年前のこ

となのにあの燃えるような意気込

みと血を吐くような苦しみもいつ

の間にか人々の脳裏から遠ざかり、

急速に風化の一途をたどっています。

その頃まさかと思われていた由良地区の三五〇余町歩で、二段

揚水による夢の造田が現実に行われることになったのです。

このことが水田造りを望んでいた丘陵地畑作農家を刺激しました。

特に茂世丑地溝帯(茂世丑、上幌、宮村)は、自然が作り出した稲

作には絶好の環境なのに、惜しいことに水源の確保が容易でないこと

がネックとなっていたからです。丘陵地の農家は立ち上がりました。

他力で実現不可能なら、自力で蛸壺を掘り、米を作ろうと行動を



起こしたのです。当時はまさに高度経済成長期に入っており、個人でブルドーザー工事を施工することも容易になっていました。

一方、わが国の米不足は慢性的に尾を引いており、戦時中には食糧管理法が制定され、戦後は農業共済制度が確立されるなど、価格保証とあわせて冷災害があっても相応の給付がなされるようになっていました。このような背景から、蛸壺造田という大掛かりな投資にも力強い追い風があつたのです。

こうして町内の丘陵地帯を中心に造成された蛸壺、すなわち小規模溜池は、最盛期には五百を越えたといわれています。五百個といえれば信じがたい数字ですが、一個の大きさが二反から三反程度のものであつてみれば、一戸あたり三個の蛸壺を造つたとして、一〇〇戸の農家で三百個ということになります。この時代は、茂世丑地溝帯だけで蛸壺が約三百四十個あつたという説を考えると、かなり大規模に造田が推進された歴史的な改革だつたことが分かってきます。

さてさて、蛸壺は掘つたものの、その多くは冬の降雪が溶けた溜まり水だけで補水がなく、日照りが続けば目に見えて減水したのです。

雨を待つて田に水を入れ、一枚だけ代掻きをしては雨を待つという辛抱と忍耐がしいられました。にもかかわらず、水不足のため早苗を枯死させたり、出穂間近に干ばつでやられたこともしばしばだつたそうです。その頃栗沢に行けば、無数の蛸壺を見ることができるとい

う噂が噂を呼び、釣竿をかついで物珍しさにレジャーを楽しむ人さえ現れる始末でした。こうして一時期は、鯉の養殖も試みられましたが、プランクトンなど天然の餌不足のため成功せず、自然消滅になつたようです。

ところで話はあと先になりますが、蛸壺とは蛸漁に使われる素焼きの壺が語源のようで、戦時中は本土決戦に備えて、一人がやつと入れるほどの塹壕があちこちに掘られ、これを蛸壺といたつたそうです。灌漑用の小さな溜池がどんどん掘られていくありさまを見て、誰かがきつと「蛸壺のようだ」といつたのでしよう。

それにしても、茂世丑地溝帯は小高い丘からながめると絵はがきを見るような美しさです。水をたたえた溜池が陽光に映える情景は、まさに異次元の世界を演出させてくれたのです。

時は移り幌向ダムが完成し、灌漑水の安定供給がなされている今日、低農薬や有機栽培、高品質の農作物等、好きなたけ米を作ることでできないもどかしさを抱え、米農家はどのように生きていったらよいか模索の仕様がありません。

#### 《補説》

蛸壺造田は、昭和三十年代に始まつた。それは栗沢地区の山岳地帯、宮村、上幌、茂世丑地区畑作地帯で、当時の時代背景として景気が上昇気流にあり、米の増産が望まれている時であつた。

この地区は、大正の末に溜め池が造成され、沢地の低い土地は水田化されていたが、高台の畑は麦、蕎麦等の作付けしか出来ず、反収も少なく農家収入は微々たるものであった。そのため高額な負担を覚悟の上、圃場を整備し、動力を駆使して蛸壺造田に踏み切った。

造田計画は工費削減のため、等高線沿いに区画整備をし、溜め池は低地の集

水機能の高い場所を選び、その場所より約十メートルくらい上位の場所に補助池を作った。それは揚水機の揚水能力によるものである。

その機能は低地の溜め池に融雪水及び雨水を溜め、補助溜に発電機による揚水機で水を揚水、最上段の水田に通水、田起こしに灌漑、余剰水は下段の池に溜め、水を巡回させて使用した。面積にもよるが、一戸の農家で三〜五か所の溜め池を造成した。

その後、時代も変わり国営事業で幌向川に幌向ダムが造成され（平成二年完成）、それに伴い道営による圃場整備事業（昭和五十八年着手、平成十年完工）が行われ、蛸壺は消滅した。

一〜二か所の溜め池は観賞用の池として残されている。



## お兄ちゃんは手品師

てじなし

昭和六年（一九三一年）の夏、北海道炭鉱汽船株式会社、幌内鉱業所万字炭鉱の十軒長屋に、秋田県から来た女の子がいた。

二歳下の弟もアバ（母さん）に連れられて万字炭山へ来たのだった。

この子らのオド（父さん）が、その三年前から坑内で働いていたから、それからは家族揃って暮らした。鉱員住宅はハーマン長屋と呼ばれ、寿区と英区にあった。寿と英の間には、高くて長い吊り橋が架かっていた。この吊り橋は、大勢が一度に渡るのは危険なため、旗行列がある時は、小学生なら五十人位ずつに分かれて渡った。

十畳一間きりの十軒長屋は、その一棟だけが寿区にあった。

一坪の玄関と台所があり、押入れはあるが一部屋しかないの、居間、寝室、勉強部屋、客間と早変わりするのである。長屋の右端には共同の外便所が一棟建っていたが、四方から入る風変わりな建物で四つしかない。夜間や冬の間は行くのが大儀になる。子どもには無理なのでおまるは必要な品であった。

長屋のすぐ前には、食料品をはじめ生活必需品が何でも揃う寿分配所があった。分配所の前の広場の中心には、お盆になれば高いやぐ

らが建てられる。色とりどりの電球が四方に張りめぐらされ、やぐらの飾りつけは国鉄万字線きつての素晴らしさだった。

その頃、坑内で働く人は一日一円六十銭、坑外夫は一円二十銭位の賃金だった。二日遅れで一日分の稼ぎ高を書いた証明票(カード)が届いた。そのカードは現金に換えることもできるし必要な品物を配給所で買うこともできた。当時、北海道で一番おいしいといわれていた旭川米は、一俵(六十キロ)十円で、一日の賃金では清酒なら三升位買えた。でも満州事変が起こったり不景気な時代だった。

公休日は土、日曜と続き、祝祭日があったり体具合が悪くて休むと半月位しか働けないから、家族の多い家では生活に困っていた。

子どもたちはそんな親たちの苦勞など知るよしもなく、みんなで仲よく遊んでいた。真っ赤な太陽が沈み夕焼けが西の空を美しく染めるころ、谷間の狭い空を鳥の大群が真っ黒に舞う。

子どもたちは鬼ごっこやかくれんぼ、石けりなどをして遊ぶ。それを親たちはひとかたまりになって笑いながら見ていた。その子どもたちの中に聾啞の子がいた。その子は自分がかくれんぼの鬼になり、探しあぐねると必ず大人たちの顔を見るのだった。そして、その視線をたどり隠れている子を探し当てることができた。

子どもたちに一番の人気者は、長屋の一番右端に住むお兄ちゃんだった。みんなより五、六歳年上で高等科に上がっていた。外で遊べない

雨降りの日など、みんなでお兄ちゃんの家に行った。お兄ちゃんの特技は手品である。とはいっても一つだけだった。どの子も和服の時代で、男の子は筒袖、女の子は元禄袖の着物姿だった。お兄ちゃんの手元を食い入るように真剣に見つめている顔、顔。

今日こそは、我こそは種や仕掛けを見破つてやろうと  
して意気込んでいる。

お兄ちゃんは、なにやら

訳のわからない呪文をしばらく  
唱えながら、手のひらで紙玉を  
作る。そして「今日は誰にするか。

よし、ヤッチにしよう」とまず人を  
決める。それからもう一度呪文を

ぶつぶつ言い、ヤッチの袖に紙玉を入れる。

みんなが一斉に注目するお兄ちゃんの手には紙玉がない。そして、確かに入れられたはずの人の袖にもない。何度やっても同じ。そして、思いがけない人の袖から出して見せる。みんな狐に化かされたような顔を見合わせる。不思議を見せてくれるお兄ちゃんはみんなの憧れの的となり、兄のように慕い、いつもその家に押しかけて行つた。

七十年も昔の万字炭山長屋生活の一コマである。



# めもらいめもらい

朝の汁かけご飯はやめたほうがよいとか、夜に爪を切ると親の死に目に会えないとか、迷信を数えあげればきりがありませんがそれらを根拠のないものとして簡単に片づけてしまうのも味気ないですね。これらの言い伝えは、良いにつけ悪いにつけ、長い年月をかけてつちかわれた生活文化なのに、科学万能の現代には受け入れられず、消えてしまったものがたくさんあります。ここで、戦前まで残っていた身近なおまじないや遊びをご紹介します。

## ① めもらい めもらい

わりや なんくるる わりや

めもるくくつて はーしーれ ぼうちん

『ものもらい』『麦粒腫』など、たくさん呼び名がありますが、これは子どもにめもらいができたときに唱える言葉です。

子どもが年寄りの前にかしこまって座ると、年寄りを用意した一本の稲わらに輪のようにしたゆるい結び目を作り、それをめもらいに近づけます。呪文に節をつけて唱えながらわらを引っぱると、結び目がひとつできます。これを三回繰り返すと、わらには三つの結び目が

きるわけです。これを囲炉裏やストーブの中で燃やします。燃えるとき、パチパチパチと三回はじける音がするとおまじないは大成。めもらいはじきに治るといわれています。はじける音の数が少なかったり、鳴らなかつたりすると、治るのが遅いといわれているので、子どもたちは神妙に耳を傾けていたものです。

## ② しびれしびれ 京へ参れ ぞうりこーて (買って)

はーかーしよ (履かしよ)

わらじこーて はーかーしよ

大人でも長く座っていて足がしびれると、とてもいやなものです。特に小さな子どもはがまんできなくて泣き出すこともあります。そこで、しびれたところをさすったり、なでてやりながら、しびれが治るまでこの歌を繰り返すのです。

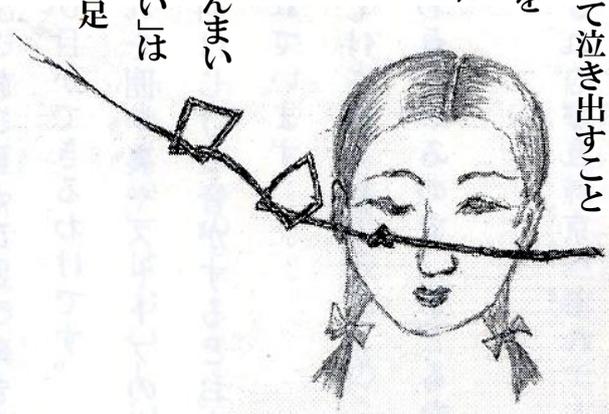
## ③ 白する かんする

だーるのこーみや んまい

〇〇(幼児の名)のこーみや んまい

「だーるのこーみや」は誰の米、「んまい」はおいしいの意味です。幼児の前に座って足のおいしさを合わせ、両手を持って体を押し

たり引いたりする遊びのときはやし言葉です。幼児の名前がチーコ



であれば、「チーコの こーみや んまい」と言いながら幼児を抱き寄せ、おおげさに頬ずりをしてやる遊びです。この他には、まむしのキン（ぬけがら）がイボ取りに効果があるとされ、よく利用されたようだが、そのあとがかぶれやすかった。これを治すのにも呪文が使われたようだが、今はその口上を知る人もいなくなったようです。

## れんが場ば

れんが場とは煉瓦工場のことです。栗沢にれんが場ができたのは明治四十三年。愛知県の人々が最上に工場を設けたのが栗沢の窯業の始まりです。現在の錦工業がその場所にあたります。

最上では、煉瓦や土管の原材料に適した粘土が地表近くでたくさん取れましたし、さらに鈴木木沢には良質の砂山があり、煉瓦の材料を調査するのに好都合でした。

最初は瓦や土管を製造していましたが、大正四年からは手抜き成型と、薪をたいた登り窯によって煉瓦が製造されるようになりました。大正五年に栗山の小林米三郎がこの工場を譲り受けて小林煉瓦工場となり、大正末期からは機械抜き成型と、石炭による輪環窯りんかんがまに改め、戦後まで製造が続けられました。

最盛期は年産二五〇万〜一八〇万枚に達していましたが、時の流れとともにコンクリート製品に押されるようになったのです。

広い敷地の中は、窯場、機械場、かし場というふうには、作業場ごとに『場』と呼ばれていて、れんが場というのはこれらをまとめた呼び方だったようです。かし場とは乾燥場がなまったもので、たくさんしらじの白地が干してありました。白地とは、

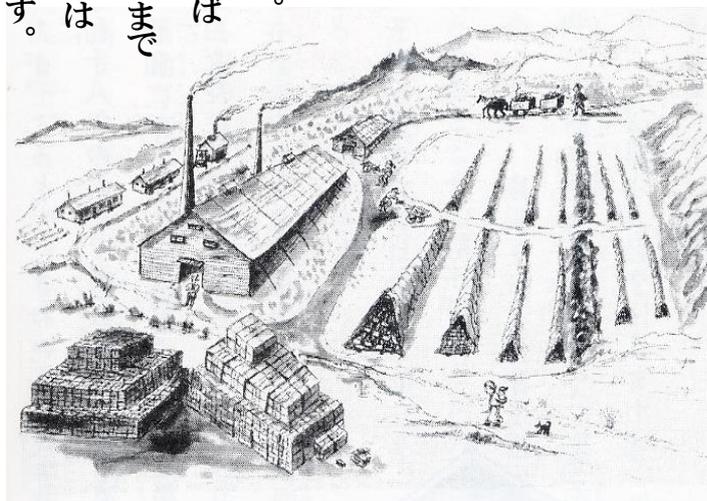
型抜きした生れんがのことで、天日や風を利用し、時間をかけて乾燥させたのです。

かし場の広さは、ゆうに一ヘクタール余りあって、

これが傾斜地だったため作業はかなりきつかったそうです。

原材料の砂は、馬車などで運ばれていました。粘土は土取り場までレールが敷かれ、一番長いときは七百メートルもあったといえます。

土取り場では、二本爪と呼ばれる専用の鋤を使い、横穴を掘るようにして粘土を削るのです。穴が大きくなり、まわりがくずれそうになると、上から踏み落とします。粘土を積んだトロッコは、二台連結で



馬に引かせて機械場まで運ばれてきますが、そのあとの処理もすべて手作業だからたいへんな重労働でした。

れんが場には十数世帯が雇われていましたが、仕事のほとんどは請負制でした。つまり決まった給料が支払われるのではなく、出来上がったれんがの枚数によって手間賃が決まったのです。れんが一枚あたりの単価は安く、冬は仕事が休みになるから、作業員の家族は子どもから年寄りまで、一家総ぐるみで型抜きをしたそうです。

型抜き作業にはコツがあつて、型枠の周囲を要領良く軽たたきながら、騙し騙し抜き取ります。しくじると変形したりひびが入ったりするからです。このあと白地をかし場へ運び、風通しのいいように慎重に空間を作りながら配置してゆくのです。

次にヨシズやムシロをかけるのですが、雨が近いときなどは夜も寝ないで作業を続けなければなりません。れんが場での仕事は、まさに粘土と砂とほこりとたたかいました。また、窯場の周辺では、火と熱を相手に体力とがまん強さが要求されました。

どの作業も過酷で、肌は荒れ放題、汗が塩になるのが当たり前のようにみんなよく働きました。

れんが場のそばを通学する子どもたちは、労働の尊さを自分の目で実感しながら育ったといわれています。

## 万字線の踏切

ふみきり

栗沢町と岩見沢市の境界は、幌向川によって区分されています。

ことに上流は山がせまっていて、そこを通る鉄道や道路はかなり入り組んでいました。かつての国鉄万字線は志文から万字炭山まで約二十四キロメートルの区間に大きな鉄橋だけでも七か所ありました。

道路は鉄道よりもさらに曲がりくねり、走っている所が栗沢なのか岩見沢なのか、分からなくなってしまうほどでした。

踏切の数も多く、作業踏切まで含めると、三十六か所もあったといわれ、馬車や馬そりの時代は馬追い泣かせの道だったので。

とりわけ冬の踏切は、敷板が外されていることもあり、レールが高く、荷を積んだ馬そりの裏金が、がっちりレールにかんできましたら最後、ちよつとやそつとで動くものではなく、少しの油断もできません。戦時中は米と石炭を交換するため、多くの人々が美流渡方面に馬を通わせていました。

数多い踏切や急な坂道を越え警察の眼もすり抜けて家にもどったときは、命拾いをしたような気がしたものです。

ある冬の出来事でした。万字から来た石炭列車が、第一幌向川

橋梁（由良地区の北のはずれ）を渡りきったあたりで、ようやく開けた平野に向かって大きく汽笛を鳴らしました。その時、二〇〇メートルほど先の踏切を、砂利をいっぱい積んだ馬そり何台も横断していたのです。戦前は各部落（町内）の道路は住民みんなで管理して、道路に敷く砂利の運搬にもそれぞれ割当てがありました。

部落の戸数が百であれば、一〇〇台の馬そりがかりだされます。その時も幌向川の河原から、砂利を積んだ馬そりの行列が万字線をはさんで進んでいたのです。

とその時、一台の馬そりが踏切のど真ん中で立ち往生してしまいました。鉄橋を渡りきった石炭列車は下り坂に勢いづいて猛スピードでせまっています。

「みんなー！ 手を貸せー！」  
だれかが必死で叫ぶと、近くにいた人たちがかけ寄ってきて、大声をはりあげ、死にもぐるいで馬そりを押つけました。やせ馬もご主人様の一大事が分かったのか、力の限りふんばると、馬そりは火花を散らし



ながら前に出たのです。こうして事故にならずにすみましたが、見通しの悪い万字線では、天国と地獄が背中合わせだったのです。にもかかわらず、万字線にはあこがれをかきたてる何かがありました。

「いま、炭山から出てきたぞー！」と汽笛が鳴ると、田畑では、

「おお、十一時の万字線だ。もうひとふんばりするかい」

というように、SL独特の力強さで鳴り響く汽笛は、田畑で働く人々の励ましでした。その万字線も、石炭がすたれるとともに、七十年あまりの使命を果たし、昭和六十年（一九八五年）三月三十一日の『さよなら列車』を最後に永遠の幕を下ろしたのです。

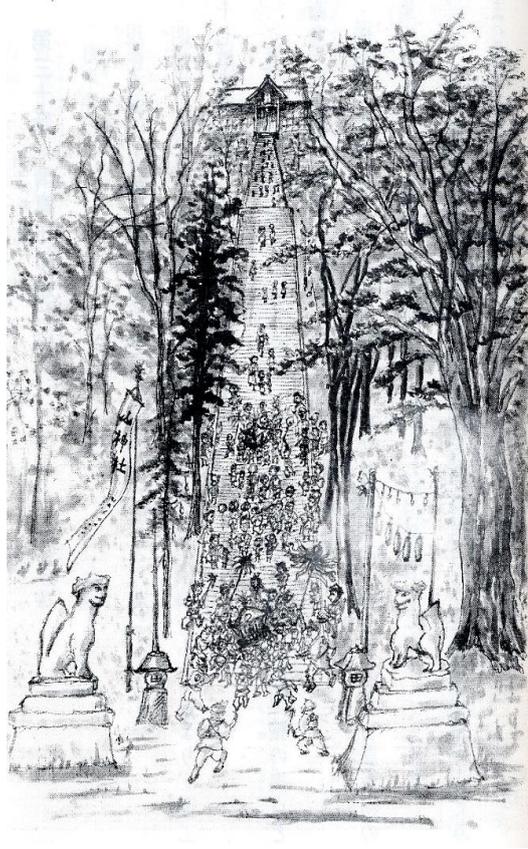
## 炭山祭り

大正期から太平洋戦争後の栗沢は、白ダイヤ（お米）と黒ダイヤ（石炭）の二大産業の町でした。特に黒ダイヤは、美流渡、万字地区で、大正九年（一九二〇年）の頃から昭和四十年（一九六五年）頃まで、常に人口一万人前後を維持し、出炭量も順調で、街中はいつも活気に満ちあふれていました。

万字炭山地区のいろいろな建物や施設は、現在の万字温泉よりさらに夕張方面へ伸びていたそうです。万字炭鉱は良質炭を産出しま

したが、経営者が天下の北炭でしたから、街のすべてに北炭の息がかり、戦時需要の追い風も受けて、街は石炭景気で空前の賑わいが続いていました。しかし、地下何千尺という採炭の仕事は、常にガス爆発や坑内火災などの危険と背中合わせでした。

人々は多くの悲しみを乗り越えて、炭山祭りや盆踊りをここの一番の供養として盛りあげたのです。



北炭では、五月十一、十二日の山神社の例大祭を前にして、雪解けが終わるか終わらない四月には、もう準備にとりかかっています。会社の養成所には、坑夫の子弟がぞくぞくと集まり、仕事の見習いをかねて作業を分担していました。

炭山祭りの圧巻は、色電球が一万個も吊されたことでしょう。

実際には三千個ほどだったらしいのですが、きつと万字炭山の名にちなんで、一万個といつて士気を鼓舞させたのでしよう。この電球も一個一個でいねいに夜光エナメルを塗って色電球に仕上げるのです。色は赤青黄の三原色が主流だったようです。さらに街角には、大きな行灯がともされました。三尺角で長さが六尺の木枠の骨組みに紙を貼り、この中にたくさん赤電球を入れて、これを十五尺の竿で吊り上げます。これが街角の要所要所に二十か所ほど飾られました。

山神社の周囲や参道の両側は、色とりどりの電球の明かりで、まさに満艦飾でした。境内の桜の木には多数の赤電球が取り付けられ、花見気分をいやが上にも盛り上げます。おんこの木には青電球が配され、これまたクリスマスツリーのように荘厳さを浮き出させるなど、いろいろと趣向を凝らしてありました。山神社は山の上であり、神社の前は深い沢になっていました。

余興小屋は、沢の斜面に長い丸太棒を立て、横棒を神社側に差し掛けて組み合わせ



安定させました。清水の舞台とまではいかなくとも、かなりスリリングな舞台装置だったことが想像されます。人々は、沢べりの蛇行する尾根伝いの道から鈴成りになって余興を楽しんだものです。

盆踊りもとても盛んでした。櫓は何カ所にも建てられましたが、古長屋と呼ばれた寿地区の広場では、丸太棒を横三段に組み上げ

た特大のものが造られ、ここが盆踊りの中心のな役割を果たしていました。踊りの輪は道路まで埋め尽くされ、唄を歌う者、囃子を入れる者で夜明けまで踊り続けられるのです。



踊り終えた人々は、当然のようにすぐそばの坑員浴場へぞろぞろと入り、一夜の汗と埃を心ゆくまで流したそうです。

その頃子どもたちは、ポンポロムイ川でよく泳いだそうです。

選炭場より下流は黒い川だったので、上流の白い川に集まりました。

がき大将が泳ぎ場プールを作るために号令をかけます。

玉石を集めさせるのです。お前は大きいから十個だ。お前は小さいから五個だというふうに、たちまち川はせき止められました。

小学校高等科の遠足は夕張への山越えでした。鉄塔（ケーブル）下の熊笹の刈り跡をなぞって行くと、一時間余りで夕張です。

夕張で、地元の有志から五銭のフルヤの

キヤラメルをもらったときは、すごく感激したそうです。古きよき時代は、大人も子どもも天真爛漫だったのですね。



### 《参考》

・昭和五十一年（一九七六年）に万字炭鉱が閉山して、山神社の社殿は次第に荒廃していったが、平成十六年（二〇〇四年）十一月、現在地（英

町）に移設してその面影を留めている。

・万字炭鉱創業開始の頃に偶然発見されて以来、長年『リンゴの湯』として親しまれてきた万字温泉は、次第に衰退の一途をたどり、平成二十一年（二〇〇九年）、営業を停止して建物は解体し更地になっている。

## クツタリチャシの教訓

きょうくん

これは昔話にしたくないお話です。

栗沢町内の埋蔵文化財包蔵地調査

カードによると、登録番号一から

二十七に至る内容が整然と記入

されています。

包蔵地は、クツタリ丘陵地域

と市来知茂世丑地溝地域に大きく

分けられるようです。

ただ残念なことに、発見（発掘）当時の原型を

留めているものは皆無といった方がよいでしょう。

栗沢町の埋蔵文化遺産に目が向けられ、調査

が始まったのが昭和三十年前後でしたから、



その頃は調査体系も完全とはいえず、何よりも関係住民の意識が未熟だったために、それらを保存しなければならぬという差し迫った考えはありませんでした。しかも包蔵地のほとんどが私有地であったために、取り急ぎ埋蔵物は採取取蔵されたものの、すぐに造田などによる整地が行われたのです。こうして町内の包蔵地のほとんどが開発優先の流れとともに、原形が保存されることにはなりません。こうした中で一か所だけ昭和五十年頃まで原形が残っていたクツタリチャシという包蔵地がありました。場所は国道二三四号線が夕張川に接する長栗橋付近で、通称分捕山という標高三十メートルの自然林の小山でした。

現在では、この小山の下を栗沢灌漑溝が隧道となつて貫通していますが、なぜこの山が分捕山と呼ばれているのかよく分かりませんが、一説には、分捕山は独立した山ではなく、かつてはクツタリ丘陵に

連なつていたともいう人がいます。これが明治二十五年の室蘭線開通に先立ち、大掘削をして分断させられたから分捕山になったのだともいわれています。この山の南側は断崖で、真下は夕張川、東の国道側もかなり急峻です。それに比べて、西側や北側はそれほど険しくなく、ちよつとした登山気分に登ることができのです。娯楽の少ないその昔、子供達が山登り競争をして、お山の大将を争つたので、分捕山といったのでしょうか。ともかく、クツタリチャシの語意を考えて

みると、明らかにアイヌ語です。クツタリはイタドリの繁茂している地のクツタルシから転じたといわれ、栗丘の前名が久樽であることから地名であることが分かります。チャシは、山城あるいは砦を意味する言葉だそうです。この山城や砦から、この山の機能を想像すると、分捕山が和名であつても納得ゆく名であつて、どこことなくロマンの湧いてきそうな山の名ではありませんか。

頂上部のチャシ跡の規模は、八〇〇平方メートルだったそうですから、差し渡しは三十二メートル前後だったでしょうか。

クツタリチャシの調査カードには次のように記されています。

#### ◎ 包蔵地の概要

##### 立地

夕張川に突出した舌状台地の先端部

標高三〇メートル

##### 範囲(規模)

約八〇〇平方メートル

##### 形態

二条の壕をもつ両崖チャシ

##### 特徴・その他

古記録によると本チャシの対岸には、アイヌコタンがあつたと伝えられている。

また一〇〇メートル栗沢寄りには、続縄文期の洞窟があつた。

#### ◎ 調査・文献

##### ◎ その他

昭和四十八年十一月二十日 壕は一本が幅三メートル

チャン調査の際発見

深さ一・五メートル

他の一本は幅二メートル

深さ一メートル

昭和五十年五月分布調査 (北海道教育委員会)

この台地でブルドーザーによる整地作業が行われ、観光施設らしきものの建設が予定されている。早急に保護対策が必要。

調査カードによるとクツタリチャシは、昭和四十八年に発見されたのち、わずか二年後の五十年には、ブルドーザーが整地に入り、あつという間もなく破壊されてしまったこととなります。当時の状況を再現するところです。

「分捕山にブルが入ってるぞー」

「なにやってんだへか」

「あそこにアイヌのなんだか、あつたんでないの」

「そうだ。見たことないけど、砦だか見張り台とかいつてたな」

「大学の先生が、珍しい発見したちゆう話だったよな」

「農協か、教育委員会に言ったほうがいいんでないの」という次第で、通報が届いた時は間に合わず、クツタリチャシは完全に消滅してしまいました。クツタリチャシが、アイヌ文化を知る上でどれほどかけがえのない財産であったのか、考古学ではどのような価値があつたのか分りませんが、先人の貴重な遺産であつたことに間違いはないはず。

包蔵地の概要にも記載されていますが、クツタリチャシの百メートル

栗沢寄りには、続縄文期の栗丘洞窟があつたとなっています。

これも昭和四十年頃に、国道二三四号線の切替工事の際に、完全に破壊されていたことが分かってきました。せめてこの二つが残っていれば、栗沢の夢とロマンが開花していたかもしれないのに、まことに残念至極です。といつてこの話をおしまいにしたくありません。

そこで現在の二三四号線のルートが、いつできたのかを調べたところ、昭和七年三月であることが分かりました。それ以前は山越えの七坂八坂ルートで栗山に通じていたそうです。

旧国道四三三号線の最初は、夕張人道として明治二十三年から二十四年にかけて、市来知集治監の囚人によつて開削されています。

その後この旧国道は、四十二年間の長い間幹線道路としての機能を果たしていたのです。初めは人と駄馬の道で、人通りが少なくなるとおいはぎが出没したこともあるといわれていますが、いずれにしても先人の血と汗がどつぷり沁み込んだ遺産ではないでしょうか。

栗丘の丘陵を二キロメートルほど登ると、人の手が入つたと思われる切り割り道が、熊笹の間に見え隠れしてきます。

旧東海道の保存とはスケールが違いますが、かつて存在したクツタリチャシや栗丘洞窟が、今を生きる私たちに何かを語りかけてくるようです。

# トンネルの泣く木

国道二三四号線の栗沢町と栗山町の境目付近に、かつては『泣く木』と呼ばれたハルニレの大木がありました。

この伝説の木の位置が、わずかに栗山町側であったため、栗沢町の文献には出てきませんが、栗沢の人々も昔から『トンネルの泣く木』あるいは『トンネルのアカダモ』といってあがめていました。

この木は鋸を入れると泣くといわれ、きつとこの付近で亡くなった人のたましいが、何かを訴えているのではないかと噂されていました。

これにはいろいろな説がありますが、やはり室蘭線の栗丘（栗山）トンネルの工事にまでさかのぼらなければなりません。

明治二十一年、夕張炭田が発見され、鉄道や道路を作る工事が急ピッチで進められるようになりました。ちなみに、室蘭本線の岩見沢、室蘭間の着工は明治二十三年十月、完成は二十五年七月といえますから、わずか二年足らずの間にたいへんな突貫工事が行われたことになります。これらの仕事にかりだされたのは、空知集治監（市来知）三笠に思想犯としてとらわれていた人たちでした。

当時は清真布（栗沢）と久樽（栗丘）トンネルの手前に各一棟の土方部

屋があり、それぞれ十数人の人夫が入れられていました。

トンネルの向こうの桜丘にも土方部屋があつたそうです。囚人は逃げられないように、仕事着も股引、足袋、帽子もすべて赤いものを着せられ、厳しい監視のもとでトンネル工事や道路工事に強制労働をさせられていたといえます。栗丘の

トンネル工事だけでも、少なくとも三十人の犠牲者が、枕木の下やハルニレを墓標として埋められたともいわれているのです。このトンネル付近は、夕張川の蛇行した流れが

トンネル山に迫り、国道二三四号線が崖と川にはさみつけられるような地形でした。泣く木があつたのはトンネル側の崖の所なので、道路改良のためには非常に邪魔になったのです。もともとの国道は、トンネル山の裏側を七曲がり八曲がりの峠越えをして栗山に通じる、大変な難所でした。これを解消するため、現在のルートに着工したのが昭和六年五月、完成が七年三月のことです。ハルニレの伐採が試みられたのはこの頃ですが、不思議なことに鋸を入れると、キュウキュウとうめくように泣くといふのです。それが若い女の声であつたり、赤



ん坊<sup>ぼう</sup>の声であつたりしたそうです。しかも、鋸を使った人が必ず重病になつたり突然死んでしまつたり、さもなければ身内に不幸がおこつたとか。だれもが気味悪がつてハルニレに近づかなくなつたものの、このあたりは崖崩れしやすいく所<sup>ところ</sup>で、皆は困り果<sup>は</sup>ててしまいました。

そここうするうちに、過酷<sup>かこく</sup>なトンネル工事で命を落とした犠牲者<sup>れい</sup>の霊<sup>おんねん</sup>が、怨念<sup>おんねん</sup>となつて泣くのだとか、つらい目にあつたタコ部屋の飯<sup>めし</sup>たき女<sup>め</sup>がこの木で首をつつたからだとか、この木の下でお産で死んだ若い女の霊<sup>たま</sup>だとか、噂<sup>うわさ</sup>が広がるばかりで、ハルニレを切ろうとする者はいなくなりました。こうしていつの間にか、このハルニレを『泣く木』と呼ぶようになったのです。やがて夕張川も護岸<sup>ごがん</sup>工事され、道路はこの木を迂回<sup>うかい</sup>する形で整備<sup>せいび</sup>されました。その後、信心深い人が、泣く木の前に石仏<sup>せきぶつ</sup>を寄進して、熱心に供養<sup>くよう</sup>が続けられていましたが、昭和二十九年に北海道をおそつた台風のため、泣く木は無惨<sup>むざん</sup>にも中ほどからへし折<sup>お</sup>られてしまいました。これが歴史に残る洞爺丸台風<sup>とうやまの</sup>です。

遠くからでも美しい見事な枝ぶりをながめることができたのにと人々は残念がりました。姿は変わり果ててしまいましたが、それでも皆は変わらず泣く木をあがめていました。

大事件が起きたのは、昭和四十五年八月十二日の夜のことでした。その頃、国道の改修工事が行われ、作業員の飯場<sup>はんば</sup>が栗山側に建てられていました。夜になつて、彼らが酒を飲んでいるうちに、泣く木の話

になりました。酒の勢いも手伝つたでしょう。一人の作業員が、「たたりがあるかどうか俺<sup>おれ</sup>が切つてやる」ということになつたらしいのです。彼はチェーンソーを持ち出し、二分足らずで木を切り倒してしまいました。

泣く木にまつわる話は、いいものではありませんでしたが、地元の人々にとつてはかけがえのない財産<sup>ざいざん</sup>であり、記念樹でもありました。また、供養を続けてきた人にとつては尊<sup>とうと</sup>い神木<sup>たお</sup>を倒され、どれほど心を痛<sup>いた</sup>めたことでしょう。

この作業員ですが、けつきよく何のたたりもなく、今も元気で生きているのだそうです。こうして泣く木の物語は終わるはずでしたが、このあたりでは、今でもときどき不思議なことが起きるらしいのです。

雲をつくような大男が現れたり、雨降りに客を乗せたタクシーが目的地に着いてみると客はおらず、シートだけがぬれていたとか。

自動車事故<sup>じこ</sup>もほかの場所より多いのだそうです。

現在、ここには泣く木二世がすくすくと育っています。

昭和五十九年十月十三日に、栗山青年会議所が植えたものです。



泣く木二世・祠

この幼木は、泣く木が地面に落とした種から生えてきた数本の中から、姿の良いものを選んで移植したもので、今では数メートルにもなっています。

じょうりりしばい にぎ かみほろ

## 浄瑠璃芝居で賑わった上幌祭り

「トン、トン、トン」と、山間から太鼓の音が聞こえてきました。

今日から小高い山間の地域、上幌のお祭りです。

道端には細い茎に小さく淡い桜色をつけてミチヤナギ、周りは黄

金色した稲穂、スズメがチュン、チュン穏やかな秋日和です。

神社の前には何本もの祭りのぼりが立ち、いつもほどの家の田畑でも見られる農作業の姿が今日は見られません。上幌では昔からお祭りには農作業を休んでみんなで楽しんだそうです。

「おばあちゃん、もう少しで浄瑠璃芝居が始まるよ」と、孫がおばあちゃんの手を引いて神社へ行きます。

「向かいのおじさんやお兄ちゃんが芝居に出るよ」

「そりや大変だ、急がなきゃ」と、お年寄りも子どもも村の人みんなお祭りの浄瑠璃芝居を毎年楽しみにしていました。

春の農作業が一段落すると、若い人が中心になって夕方から夜遅くまで、時間を惜しんで浄瑠璃芝居の練習が始まります。

「今夜も浄瑠璃の練習があるから、かぼちゃでも蒸かしておきましょう」と、お母さん。

「そうだ、頼むよ」と、お父さんはそわそわと練習にでかけます。

上幌の坂東農場や中宇農場は徳島県からの入植だったので、

徳島で盛んだった浄瑠璃芝居も一緒に伝わってきたのです。

浄瑠璃芝居は義太夫と芝居からなつていて、年配の人は浄瑠璃を、

若い人は芝居を受け持っていました。

両農場とも早くから土地は小作人に解放され、自作農が営

まれてたこともあり、お祭りは賑やかだったのです。入植した時は、空が

見えないぐらいの森林で、開拓や農作業はとても辛く苦勞したことを思います。だからお祭りには浄瑠璃芝居でふるさとを思い懐かしんだのでしょう。浄瑠璃の三味線弾きは名人がいて、即興で語り合



わけて弾いていました。芝居は全員男性で、女形は芝居の花形としてたいそうもてたそうです。

浄瑠璃芝居が始まると、近所の人みんなで座布団や角巻を持って薬の上に敷いたゴザに座り盛んに拍手したそうです。

浄瑠璃芝居は大正から昭和の初期までがもとも盛んで、お祭りの時期になると近隣の町村からも依頼があり、栗山、長沼、岩見沢までも興業に行つたそうです。車はありませんので馬車に乗ったり歩いて廻つたことです。当時上幌には六つの神社があり、それぞれお祭りがあつて農作業も休みにして隣近所、親戚が集まり賑やかだつたそうです。でも一番楽しかったのは子どもたちでした。芝居小屋、出店などで友だちと一緒に楽しく過ごすことができたからでした。

また、入植した人の中には、花火まで作る人がいて、挽臼で火薬をひいて自家製の花火を上げたこともありました。

浄瑠璃芝居で賑やかだつた祭りも、昭和中期には浄瑠璃をする人も高齢化し、造田の開始や、また六神社の併合などもあり、開拓時から長く伝えられてきた郷土芸能、浄瑠璃芝居も自然と姿を消しましたが、今でも浄瑠璃の『かな手本』は残っていて、当時が懐かしく思い出されます。

きよまつ ぶ

## 清真布駅ものがたい

明治二十七年(一八九四年)十月一日、今の栗沢駅が清真布停車場として落成しましたが、落成するまでにはいろんな話がありました。明治二十三年(一八九〇年)に室蘭線の鉄道敷設工事着工と岩見沢く角田(栗山)間の道路開削が始まりました。このためクツタリ(現在の栗丘)には鉄道工事やトンネル工事の資材置場や倉庫が建てられ、土工部屋が多く設営されました。また、当時は工事に必要な資材は川を船で運んだため、夕張川には川船荷物置場もでき、クツタリは小市街を形成し活気にあふれていました。

明治二十五年(一九〇二年)に鉄道が開通すると、工事人夫は去り、栄えていた小市街もさびれてきましたが、栗沢村の停車場候補地は十二線九号及び十六線の二か所になっていたため、その地域(南部小西農場)を中心として生活していた住民は楽しみにしていました。

その頃の清真布はクツタリの勢力範囲の中にあつて、清真布に在住している住民の郵便物等は『幌向原野字クツタリ』として配達されていました。ところが鉄道が開通した翌年に、必成社農場の開墾が始まり、農産物や生産資材も多くなってきたことから、必成社農場内

に停車場が必要だと感じた当時の必成社農場主監、西田市太郎さんが自ら発起人となり、農場付近の有志を集めて停車場設置の請願を始めました。西田さんらが北海道炭鉄道会社に対し、請願運動を重ねた結果、ついに必成社農場内に停車場が設置される予定となったのです。最初に予定地になっていた南部小西農場方面の住民はすぐ

に反対運動をおこし、幌向川付近の住民と連携をとり、必成社農場内停車場設置に対する猛烈な妨害運動が広がりました。反対運動演説は札幌でも開催されたそうです。発起人である西田市太郎さんへの攻撃も凄く、脅迫的張り紙をするなど、小西農場方面の住民と必成社農場との間には、清真布停車場の設置をめぐる激烈な競争が繰り広げられました。そのような競争を経たのち、明治二十七年（一八九四年）に停車場建設工事が始まり、同年十月一日清真布停車場が落成。乗客貨物の取り扱いが開始されました。

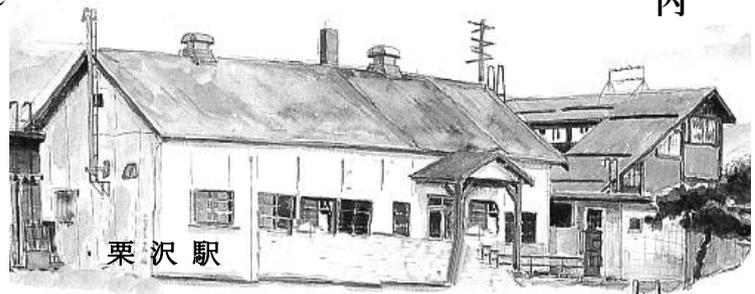
激烈な競争の中にあつて必成社農場内に停車場が設置されたことには地形的な要因も大きかったそうです。当初停車場候補地とされていた十二線九号と十六線は地形的に線路が傾斜しており、特に十六線はその傾斜度が大きかったのです。当時の汽車はまだブレーキも完全でなかったこともあり、列車が停止すると汽車が自然に岩見沢方面に移動してしまふことや機関車の馬力も弱く、発車しても前方が坂なので登るのに大変だったとのこと。このような地形であったこと

ともあり、北海道炭鉄道会社が双方意見を検討した結果、平地で周りも広い必成社農場内の停車場設置を決めたともいわれています。

清真布停車場設置早々、笠原元治郎さんは、内地（本州）から必成社に来るとき、岩見沢停車場より二里あまり馬で行くと聞かされていたので、岩見沢停車場を清真布停車場と勘違いし、岩見沢停車場に降り、馬の便を待つてやつと必成社農場に着いた

との話もあります。この停車場の設置により、清真布市街には多くの商店が集まり、戸長役場を始め官署が創設され、栗沢町の中心市街を形成していきました。もし当初予定されていた九号か十六線に停車場が設置されていけば、栗沢町の市街の位置も変わっていたことでしょう。

明治、大正、昭和と長い間清真布駅として親しまれていた駅でしたが、昭和二十四年（一九四九年）、町制の施行に合わせ清真布市街を栗沢本町と改称したのに伴い清真布駅も栗沢駅となりましたが、今も清真布駅の名を懐かしむ人が数多くいます。



# 火葬場の怪火

かそうば かいか

秋も深まり弱い陽の光りが西の山の端に沈み、うす暗くなってきた。変わりやすい秋の天気、急に雨がしとしとと降り始めました。

あれは僕が小学校五年生の頃でした。友だち三人と深く生い茂った樹々のあいだの細い道を、少し探つて来た山ブドウの実を食べながら帰りの山道を急いでいたとき

のことです。ちょうど墓地の近く

に来たとき、友だちの一人が、

「昔は火葬場がなかったので、

人が死んだらお寺から借りて

きた蓮台にお棺をのせて、みんな

で担いで山に登って来たんだ。

この辺で薪を並べてお棺をの

せ、その上にまた薪を縦や横

に並べて焼いたんだって、おや

じが言ってた」というのを聞いて、その場所を横目で見なが



ら、たくさん並んでいるお墓の前を通りすぎました。

少し行くと、昭和十二年に建てられたといわれる火葬場がありました。ふと草の上を見ると、しつとりと濡れた草の上に青白い火がぼつぼつ燃えているのです。

「おい、あの火はなんだ」三人が恐る恐る近づいてよく見ると、ゴミの中で白い骨のようなものが燃えているようです。顔を見合わせた二人は怖くなり、いちもくさんに山を駆け降りました。

三人とも顔は真っ青でした。

山を降りてきて、途中で近所のおじさんに会ったので、その話をしたところ、「そうか、実は今日葬式があつて、さつき終つて帰ってきたところだよ。火葬が終わると骨を拾うが、拾い残した骨は、灰といつしよにみんな捨てて帰るんだ。その灰に雨が当たると、骨の燐が青白く燃えるんだよ」と教えてくれました。普段は有名な腕白三人組でしたがいつもの元気はなく、とぼとぼと家に帰りました。

その夜、布団に入つても昼の出来事が次々と思ひ出され、なかなか眠れません。僕は思いました。

「あのぼつぼつ燃えている青白い火が風に吹かれて飛ぶと、火の玉に見えるのかな」と。

# 私の入隊日記から

昭和十八年（一九四三年）

四月二十三日。昼に田耕し仕事

から戻ると、母から「午前中、役場の人が来て、お前に召集令状がきておる」と言われました。

「母さん、ついに来たかい」、母は黙ってうなずいていました。

実は昨年の徴兵検査で、私は第一乙種となり次の年に兵役召集されたのです。当時徴兵検査は、男子は満二十歳になると体力検査を受けて甲、乙、丙に区分され、甲種になると現役兵としての義務があり、乙種以下は随時召集され兵役に服することになっていました。

当時の日本は軍国主義であり、兵役に召集されることは、本人にとつても、家族にとつても大変名誉なことだといわれていた時代でした。

召集令状は「一週間後の五月一日に青森の連隊兵舎に集合せよ」との趣旨でした。ちようど田耕しの最中だったので、「少しでも田耕して行かねば」と一生懸命精を出して働きましたが、どれだけ農作業が進んだことか……。入隊してもその後のことが気になりました。

入隊の前々日、親戚、隣近所の方々が集まり、壮行会を開いて



激励してくれました。その時、玄関で写した写真は今も大事に持っています。母が「お前、これを持っていきなさい」と言つて千人針を渡してくれました。千人針は、大切な夫や愛しいわが子に、「生きて帰つてくれ」との願いを込めて、サラシの腹巻に千人の人の一人ひとりが、針で結び目を縫い込んだものです。母は田耕して忙しい合間をぬつて、親戚や隣近所の方々にお願ひして作つてくれたと思います。それを思うと胸がいつぱいになりました。父は、黙つて三十センチ位の小刀を私に差し出しました。その胸中は「敵に辱めを受けるなかれ」との無言の言葉だつたと思います。そんな思いを胸に四月二十九日の朝、小西神社に参拝して町内会長さんから激励のあいさつをいただいた後、日の丸の旗を手にした青年会や部落の方々と一緒に栗沢神社に参拝して、神社拝殿の上段に御神体を背に栗沢から応召された三名が立つて、国友村長さんから激励の言葉をいただき、代表して私がお礼の挨拶をしました。

こうして私たちは、村の人や児童生徒が振る日の丸の旗に



見送られながら清真布駅を後にしたのです。札幌駅では、道内各地から同時入隊者千名が集まり、列車で函館へ。青函連絡船で青森に着き、明けて五月一日早朝、指定された営兵の門をくぐり、軍服の兵隊姿になりました。

翌朝から九十日の軍事教練が始まりました。教練が厳しくて辛かったこと、お腹がすいてどうしようもなかったこと、ひどく蚊にさされ医務室に行ったこと、休日に盛岡に行き、原元首相の屋敷を歩いたことなど、今は懐かしい思い出です。

昭和十九年（一九四四年）三月、札幌の北部軍司令部の通信兵として防空室勤務となりましたが、翌二十年（一九四五年）八月、太平洋戦争（第二次世界大戦）は日本の敗戦で終戦となり、私は軍を離れたのです。村の多くの人たちから歓呼の声で送られ出征した者にとつて、敗残兵同然となつて故郷に帰るなど思いもよらず、その時は情けない気持ちでいっぱいでした。岩見沢駅で降り栗沢まで歩いて家に着いたのは夜の十時頃でした。

「お父さん、お母さん、ただいま帰りました」

「おう、帰ったか」父はその一言でした。母の目には涙が光ったように見えました。父も母も私は帰つてこないと思つていたそうですが、久しぶりにわが家で一夜を明かし、翌日父と母の顔を見たとき、家に帰つたことを実感したのです。

## 不死身の男

衛さんは今年七十歳。今でもたまには飲みに行くし、はしご酒もします。孫のような女性をからかつては楽しい酒を飲んだりもするのです。自己紹介になると決まつて「おれはオールマイティーさ。スペードのAのことだよ」と、おどけたように言つて少しだけ照れます。

衛さんが言いたいののは、不死身なのだということらしいのです。

それは昭和二十年のこと。衛さんは十五歳。今なら中学三年生くらいで遊びざかりですが、当時は社会人として立派に通用していました。二十代、三十代の働き手は戦争に行つていましたから、鉄道の除雪作業など、大半が十代の少年たちがこなしていたのです。

岩見沢近辺の豪雪は今も昔も変わりません。ところが東京ドーム三十個分もの広さの岩見沢駅構内に、除雪車は広幅車、ロータリー車など三台だけでした。ひとたびドカ雪に見舞われたら、除雪の主力は人海戦術となり、そのエネルギーはすさまじいばかりでした。

岩見沢ヤードの除雪に行く者は、汽車賃を免除されましたから農村の若者は先を争つて押しかけたものです。当時は清真布から岩見沢までの往復が八十銭。除雪の出面賃が一円八十銭ほどでしたから、

すぐく得をした気分になっていたものです。到着すると作業場所が割りふられますが、はねつけが当たると一日中遠投の連続となり、体力が消耗するのでいやがられました。それに比べ、貨車積みには争って集まりました。なぜ人気があったのかというと、積みおろしはもちろんスコップなのですが、機関車の都合や線路が空かずに待っている間、休んでいられるからでした。だが、仕事が順調に進むと、積んでは運び、運んでは降ろしと、目の回るような忙しさでした。予定量を貨車に積むが早いか「乗れー！」と号令がかかります。すぐさま積んだ雪の上にスコップを放り上げて、貨車の側面のどこかにつかまるのです。もたもたしていると置いてきぼりになるから真剣でした。雪捨て場に着くと、「降ろせー。時間がなーい！」と怒鳴られます。必死になって今度は雪を降ろします。汗みどろになって降ろしたはいが機関車が来ない。

「きさままら、降ろすのが遅いから、アタマ(機関車)がどっかへ行っちゃまったんだ」と、またしてもカツを入られます。

寒くて歯がガチガチ鳴ることもあれば、頭から湯気を立てながらおにぎりに食らいつくくこともしばしばでした。こんなことを繰り返しているといつか魔がさすものです。衛さんが九死に一生を得たのは貨車積み作業の真つ最中でした。

「乗れー！」の号令と同時に貨車が動き出し、衛さんはいつものよう

に貨車の横つちよに飛びつきました。

運動神経抜群の彼にはなんでもないとでした。ところがそのとき思いもよらず、つるりと滑ってしまったのです。

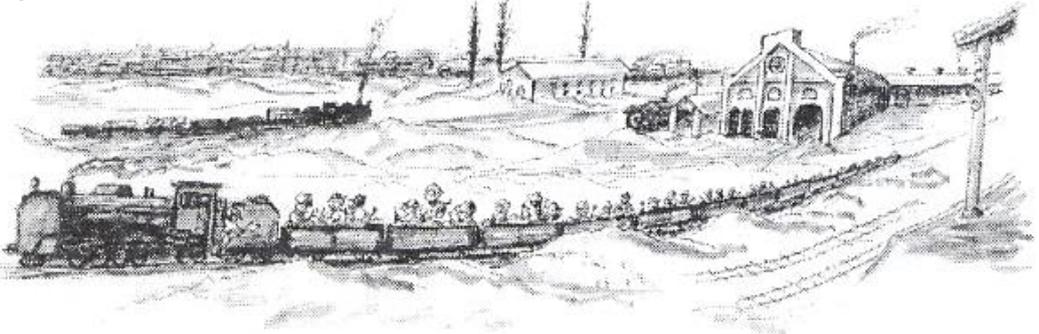
足掛け金具に氷がついていたせいでした。雪がなければその辺に転がり落ちて、乗りそこないで済むところだったのですが、固まった雪の山は線路すれすれにせまっております、衛さんの体は当然のように貨車の下に滑りこんでしまったのです。

一瞬まわりの者は青くなりました。

衛さんが車輪に巻き込まれそうになりながら引きずられていったのですから。

「ああ、おれは兵隊にも行かずに死ぬのかな」衛さんの目の前に、親兄弟の顔が活動写真のように現れました。

周囲の騒ぎで機関車は急ブレーキをきしませて止まりました。そばにいた仲間たちは、衛さんの無惨な轢死体があるものと体を震わせました。とその時、斜めになった雪面をもそもそ這い上がってくるものがありました。



衛さんです。幸運にも作業服の襟首が貨車の突起物に引っ掛かり、引きずられていたうちに列車が止まったのでした。衛さんに怪我はありませんでした。駆けつけた現場監督は、無事だった衛さんに「このー！ バカもーん！」とひととき大きな声をほりあげただけで、あとは何も言わなかったそうです。

## 栗沢のおしん

小さかった頃から奉公に出ていた思い出を、「私もおしんのようにだったよ」と、笑顔で話してくださいましたおばあちゃんが、栗沢にもいらつしやいました。



お歳は八十一歳。とてもお元気で、大きな猫と一緒でした。「今がいちばんしあわせ」と、何度もおっしゃっていた言葉にたくさんのご苦労が見えるようでした。

十三歳のときから毎年の奉公。三月から十一月まで家を離れます。さまざまに思い出がありました。

奉公先は農家でした。そこでの仕事は主に赤ちゃんの子守です。奉公は『前金』といって先にお金をいただくので、奉公先での生活は子守をしながら三度のご飯を食べさせてもらうだけです。でも農家ですので、白いご飯を食べることができました。

ある農家に奉公に行ったときです。その主人に「こんな白いご飯はお前の家では食べられないだろう」と食事のたびに言われるのが辛くて、一度だけ逃げて帰ったことがありました。

両親にとっても叱られました。

またある家では、食事のときお鍋をひっくり返してしまい、自分の食べるものはほとんどなく悲しい思いをしましたが、その家のおかみさんがとても優しい人で、後からそつとお餅をくれたときは、とても嬉しくて涙ができました。その家の主人もたいへん厳しい人でしたが、奉公が終わって帰る日に、「よく辛抱した」といってお小遣いをくれたのも本当に嬉しかった。でも奉公が三日延びたときは早く帰りたくて、三年にも感じられました。

星を見ながら泣いたこともありましたが、十三、四歳の私には家族から離れての奉公はさびしくて辛いものでした。

十五歳の奉公に行くときです。

「許してくれ」と、お父さんが言いました。当時は貧困の時代で、お父さんも大変だったのだと思います。

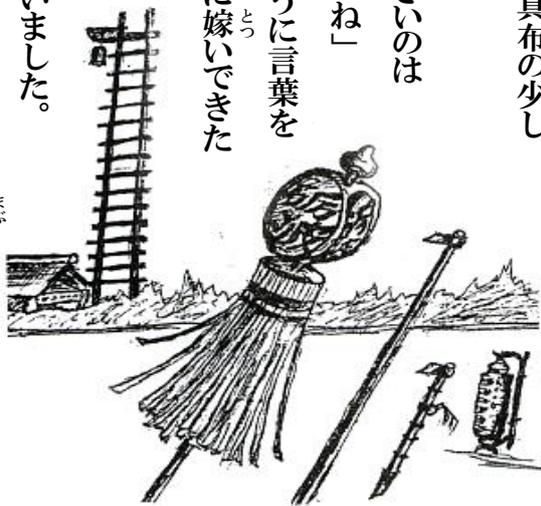
# きつね火 び

「おい、山の裾野すそのにいつぱい光っているのが見えるか？」  
「ああ、見える見えるきつね火だな。今日はまたいつぱいいるな」  
秋になるときつねの繁殖期はんしよきに入り、山裾に多くのきつねが下りてくるのです。夜になるとたくさんきつねの目が月の光で青く光って火が燃えているように見えます。  
それを村の人は、『きつね火』  
と言っていました。  
きつね火は、動くまと火の玉の  
ように見えるので、間違える人  
もいて、あまり気持ちの悪いも  
のではありませんでした。  
また、月の光で尾おが光る鳥も  
いて、それなどは本当に火の玉  
が飛んでいるように見えたそう  
です。



# 火事と赤徳 あか あざ

夏のある日、突然火事を知らせる半鐘はんしよが鳴りだしました。  
ちょうどお昼どきです。家中みんな慌あわてて外に飛び出すと、南の方  
角が真っ赤に燃もえています。  
「あれはでっかい火事だぞ。清真布せいじんふの少し  
向こうかもしれないな」  
「かわいそうにね。火事が大きいのは  
くず屋に火の粉が飛んだのかもね」  
お父さんとお母さんが心配そうに言葉を  
交わしています。この春、息子に嫁よめいできた  
嫁さんも、怖いもの見たさに、  
の  
伸び上がるようにして烈はげしく  
燃え上がっている火の手を見ていました。  
真夏の太陽は頭の上です。嫁さんはあまりの眩くらしさに、突然右手を  
額ひたいにかざそうとしました。それを見ていたお母さんは、気が狂くるった  
ように嫁さんの右手を払はらったのです。  
「顔に手を当てたら駄目だめだ！」



側にいたお父さんも思わず大声で怒鳴りました。

「ほんとじゃー、絶対に顔に手を当てたらいかんぞー！」

二人とも凄い形相で怒っているのです。嫁さんと息子は、突然怒られたので何が何だかさっぱり分かりません。

「さあ、さあ、みんな家に入ろう、入ろう」嫁さんと息子は、まだ見ていなかったのですが、むりやり家の中へ戻されてしまいました。

お母さんは、嫁さんに向かっておもむろに言いました。

「お腹に赤ちゃんがいるときに、火事は見な

いほうがいいんだよ。昔からいわれていることだ

けどね。お腹に赤ちゃんがいるときに火事を

見ながら顔に手を当てると、赤ちゃんが生ま

れたとき、同じところに赤痣ができるんだよ。

顔ばかりではないんだよ。

お腹にもぜったい手を当

てたらいかんよ」

昔はそんな言い伝え

があつて、お腹に赤ちゃ

んのいる人は、決して火事

を見ることはしなかったと

のことです。



あだ かね たいこ

## 仇になった鐘と太鼓

それは明治二十七年の四月初めでした。郷里にはまだ鉄道がなく、伏木港に行くにはおよそ十里もある道のりを、川舟で行くのが唯一の交通手段でした。私たち六家族二十八名は、前年に幌向原野の貸下地に入植した親類の力強い手引きがあつたからこそ、未知の北海道への移住を決意したのでした。いよいよ川舟に乗ることになりました。

川べりには村中の老若男女が見送りに集まりました。

どの家族の身内にも、蝦夷ヶ島行きには絶対反対を唱える人がいま

した。当時北海道は極悪罪人の流される恐ろしいところだと多くの

人が信じていたからです。

「今からでも遅くないから、蝦夷ヶ島に行くのをやめてくれ」と、泣

く者喚く者で川べりは愁嘆場と化していったのです。

この大混乱の中にあつて私たちの決意は揺るぎませんでした。

行こうと決めた私たちには、未来がバラ色に輝いて見えたのです。

こうして約束の船出に間に合うように伏木の宿に着きました。

伏木港からは一五〇〇トン位の遠見丸で出航しましたが、途中で

しげに遭い佐渡へ避難する騒ぎもあり、予定を大幅に遅れて函館港

に着きました。函館では大きな船に乗り換えましたが、その船内で生まれて初めて電灯というものを見たのです。食堂に行くとき高さ六尺(約一八〇センチメートル)、幅二間(約三六〇センチメートル)位の棹の中に、はつきりと向こう側の様子が見えてきました。

そこには、私と同じような者がじつとこちらを見ています。世の中には自分に似た者が二人いるということだが、感心して暫く見とれていたものです。私が近寄れば先方も近寄り、そこでようやく鏡だと気づき、まったくの田舎者でいかに文明に遅れていたことかと、自分ながら苦笑をこらえ恥ずかしさに赤面してしまいました。

次に驚いたことは、函館のソバが一錢五厘もしたことでした。内地では七厘だったからです。ちなみに北海道では白米一升八錢でした。小樽港に着いたのが四月二十二日でしたから、伏木港からは十一日間の長い船旅となりました。客車の便数は少なく、小樽に一泊、翌二十三日は札幌見物をして一泊、岩見沢に下車したのは四月二十四日でした。

室蘭線は明治二十五年に開通していましたが、志文駅も清真布駅もありません。私たちは迎えの人を入れて四十余名が手荷物を分け合い、停車場通りを進みました。やがて夕張通りに出たので右に曲がり、一列縦隊の長蛇となつて南下したのです。

さてさて、この夕張道路が曲者で、泣く子も黙るぬかるみの悪路で

した。私たちは膝までぬかりながら、戦禍に追われた避難民さながら黙々と行進を続けたのです。悪戦苦闘の末に、どうにか南七線に入りました。もちろん道路はなく、官設排水溝の上げ土の上を伝い歩きました。湿地では、倒木を並べ、年寄りや子どもを誘導しました。昼なお暗い大木密林のトンネルを潜るようになって行く中、ようやく二、三反拓けたところに草葺きの掘立小屋が見えてきました。

それがお寺とは名ばかりの説教所でした。私たちはそこでわらじ脱ぎ(開拓地に入り旅装を解くこと)をしたのです。その夜、疲れを癒す間もなく岩見沢駅へ別便で送った荷物の引き取りに行きました。

内地から送った米、味噌、家財、農具など大きくて重い物ばかりが六戸分で七トン車二台の貨車で搬送されてきました。

到着した岩見沢駅からは、一マイル(約一・六キロメートル)まで台車(トロッコ)の使用が許されました。夜になって汽車が通行止めになってからの仕事です。

正直に一マイルで荷物を降ろしていたら、おそらく利根別川の鉄橋付近だったでしょう。無理矢理に今の志文駅の少し手前のオンコ神社(たぶん南四線の今の金子神社付近)のところまで運びました。

急いで三、四名の者が空台車を押し戻しに行き、あとは二十名ばかりで、大きな荷物を背負って運ぶやり方です。とにかく幌向川の鉄橋を渡さなければなりません。中でも重い物は米の五斗俵でした。

風袋ふうたいを入れると二十一貫目かん以上(約八十キログラム)にもなります。箆たんすはそんなに重くはありませんが、嵩張かさばつてやっかいでした。どうかこうにか、あと三人が鉄橋を渡ればバンバンザイなのです。

先に渡った私たちは今渡ろうとする三人への鼓舞こぶと、大成功の前祝いをやることにしました。内地から持参したお寺の勤行用の鐘かねや、神社の太鼓を激しく打ち鳴らしたのです。

そのときです。鉄橋の詰つめの修繕工夫の合宿所から一人の看守かんしゅが出て来て『トーセンボー』をしてしまったのです。確かに不覚ふかくでした。夜もすつかり明けていたのですから。

運の悪いことには渡橋前の三人のうち二人まで五斗俵を背負っていたのです。もう一人は大きな箆たんすです。私たちにはそんなに悪気はなかったのですが、結果的には暗闇くらやみに乗じて違法いほうを繰り返していたのですからどうにもなりません。止むを得ず重荷のまま幌向川の堤防ていぼうを伝い、辻村農場を越えて夕張人道の釣橋つりばしを渡り、南七線の踏切ふみきりまで回る破目はめになったのです。鉄橋をすんなり渡れば、三、四十間しかないので、時間にして十分位で済すむところを、三時間から四時間を余分よぶんにかけて非常に難儀なんぎをしてみましたのです。



## ます な こじき 柵ますを投げた乞食こじき

昔は、家から家へと物乞ものこいをして歩く者を乞食こじきといっていました。当時は福祉ふくしという言葉さえない時代ですから、生活困窮こんきゆう者がたくさんいたのでしょう。乞食こじきといってもいろいろあつて単なる物乞ものこいばかりではなく、小道具せうどうぐを使って芸事げいじをしたり托鉢僧たくはつそうもいました。

これらの訪問者には、白米わくまいならお椀わんにせいぜい半分ほどか、お金なら一銭せんか二銭与えれば、頭を下げて帰かえつて行きました。その頃は、家に鍵かぎをかけず留守るすにしても、空き巣あきす狙ねらいとかコソ泥どろの話は聞いたことはありません。戦後になると乞食こじきの様相も少しずつ変わってきました。どこかに定住する者が、食い物が無くなると物乞ものこいに出歩くといった形です。『乞食こじきを三日やればやめられぬ』を地で行くありさまとなりました。

あるとき、立派りっぱな身なりの若者が玄関げんかんに立つていました。曰いわく、「おれの兄貴は、K村でどうかい百姓ひやくしやうやっているんだ。おれは事情があつてこうして歩いているんだ。米を少し呉くれてやってくれ」

そのとき農家の主は、「いい体をしてこの野郎。自分で働ここうという気がないんだらう」と、腹はらの中で思ったが、後難ごなんを恐おそれてそれはいわな

かつたそうです。主は、お米を量る小型の杓に、すりきり一杯お米をやったのです。若者はそれをひったくるように取り、

手持ちの布袋にお米をあけたまでは

よいが、空になつた杓を板の間にぶつけるように放り投げたのです。そして、

「なんだこの杓！、人を馬鹿にしや

がつて。おれはこんなもんに騙されんぞ」

と突然凄んできたのです。

この杓は、一合と二合が量れる両面の造りになった

精巧なものでした。主ははつきり言いました。

「あんたこそ何さまの気になつてるんだ。菓子折りの上げ底と勘違い

しなさんな。この杓は立派な芸術品なんだよ。普通ならお椀か茶碗

に僅かの米を掬つてやるところだ。あんたが事情があるというからお

椀じゃ失礼かと思つて、ちゃんとした杓を使つたんだよ。

正一合はあるよ。この心遣いが分からんようなら、もう歩くのはや

めたほうがいいな」

くだんの若者は、主の言った本当の意味が通じたかどうか分かりま

せんが、不敵な笑みを残してその場を黙つて立ち去りました。



## まじないと呪文

じゆもん

① 開拓期に内地から持ち込まれた口承文芸(習俗)

① 蝮のハリ(毒)を取り去るまじない

人の手や足にできた小さな傷を放っておくと、そこから黴菌が入つて熱を持ち、水ぶくれになつてかなり傷むことがある。このことを昔から『蝮のハリ』が侵入したと恐れられた。

これを癒す呪文は次のとおりである。

♪ むしろの山の兵のだいらの、じゃこまむし。

蕨の恩徳忘れたか。油雲懸、油雲懸

この呪文を外に洩れないように口の中で唱え、患部に向けて息を吹きかけ、白紙を敷いてその上に患部をのせ、ナイフか剃刀で軽く撫でて、付着した芥と一緒にハリを落とすのである。これを三回繰り返して落ちた芥を、その刃物で静かに寄せ集めて押すと、芥の中にある一種の黴菌が飛ぶのである。飛ばなければ他の症状であり、蝮のハリの場合は必ず飛ぶという。

このまじないで治つた人はたくさんいるが、一例をあげてみる。

N氏が由良の開墾地へ小屋掛けに行き、蝮を踏んで足の甲をまとも

に嘔まれ、齒型が三つもでき血が滲む重症を負った。

仲間が半道約二キロメートル以上の道のりを背負って、まじないをする私の家までたどり着いた。本人は眼が吊上がり、一つのものが二つに見えるほど半ば朦朧としていた。早速、呪文を唱えながら前記の動作を繰り返したところ、白紙の上の芥と一緒にあつたと思われる目に見えない何かが、たくさん飛散したようであつた。

その後N氏は私のところへ一週間ほど毎日通い、まじないを受けた結果、少し化膿したけれど医者にかからず全快した。病院へ行けば、あるいは足首から切断されたかもしれないのにと、大変喜ばれたが、私にしてもすこぶる冒険であつたといえるだろう。この場合はまじないを信じた両者の執念が勝つたといふべきであろうが、故郷の隣村では、この種の怪我や病気に家伝の妙薬が使われていたらしい。

つまり、ある種の草の根を黒焼き粉末にして、買った薬と混合してまじないに使つていたというが、実際には買った薬は嘘で、黒焼き粉末だけを使つていたことが分かつてきた。この呪文の中に『蕨の恩徳』という言葉が出てくる。

私は、この謎は『蕨』に違いないと気づき、蕨を根から掘り取り、根の部分の三寸ほど切り、乾燥してしまつておき、何かがあつた時は家伝の妙薬として使つた結果、その効果は絶大であつた。

## ② おこり(マラリア)を落とす方法

昔から『おこり』を落とすのに色々な方法があつたが、ここに紹介するのは算盤を使った方法である。

最初は患者に算盤を振らせ、振つた回数を覚えておき、本人の年齢に掛けて出た答を七十二で割る。どうして七十二なのか分からないが、奇数で割るとなかなか割り切れない。割り切れたらその数の出た桁のところ(算盤の箇所)に灸をするのである。

この意味は『おこり』を焼き切るといふことらしい、割り切れたとき灸では大体『おこり』は落ちたが、割り切れない場合は時折落ちないことがあつた。算盤を振るのはおよそ隔日になつていたので、振る日の朝、太陽の昇る前にこれを行い、答のできたままにしておき、あとから灸をした。この方法を具体的に説明すると、十八歳の者(男女の別なし)が五回振つたとする。十八に五を乗ずると九十であり、これを七十二で割つても割り切れないので、五桁目のところにモグサで灸をした。ただ、この人に灸をしてもらえば癒えると信心している時は、不思議に『おこり』が落ちた。

## ③ 火傷の『ひやりむく』を止める方法

火傷の独特の痛みは激痛そのものである。呪文を次に記す。

♪ 猿沢の池のほとりにありきるが、

あづかの入道おうてこそすれ。油雲懸、油雲懸

この呪文を二度口の中で無言で唱え、次にまた二度唱えて患部へ、じきじきに息を吹きかけ、次に患部を足で三回踏む真似をする。

この踏む真似を何故するのか分からないが、身体の部位によってはとても勿体なくてやりにくいこともある。

編者注 『油雲懸』とは、天に祈る言葉。

『ひやりむく』は、ずきんずきんと傷むこと。

#### ④ 乳房が痛むのを癒やすまじない

婦人の乳房が突然痛み寒気がしてがたがた震える場合は、墨を濃厚に磨り患者を正座させ、肩から手を出して患部のところに『鯉』の字を何回でも書き、文字が墨で判別できないほどとする。

これを朝昼晩と三回実行すれば医者に行く必要がなく、治った実例が数多くある。この方法は、患者の前から書くのでは正常な字になるが、後からしかも肩から手を出して書く『鯉』の字は逆さまになる。ここに不思議な意義があるのではないだろうか。

とにかく鯉は乳に深い関係があるらしく、乳の出ない婦人が鯉の味噌汁を飲むと効果があるといわれている。

#### ⑤ おがめ(たむし)を癒すまじない

近年戦後はあまり見かけなくなつたが、昔は多くの子どもたちが罹患していた。顔面に多く出た銭型の腫れ物で、ぶつぶつと出てとても痒く伝染しやすかつた。これを癒すには、前例のように、墨を濃厚

に磨り、患部に『南』の字を何回も書き、その上にさらに墨を塗ることを朝昼晩と五、六回行えば間違いなく治る。

編者注 『おがめ』は田虫ともいわれ、湿疹状白癬の俗名

#### ⑥ そら手(臃鞘炎)を癒すまじない

炉鉤の鍋を掛ける曲がったところの上に輪になった部分がある。

そこに一尺(三十センチメートル)ほどに切ったモトイカ木綿糸を通過させ、それを手首の傷むところに二廻りほど巻いて縛っておく。

これも実験済みなので必ず治る。

編者注 『モトイ』とは、髪を束ねる細い紐のこと(元結)

#### ⑦ 棒を寄せる方法(これは手品ではない)

六尺くらいの同じ長さの垂木を二本用意する。この一方の小口に墨で『三』の字を一字宛書き入れる。この垂木を他の者に直立して両手を下げて手の平を折り曲げ、垂木の中ほどのところを握らずに載せて置かすのである。その垂木は前にも後ろにも動かぬ自然に揺れる程度にさせておく。そのあと、垂木を手の平に載せて立っている人の真向かいに正座して神前に礼拝すると同様の形式に二拝礼二拍手一礼拝して、次の呪文を他人に聞こえぬように口の中で唱えるのである。

♪ カー。こんず、こんず。かへりこんとは思へども、

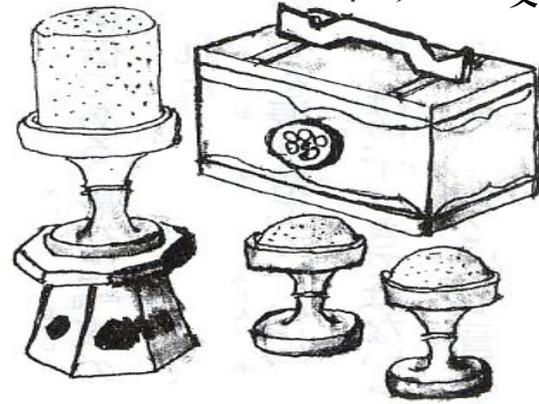
定めなきよに定めなければ

この呪文を二度繰り返して、そのあとに『油雲懸、油雲懸』を、これ

も三度唱えると、垂木の前方が上下してふらふらと動き出す。

そして垂木の先四、五寸のところを交叉するまで、口中で他人に聞こえぬように「より左、より左」と、何回も続けざまに唱えていると、ついに垂木の先四、五寸のところを交叉する。今度はこれを分ける前に、

「これからこの垂木を元のように分けて見せます」と宣言して、このあとは口中で無言で「分かれ分かれ」と言いながら、元のところまで分かれるまで唱えていると元どおりになる。このとき注意すべきは、小口に二三の字が書かれた二本ともが前方になり、文字



が逆さまにならぬように気をつけることが肝要である。

この芸は、十三歳くらいのおとき兄から習い、小学校では友人の前で成功していた。友人に教えてくれといわれたが絶対教えなかったが、先生が相手の持ち方が悪いから試験してやるといわれた。ここで呪文の秘密をいつてしまえばおしまいだから、「今度二度と芸ことはしません」と言ったら先生は、「何だ。子どものくせに、できもしないことをして人を欺くな」と、さんざん叱られた。そこまでいわれて引き下がるわけにもいかず、先生が試験のために垂木の先を持つといわれるので

自信がなかったが、順序に従って思い切つてやっているうちに大成功に終わった。このときは、百人以上の全校生徒の見守る中でうまく出来たので大評判になった。しかも肝心の秘密は、「教えてくれ」という先生にもとうとう教えなかった。

### ⑧. 猫よほり

猫が自分の家に帰つて来ないときは、百人一首の内の中納言行平の歌を紙切れに書き、それを猫窓とか猫の碗に逆さに貼つておくと、生きてくる限りは帰つて来る。

### ○ 立別れいなばの山の峰にふる

まつとしきは今かへりこん 《中納言行平》

編者注 よほり 〓 呼び

### ⑨. 婦人を呼び止め、または歩いて行く婦人を

振り向かせるまじない

これは私が聞いているだけで、一度も試していない。若い女性が自分の先を歩いて行くときに、次の歌を三度唱えると、その女性が立ち止まるか振り向くというのである。

これも百人一首の歌からである。

### ○ 天津かぜくものかよひぢ吹きとぢよ

乙女のすがたしばしとどめん 《僧正遍照》

## ⑩ 馬を繋つながずして逃げて行かぬまじない

これは私が小学校時代に学校の隣となりの馬が逃げ出したとき、試ためしてみたが何ら効果がなく、馬は遠慮えんりよなく逃げたのでがっかりした。

その文言は次の如ごとくである。

♪ 天竺てんじくのまはりはんくの西東。北や南にませさいて、

繋がぬ駒こまのいさまぬやうに。油雲懸 油雲懸

油雲懸の言葉は、太陽にお祈りする呪文だと聞いている。

以上の十項目は、いずれも父から教おそわった我が家の秘伝ひでんである。

最初に『蝮おろの針を卸おろす事』を教えられたときに、父から次のように聞かされた。「もちろん雑行ぞうぎやう雑修ざつしゆ自力の心を振り捨てて、一心に阿弥陀仏あみだぶつに帰依きえしようとする自分としては、今後これらのことから成すべきではないと考えた。これからは自分が止めて、お前に教おほえるから覚えておくように」と言われたのであった。

若い時はあまり深く考えず、少しでも人助けになればと応用してきたが、年を経て私もその当時、父の言った言葉の重さが次第に分かるようになってきた。遅おそまきながら私も念仏ねんぶつをさせていただく身になって、前述ぜんじゆつの教わり引き継ついだことがらを、今後は成なすべきでないと思得たので、将来しやうらいに何かの参考とするものがあれば合せだと思ひ書き残すことにした。

## 地震じしんの伝説

昔から地震にまつわる言い伝えはいろいろありますが、私が子供の

ころ祖父母から、なにげなく

聞かされた記憶きおくをたどって記

してみます。

地震が来たとき、揺ゆれ方が

激はげしくなると、年寄りとしよりは決

まつて「よなおし、よなおし」

と連呼れんこしました。子供心には

「おさまれ、おさまれ」と、

地震に呼びかけているよう

に感じたものです。今ひとつは

「今、何時なんどきかいな。こりや風の地震じこくだ」

「いや、雨の地震だ」とか、その発生時刻じこくによつて後の天候てんこうなどを予

測はかしていたようです。昔は時計がないので、晴れた日は太陽の位置で

時刻を計算けいさんしていたそうです。

また、曇くもりや雨の日は、猫の黒目の大きおほきさで判断はんだんしていたそうです。



猫の黒目は正午になると、縦一線に針のように細くなります。

それも時間の経過と共に次第に黒目が増してゆきます。この黒目の分量と多年の経験により、正確な時刻を判断するのです。

昔は、二時間を一単位としていましたが、あいだに半を入れて次のような十二区分になっていたそうです。

十二時 || 九ツ、 一時 || 九ツ半、 二時 || 四ツ、

三時 || 四ツ半、 四時 || 五ツ、 五時 || 五ツ半、

六時 || 六ツ、 七時 || 六ツ半、 八時 || 七ツ、

九時 || 七ツ半、 十時 || 八ツ、 十一時 || 八ツ半、

と称し、午前と午後の呼び方がはっきりしていたかどうかは不明ですが、『明けいくつ』『暮れいくつ』と小説などでは出てきます。

そこでお天気占いに戻ります。地震の起きた時刻を確認して、その後の天候などに当てはめるのです。

次のことわざは、午前、午後に関係なく、四ツから九ツまで一日二十四時間全部に該当します。ただし、これが当たるか当たらないかは別として、多分に遊び心があつたように思われます。

大きな地震でなければ遊び心ですまされませんが、阪神淡路大震災のような大災害もありましたので、不適切な表現のところはご容赦ください。『五七の雨に四ツ日照り、六ツ八ツ風に、九は病』

(「こしちのあめによつひどり、むつやつかせに、くはやまい」)

## 村の郵便屋さん

ゆうびんや

栗沢町に初めて郵便局が設置されたのは、明治二十九年(一八九六年)、小西農場主、小西和さんが局長となり、小西農場事務所内において郵便業務を開始したのが始まりです。郵便等の集配区は村内一円で一七〇〇戸ぐらいあつたようです。その後、清真布駅ができたので、清真布市街に郵便局が移りました。

「こんにちは居ますか？ 郵便ですよ」

と言って、肩から下げた大きな黒いカバンの中から手紙を出して、一軒一軒の家を回っていました。今と違ってバイクや自転車がいない時代だったので、雨の日も雪の日もどんなに遠くても歩いて郵便を届けてくれました。村の人はその人を『郵便屋さん』といっていたのです。

「郵便屋さんが来たよ。家の前を過ぎ

ていったから、今日は家に郵便は来ないね」

「こんにちは、おばちゃん元気かい。手紙だよ」



「ご苦労さん。郵便屋さん、すまないがこの手紙出したいのでお願いします」

「あいよ」当時はポストなどなかったので、遠くの人は郵便屋さんか来るところとして頼みます。村内の一軒一軒の家を回る郵便さんは若い人が多く、村の情報屋さんでもありました。

「郵便屋さん、村はずれの茂吉じいさん、元気かい？」

「元気、元気」

「おじさん、川向の家に男の子が生まれたよ」

当時は村の中の出来事、様子を一番知っていたのは郵便屋さんだったので、村の人は何かあると郵便さんに聞いたものです。

いっしょう

## 一升おにぎり

「母さん、明日は山に行く日だよ。いつものおにぎり頼むよ」

「あいよ、一升おにぎりだね」

大正末から昭和の初め頃、上幌の男の人は冬になると山へ働きに行っていました。丸太を切り出す仕事をするのです。次の朝、お母さんは大釜でご飯を炊き、一升おにぎり作りにかかります。ご飯ができたら釜を逆さにして、鍋蓋の上に一升のご飯をのせたのです。お母さん

は蓋の上の一升ご飯を両手で丸くなるように握って、一升のご飯を一つの丸いおにぎりにしました。

そのおにぎりを大きな薄皮に包んで一升おにぎりのできあがりです。

「お父さん、一升おにぎりできたよ」

「できたか」と言ってお父さんはそのおにぎりを風呂敷に包み、腰に縛りました。手には縄で縛った二本の沢庵。

お父さんは、大ノコを担いで山へ出かけました。沢庵は雪の上を引きずっています。昼頃になると、誰となく雪を掘り、小枝を集めて燃やします。

「おーい、みんな昼にしようや」

火を囲み一升おにぎりの昼食です。どうして一升おにぎりかという

と、小屋もないので木に掛けておいたおにぎりは、昼頃になると外側

が焦れているのですが、中は大丈夫。しばれた外側を火でほんのり

と焼いて食べるのです。二本の沢庵は、雪の上を引きずって来るうちに

糠が程よくとれておいしいのです。みんな火を囲み、沢庵をおかず

に一升おにぎりを食べているところを想像するだけで、楽しい笑い声

が聞こえてくるようです。



# 井戸から聞こえた

## 地下水の音

栗沢の平野部は泥炭地でいたんちが多く井戸水は、茶色がかつてることが普通ふつうでした。それ以外の埴壤しよくじょうど土地帯でも多くは地下水脈めくに恵まれず、かなげ水に苦勞してきました。

井戸端ぼたには、木桶おけに砂利や砂を入れてろかろか装置そうちを使う家もありましたが、数日もすれば水垢あかが詰つまって水が出なくなり役に立たなくなるのです。急ぐときは、汲くみ上げた水をそのまま沸騰ふいとうさせて使うのですが、茶碗ちやわんの底にはまがまがしい赤いオリが残るのでした。



折おりしも昭和十一年の陸軍特別大演習のときは、村内の飲料水検査がありました。その結果、ほとんどの家では『飲料不適』の赤い字の紙を玄関先げんかんとせきに貼はることになったのです。

『飲料適』の黒い字は木札でしたが、めったに見ることはできませんで

した。これに比べて、国道以東の丘陵地きゆうりゅうちでは、ところどころ良質の地下水脈かんそうちに恵まれていましたが、農業をするためには浅い埴土けんそうちの乾燥地であったため、地力の減退げんたいも早く、これらを補おぎなうために畑作に乳牛らくのうけいを組み入れた酪農経営らくのうけいが広まっていきました。

乳牛かを飼かうには、大量の飲料水が必要とされましたが、酪農家では豊富ほうふな地下水脈すいみやくに着目ありました。どこを掘ほっても出たわけではありませんが、うまく探さぐり当てれば、汲くみきれないほどの水量すいりょうを確保かくほできます。A宅の井戸は十三メートルほどあり、もちろん外井戸かきでしたが、懐中電灯かいちゆうとうで中を照てらしても底まで光が届とどかず、鏡かがみを使って太陽光を反射かせてようやく水面すいめんを確認かくにんしたそうです。

その井戸は不思議ふしぎなことに蓋ふたを開けると、「うおー」と音がすることがありました。これは地下水の音ではなく、気圧きあつあるいは気温きんの急激きやくな変化へんかによるものだったのかもしれない。

今では田んぼの真ん中に、かつての井戸がそのまま残され、ビニールハウスの給水きゅうすいなどに利用りようされているそうです。

言い伝えによると、今は牧草地ぼくさうちになっていますが、ある酪農家の井戸は地下水の流れる音がはつきり聞き取れたという逸話いっわも残のこっているほどです。

# ねずみの仕返し

『ねずみの嫁入り』は知っているけれど、

『ねずみの仕返し』は知らないって……。

『仕返し』は『仇討ち』『復讐』の意味も

あります。私は長いあいだ米倉庫の仕事を

していましたので、ずいぶんねずみには悩ま

され痛い目にもあわされてきました。

国民一人あたり米二俵を必要とした時代

は生産が追いつかず、米はととても貴重で

一粒たりとも粗末にできませんでした。ところがそんなことにおかま

いなく、驚くほどたくさんねずみが米倉庫に集まってきました。

生き物は食物連鎖で繁殖しているので仕方がないことでしょうが、

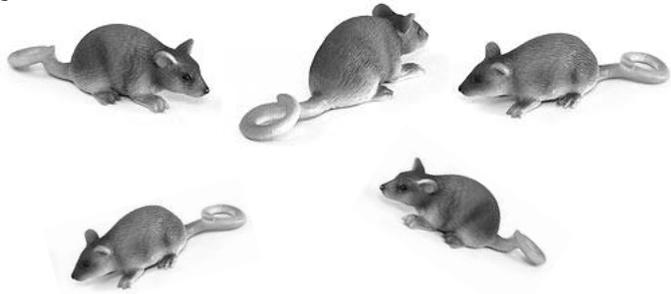
物凄かったですよ。倉庫は簡単にねずみが入る構造にはなっていない

んが、ねずみは高度のテレパシーで仲間を呼び集めるのですね。

この対策として、倉庫の出入り口には『ねずみ返し』という、外から

絶対に入れないが中からは容易に外に出られる、人間さまの知恵を

絞った道具を仕掛けていました。それにもかかわらず、ねずみは学習



熱心で、人間のちよつとした盲点を必ず探し当て侵入に成功するの

でした。ある時、『ねずみ返し』を改良するため、一時取り外したことが

あります。するとどうでしょう。どのようにして情報が飛び交った

のか、倉庫前の広場の四方八方から出入り口めがけて逆放射状に

ねずみの大物が続々と押し寄せてくるではありませんか。

慌てるかぎり限ってどうしたものか倉庫の戸がびくともしません。

私は咄嗟にそこにあつた竹箒を取って、無我夢中で地面を撫でつけ

るように何度も何度も追い払いました。

しかし、賢いのが何匹かうまく隙を見て、難関を突破して倉庫に

入り込んだのです。こんなありさまですから、ねずみゼロの倉庫は不

可能で、倉庫がねずみの巣窟となるのにそんなに日数を要しませんで

した。夏を迎える前には倉庫を密閉して気化薬品によってねずみ

掃討大作戦を展開するのですが、その前に倉庫内で

発煙筒を焚き、小さな穴まで見つけ出します。

穴ふさぎには粘土を使いましたが、切り屋根部分は

非常に高く、壁に差し掛けた長い梯子だけが頼りな

のでとても怖かったです。薬品処理後倉庫に入る

と、明かり窓付近には累々とねずみの死骸が、

数え切れないくらい転がっていました。おおげさ

ですが箕に一杯ほどになったこともありました。



あるとき、ねずみの天敵イタチが倉庫に入ったこと

もあります。そのときは殆どのねずみを退治してくれ大助かりでした。血を吸われた多数の

ねずみは俵と俵の間に拡散状態でしたが、

ミイラ化していたので、衛生的にあま

り悪影響がなかったと聞きました。

私たちの合言葉に、『ねずみを捕る

なら絶対逃がすな』という鉄則みたい

なものがありました。手負いの熊は

凶暴化して人を襲うのと同じように、

ねずみを撲殺しようとして取り逃がしたら、必ず仕返しをされると

いわれていたからです。

しつぽも含めると優に数十センチメートルもあるイタチのような巨

大なねずみは恐ろしいくらいでした。これらが示し合わせて一晩のう

ちに荷札何百枚もめちやくちやに噛み裂いたり、一俵の米俵を集中

攻撃して台無しにしたこともあったのです。

「ねずみを取り逃がしたら最後、必ず仕返しされるから、獲れない

のなら最初から手を出すな」と、よく先輩から諭されたものでした。



あぶらあ ぬす

## 油揚げを盗むきつね

小さい頃よくおじいさんが話してくれた、嘘のような本当の話です。

昭和の初めの頃、上幌市街も岩見沢から夕張へと通じる旧夕張道

路として、巡査駐在所、郵便局を兼ねる織田商店、性顕寺、

鮮魚店、駄菓子屋、集乳所など約三十戸近くもあり、活気に満ち

ていました。ここに働きの酒好きなおじいさんがいて、毎日朝早く

から暗くなるまでよく働いていました。

おじいさんの楽しみは、田畑の仕事の帰りに組合の雑貨店に寄って、

煮干しをかじりながらコップ酒を飲み、そこに来る友だちと仕事のこ

とや世間話をひと通り語っては、千鳥足で帰ることでした。

その日も気持ちよく酔った

おじいさんは、店を出ると

隣の中島商店で油揚げや

コンニャクを買って紙袋に

入れてもらい、暗い夜道を

千鳥足で家に帰りました。



家までは大きな木が生い茂り、草も背丈ほど伸びて、昼でも薄暗い

ところでは、観音堂かんのんどうの前を通り、家に着いて薄暗いランプの下で紙袋を見ると、買ってきた油揚げやコンニャクがなくなっているのです。

「またやられたな」、そんなことが時々ありました。

「昔からあそこには大きなきつねがいて、人を化かしては揚げやてんぷらを取った」との話でした。おじいさんにはよく、「遊びに行っても、きつねにだまされないように早く帰ってこい」と言われたものです。

## 忘れ者わす

太平洋戦争中でした。国民学校高等科のある学級では、勉強道具を忘れたら、二回目から墨すみで次のように書かれた赤い札を首から吊つるされました。

- 一回目 説教せうきょう
- 二回目 " 及び「ワスレモノ」の赤い札
- 三回目 " " 「わすれもの」 "
- 四回目 " " 「忘れ物」 "
- 五回目 " " 「忘れ者」 "

説教とは実によい言葉ですね。長い時は一時間も延々えんえんと続きまし  
た。有難ありがたいことです。でも赤い札を首に吊るすのはとてもいやでした。

でもね、ある日、N君がついに最悪の目標を達成たっせいしてしまいました。そうです、N君が『ワスレモノ』第一号になつてしまったのです。

誰もが一番恐おそれていたことが、現実のものとなりました。そのころ特に忘れ物をする児童に厳きびしかったのは、戦場の兵士が鉄砲てつぱうを忘れたらどうなるかという教育でしたから仕方ありません。

先生は何とかして、児童が忘れ物をしない一つの方法として考えたのでしようが、『恥はじさらし』をさせておいて、果たして資質ししつの向上につながったでしょうか。それよりもN君の気持ちはどうだったでしょう。

彼は心の優しい素直な少年でした。休み時間になると『ワスレモノ』の赤い札をぶら下げて体育館に出て行きました。全校生が奇異きいの眼めを向けています。

誰かが「N君、カツドリやれよ」と囃はやしました。

彼には『郭公かくこうの鳴きまね』という特技とくぎがありました。彼は少しだけはにかみながら、それからにこっとして郭公の物まねを始めました。

「カツコウ カツコウ カツコウ」  
それは本物そっくりどころか本物



以上の素晴らしいきれいな鳴き声でした。体育館内は俄然明るくなりました。そのうちに、あちらでもこちらでも「カッコウ」「カッコウ」「カッコウ」とやりだしたから、体育館内は「カッコウ、カッコウ」の大合唱となりました。

あるとき私は、学校の屋根の雪降ろしに使うスコップを迂闊にも忘れてしまいました。登校途中に友だちが担いでいくのを見て気がつきましたが、始業時間に間に合いません。遅れたらまた説教です。距離は一里(約四キロメートル)ほどでしたが、雪道なので走りどおしでも片道三十分はかかります。

吹雪なら優に一時間はかかります。赤い札が目につきます。私がお昼休みの一時間にすべてを賭けることにしました。四時間目が終わるやいなや学校を駆け出しました。こうして私は、頭から湯気を出しながら、午後の雪降ろしに危うくセーフしたのです。

もちろん弁当なんか食べていなかったでしょう。その後、赤い札の運命はどうなったでしょう。

平仮名の『わすれもの』を見た記憶はあります。あるいは『忘れ物』までいったかも知れません。みんなが一番恐れたのは『忘れ者』の『者』だったと思います。さすがに先生も自分のやり方に違和感を感じ、やめてしまったのかも知れません。

## 雨おんな

栗丘トンネルの労役に酷使され、幾多の修羅場をくぐり抜けて生還した人の中で、幾人かは栗沢を第二の故郷として、定着した人もいたようです。でも多くの場合、難工事の実態についてはほとんど語られることなく、時は流れていきました。

この中に平蔵さんという人がいました。彼は一旦故郷の旧県に帰りましたが、妻を連れて再び栗沢の地に舞い戻ってきたのです。

夫婦が住みついた所は、ちようど平野部が丘陵にさしかかる境目付近でした。過去に営農経験があつたかどうか不明ですが、低収入の畑作でしたから、作物選定には熱心に研究を重ねていたようです。

試行錯誤を繰り返しながら着目したのが果樹のリンゴでした。その面積がどのくらいで、どのくらいの収益があつたのかはつきりませんが、ある期間は人目をひくリンゴ園が存在したのは確かです。美流渡、万字方面のリンゴ栽培は昭和五年頃からのので、それにさきがけていたのではないかとはいわれています。

仲のよい平蔵さん夫婦の悩みは、子宝に恵まれないことでしたが、十年ほどして待望の赤ちゃんが誕生しました。鼻筋の通った一目で

器量よしと分かる可愛らしい女の子で、夏子と名づけられました。

夏ちゃんは両親の寵愛を一身に受けて、近所でも評判の氣立ての良い子に成長しました。その夏ちゃんが二十歳になった頃、あれよあれよと思う間もなく、隣り村へ嫁に行ってしまったのです。

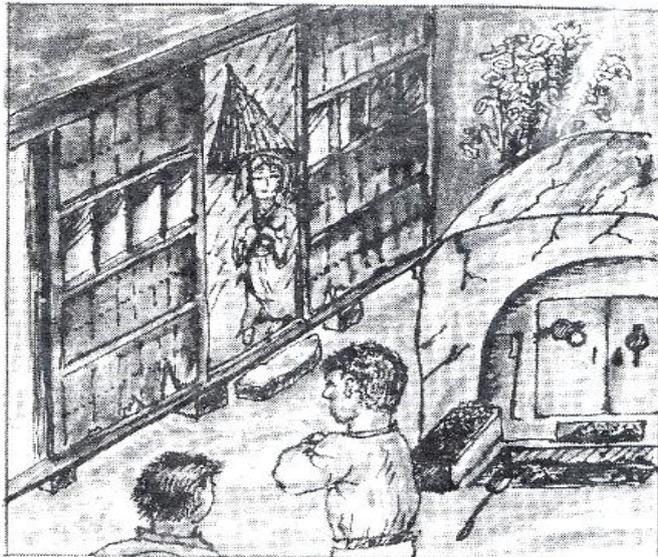
どんな事情があったか知りませんが、ひとり娘を嫁にやるなど当時としては到底考えられないことでした。このあと一年ほどして突然不幸がやってきました。

夏ちゃんが難産のあげく赤ちゃんを死産して、間もなく自分もこの世を去ってしまったのです。

その後、平蔵さん夫婦は内地から成人の男子を養子として迎えましたが、水が合わず離縁になってしまいました。

平蔵さんの晩年は、訪ねてくる親戚もなく、ずっと二人きりの生活が続ぎ、八十歳頃におぼあちゃんが、その後を追うように平蔵さんも亡くなりました。

それは夏の終わり頃、すでに造田されていて稲刈りには少し間のあ



る季節でした。隣近所が平蔵さんの葬式をするために集まったのが午後一時ころ。それでも一時すぎには火葬場に送ることができました。

火葬用の窯はひび割れがあり、燃料の石炭も火力が低く、そのため二、三人が交替で火夫になり火の世話をしなければなりません。三時間かかってもまだ十分ではなく、あれこれ世間話をしながら酒を飲んでいました。

外はいつの間にか雨になっています。ふと気がつくとも雨戸の外に着物をきちんと着た若い女性が傘をさして立っているのです。

「〇〇さんの家はどこでしょうか」

「ここは火葬場ですから民家はありませんよ。下の通りで尋ねてみたらどうでしょう。どこから来られたの？」

「清真布の停車場から歩いて来ました」

「足元に気をつけて行ってください。ここは粘土で滑りますから」

「ありがとうございます」

時間は午後の五時頃。雨は小降りになっていましたが、夕暮ではありませんでした。女性が下り坂を下りていったあと、火夫をしていた二人は思わず顔を見合わせました。

「白足袋、真つ白でなかったかい」

「そういえばそうだ。この雨降りの道の悪いのに、なんも汚れていなかった」

「停車場から歩いてきたって言ってたけれど、半道はあるよ。おかしなことがあるもんだ」

「待てよ、どこかで見たような気がするな」

「おい、まさか平蔵さんの娘さんちゆうことではないだろうな」

二人の人の顔が蒼白になりました。と同時に背筋がザワザワ、ゾクゾクとして、しばし震えが止まらなかったそうです。

きよまつぶ にんじよう

## 清真布の人情通り

今の栗沢市街地が、清真布市街地と呼ばれていた大正から昭和になつた頃の楽しい通りの話です。その頃の清真布市街地にはお店屋さんがいっぱいあつて賑やかな市街地でした。お魚屋さん、八百屋さんでは、元気なおじさんの、「はい、いらっしゃい」という大きな声が聞こえてきます。お豆腐屋さんは、朝早くから店を開けていて、近所のお母さんたちが朝の味噌汁に入れる豆腐を買いに来ていました。

お米屋さんやお菓子屋さんも何軒かあり、お菓子屋さんには子どもがいつも飴玉を買いに行っていました。いろんな雑貨屋さんもあり、今みたいに岩見沢だとか札幌に買物に行くことがなかったので、清真布市街は買い物をする人でいっぱいでした。その清真布市街の裏通り

でお店屋さんもなく、道幅も狭く、すぐ向かいに家があるような細長い通りがありました。通りでは、夕食時になるとそれぞれの家の前で夕食の支度が始まります。隣の家も向かいの家もです。

お母さんたちは大きな声で話をしながら楽しい夕食の支度です。

「お母さん、今晚のおかずは？」

「今日は秋刀魚だよ。もうすぐできるから早く帰っておいで」

そんな声も聞こえてきます。

「奥さん、お醤油が切れたから少し分けて」

「そうかい、あるから持っていきな」

「お米が足りないので少し貸して」

「それは大変だ。足りない分だけ

持っていきな」

この通りでは、そんな調子の毎日の暮らしでした。そして、この通りはほとんどの家が平屋造りで、道幅も狭く、長屋通りみたいなどころでした。でも近所のみなさんはこんなふうにお互い助け合いながら楽しい毎日でした。

「おばあちゃん元気？うちのおばあちゃん、今うちにいるから寄つていたら？おいしい饅頭があるよ」

「おじさん、角のおじいちゃん、体の調子あまり良くないとき」

「心配だね」



「村長さんが来るよ」、子どもたちの声です。

駅通りの方から髭を生やして袴姿でステッキを持ち、通りの人と話をかわしながら歩いて来るのは山田村長さんです。

村長さんの家はこの通りから近かったので、よくこの通りを歩いたそうです。夕食ができると天気の良い日などは、家の前で一家そろって食べることや、お隣、向かいの家も一緒になることもありました。

子どもたちにとつてそんな夕食は、最高に楽しい夕食だったので。またその頃、近所にはたくさんの子どもの子どもたちがいました。

通りの隅では女の子がゴザを敷いてままごと遊び、お店屋さんごっこ、お手玉遊びなども

していたし、自動車を通ることも

なかったので、道路は縄跳びや鬼ごっこなど、子どもたちの遊び場

だったのです。大人の人が、うちの前の長椅子で将棋や囲碁などをしている姿もよく見られました。電気はなく夜になるとランプがひとつ茶の間につくだけです。

もちろんテレビもなかったので、子どもたちは昼間の遊びで疲れ、兄弟みんなで仲良く早寝をしました。



## 岸壁の孫

戦争が終わった頃の話です。日本中が飢えていて食料増産が叫ばれていました。ところが西瓜などはぜいたく品だったため栽培している農家はほんの少しでした。それでもたまねぎ畑の中でひそかに育てられていることもありました。たまねぎの二重作ということで大目に見られていたようです。初なりを食べることができたのは早くても九月に入ってからでした。きくさんは四十八歳の働きざかり。七歳と五歳の孫がいたので、家の中では「ばあちゃん」と呼ばれていましたが、とてもとてもばあちゃん気分にはなっていられませんでした。

それは二人の息子を兵隊に取られ、終戦になって道内にいた長男はすぐに帰ってきたのですが、満州にいた二男の行方が知れなかったからです。きくさんは寝ても覚めても思うのは二男のことばかり。

小学校を休ませて稲刈りの手伝いをさせたこと、田んぼの中で西瓜を割って食べたこと。小さな西瓜だったので自分は食べずに二男にやると二男は喜んで、「あしたも学校を休んで稲刈りの手伝いをする」と言ったことなど、あれこれ思い出すと涙が止まらなくなるのでした。人づてに聞くと、シベリアに抑留されているらしい。シベリアという

所は、夏はやたらに暑く冬は想像を絶する寒さらしいのです。

きくさんは思っていました。「あんないい子が死ぬもんか。決して死なせてはならない。絶対に生きて帰ってくる」引き揚げ船のたよりを聞く頃になると、きくさんは一日に何度も道路まで出て栗沢方向に人影を探しました。夕方になると決まって北西の空に手を合わす日が続きました。そんな思いで作った西瓜の一番なりが、その年も九月の秋祭りにはどうやら食べ頃となったのです。きくさんは西瓜を大事そうにもぐと、さつそく仏壇に供え、二男が無事に帰ってくることを仏様に祈りました。ふと後ろを見ると、二人の孫がきちんとお座りをして、一生懸命に手を合わせているではありませんか。

きくさんは幼い孫たちが西瓜に向かって手を合わせているのを知り、「おつちゃんが帰ってきたら割ってあげるからね」と言ってきたら割ってあげます。

孫たちは毎日のように、

「ばあちゃん、スイカ、スイカ」と

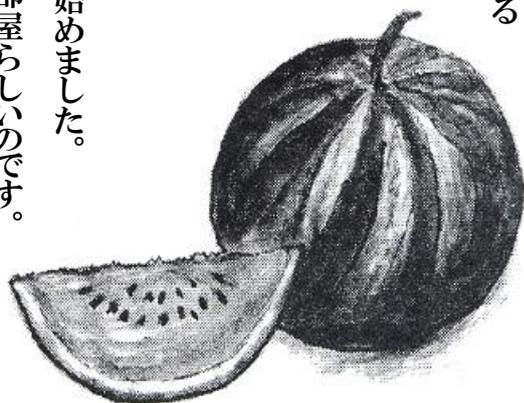
せがんでいましたが、ある日西瓜は

仏壇から消えてしまったのです。

誰もが西瓜のことを忘れ一か月ほど

たった頃、家の中に異様な臭いが漂い始めました。

異臭のもとはどうやらばあちゃんの部屋らしいのです。



家族がばあちゃんの部屋の押入れを開けてみると、ぐちゃぐちゃに腐った西瓜の残骸がありました。ばあちゃんは、どうしても二男が帰るまで西瓜を食べることができなかつたのでしよう。こんなことが三、四年続いたあと、きくばあちゃんの一念がシベリアのラーゲル(収容所)に通じたのでしようか、二男が無事に帰ってきたのです。それは、きくばあちゃんが仏壇に西瓜を供えた日でした。

## 土管工場の煙突

えんとつ

太平洋戦争中は軍備増強はもちろんでしたが、食料増産の掛け声も大変なものでした。昭和十八、九年ころになると、『対米決戦大空知総進軍』の大スローガンを掲げ、水田の暗渠排水事業が半強制的に推進されていきました。旧制中学や実業学校の生徒たちは、各農家に泊まり込みで暗渠掘りに動員されました。十二月になつても動員は解除されず、十五、六歳の少年たちは、手足を真っ赤にして氷を割り、暗渠排水を掘りました。

そのころから暗渠排水には素焼き土管を使うようになり、需要がどんどん伸びることになります。昭和十九年戦時体制下に興農公社が設立され、北海道各地に二十四箇所四十七工場を数えたそうです。

空知管内では六工場が創設され、栗沢最上の『清真布工場』は道内の主力工場としての役割を担ったそうです。

戦後まもなく酪農協同(株)に移り、昭和二十三年からは北海道農材(株)の『清真布工場』として素焼き土管の生産を継続し、最盛期には二寸土管の年産が四〇〇万本に達しました。土管一本の長さが約三十センチメートルなので、換算すると二二〇〇キロメートルにもなり、日本列島縦断に迫ります。エピソードになりますが、戦後間もないころ、この土管工場を会場として『楽団演奏会』が催されたことがあります。近隣町村からも若者が押し寄せて来たかもしれませんが、あの広い工場内が超満員の熱気に沸いたことがありました。

清真布工場の名は、昭和二十四年の町制施行のとき清真布市街地や清真布駅の名が消えたのちも、工場関係者のこだわりで、昭和六十三年十月まで使われていました。

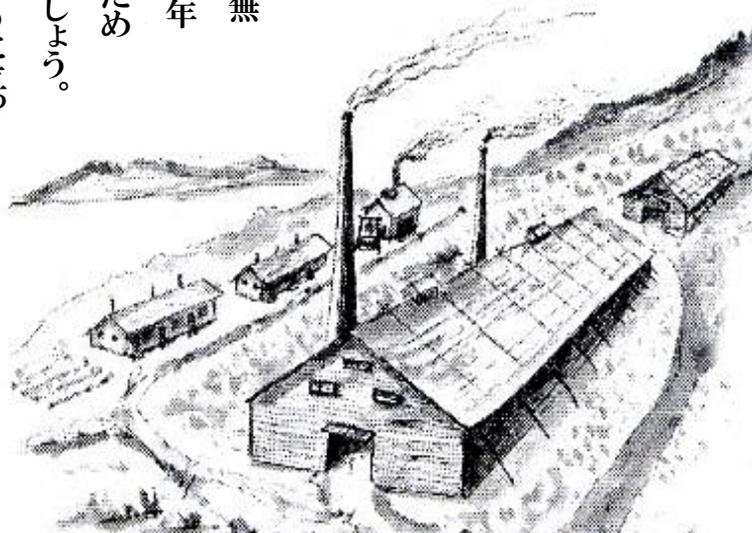
昭和六十三年十一月からは、北海道農材(株)『栗沢陶磁器工場』として再出発しました。町花のパンジーを絵柄とした湯飲茶碗や、水滴の付かない素焼きのビールジョッキなどが好評でした。その後、会社の都合により、平成十五年に至り土管工場以来足かけ六十年におよぶ長い歴史を閉じたのです。堂々たる二本の煉瓦の煙突は、それにふさわしく根元部分は一辺が約三メートルもある巨大な四角形です。上に行くほど徐々に細くなり、高さは無鉄筋でありながらおよそ二

十メートルもありました。遠くからでもよく見えた二本のレンガの煙突は、「ああ栗沢だ」と人々に癒しと安らぎを与えてくれる温かい雰囲気がありました。

地元のシンボルのように慕われ、度重なる十勝沖地震や北海道南西沖地震にも耐え抜いてきた煙突でしたが、工場の歴史とともに、ある日忽然と姿を消してしまいました。

あの巨大さにもかかわらず無鉄筋だった弱点もあり、数十年という歳月が風化を進めたため解体も止むを得なかったのでしょう。

いつもアベックで寄り添うように立っていたレンガの煙突も、今は私たちの心の遺産となったのです。時は絶え間なく動いています。



# 少年と新米のおにぎり

「おとう、遠くに見える黒い長い煙は何の煙だ？」

「ああ、あれか。あれは汽車の煙だよ。鉄の二本の道の上を人や荷物をいっぱい乗せて、村から村へと運んでいるんだ」

この話は、今の室蘭線が開通して栗沢に駅ができた頃の話です。

少年の家は農家で、栗沢の町からは遠くにあつたので、汽車がどんなものか見たことがなかつたのです。

「おとう、一度汽車を見たいなあ」

「今はだめだ。稲刈りで一番忙しくて

一人でも手伝いが欲しい時じゃないか」

昔の農家は、子どもでも十歳になると

一人前に農家の手伝いをしていたのです。

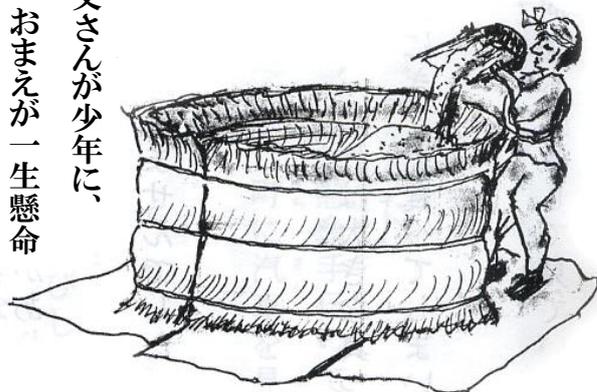
少年は汽車を見に行くのをあきらめ

一生懸命に稲刈りの手伝いをしました。

稲刈りが終わったある朝のことです。お父さんが少年に、

「おまえ、汽車を見たいと言っていたな。おまえが一生懸命

手伝ってくれたので、今年はずっとより早く穫り入れも終わったから、



町に汽車を見に行つていいぞ」と言ってくれたのです。

少年は思いがけないお父さんの言葉にびっくりし大喜びしました。

町までは遠く、帰りは遅くなるので、お母さんが新米で大きなおにぎりを一つ握つて腰に結んでくれました。

「おとう、おつか、行つてきます」少年は汽車が見られるうれしさで

いっぱいです。お母さんの握つた新米のおにぎりを持って、走つて家を出

ました。その頃は、農家でも新米の白いおにぎりを食べることはあま

りなかつたので、少年は走りながらもそのおにぎりが気になつてしかた

がありません。走つてきたので少年は丘の上で少し休みました。

少年はやはりおにぎりが気になつてしかたがありませんでした。

「お昼にはまだ時間もあるし…。ちよつと見てみるか」と言つて、腰か

ら風呂敷を外して開いてみると、それは大きな真っ白なおにぎりです。

少年はたまらなくなり、そのおにぎりを食べてしまいました。

それから少年は町に出て、大きな機関車を何回も感激して見てい

るうちに帰りが遅くなりました。

「おとう、おつか、ただいま」、ちよつど夕食の時間でした。

食卓を見るとお米のご飯ではありませんでした。

少年は胸がいっぱいになりましたが、見て感激した汽車のこと、お昼

前にお母さんの握つてくれたおにぎりを食べたこと、そのおにぎりが

本当においしかったことを話しました。

# アヒル炭鋏



栗沢の石炭産業は、明治三十八年の万字炭鋏の開鋏に

始まりました。大正三年の万字線開通によって石炭の輸送力も増し、昭和二十年頃には炭鋏の数は大小合わせて十二鋏を数え、農業と並んで栗沢の基幹産業でした。石炭の採掘が盛んになるにつれ、洗炭作業場から流れ出る多くの流れ炭が、川下に流れていくようになりました。春になると雪解けの増水で粉炭がいっぱい流れてくるのです。

それを狙って川沿いの人たちは、水中長靴を履いて深いところは腰までつかり、木の柄が五メートルもあるジョレンという網のついた道具で川底をさらい、トウシで砂利と川炭を振り分けて石炭を拾っていました。そんな姿が時には十数人も並んでいたものです。

恰好がアヒルに似ているので、それを称して『アヒル炭鋏』と呼んでいました。上幌の渡し場の橋と米沢橋の付近が川のうねりも良く、流れ炭がたまる格好の場所で、上志文の人たちも来ていたりしました。

朝暗いうちから良い場所を確保するのに朝食持参で集まり、夜はカンテラを照らしながらの川炭拾いです。約一か月のシーズン中に、二十トンも拾い上げて、自家用はもちろん、ほとんどを売炭して貴重

な収入源にしていた人もいたようです。

万字、美流渡から十数キロも流れてくるので、角の取れた楕円形の川炭は、火力こそ弱かったものの、パチパチと良く燃えました。

昭和四十年代に入つて、エネルギー資源は石炭から石油へと移りました。炭鋏の閉山が相次ぎ、また幌向川の改修で川底が浅くなったため水もよどまず、石炭の流れもなくなりました。こうして春の風物詩、川炭拾いの『アヒル炭鋏』も姿を消したのです。

## きよまつぶ にぎ 清真布の賑わい

現在の栗沢町本町の前身、清真布とはどんな街だったのでしょうか。

明治二十六年（一八九三年）に、平野部の開拓がいつせいに始まり、翌二十七年には清真布停車場が開設されました。

これによって葦原だった周辺も、停車場を中心として交通運輸の拠点となり商店街の形成が始まったのです。

明治二十九年には、亜麻の製織工場が設置され、そのころから農産物の集出荷も盛んになり、清真布を中心とした経済が目覚ましく発展します。ここで昭和十年の清真布市街地図を参考にしながら、当時を考えてみましょう。駅前十字路を中心にして商店や飲食店

がびつしり建ち並び、すでに三〇〇戸を超える大きな市街地を形成し、現在の原形を作り出しています。

地図をたよりにして、職業別のランキングを出してみましよう。

### 「商店」

食料品、雑貨店	一三軒	料理店	一〇軒
大工	九軒	菓子店	八軒
精米所	六軒		
飲食店、牛馬商、ブリキ店			各五軒
鍛冶、鉄工所、呉服店、鮮魚店			各四軒
自転車店、建具店、指物店、蹄鉄所、豆腐屋			
燃料店、売炭所、桎屋、浴場、理髪店			各三軒
医院、金物店、糸糸店、雑穀商、獣医、茶屋			
醬油屋、醸造所、種物屋、撞球場、馬具店			
時計店、洋服店、縄工場、履物店、綿打所			
本屋、仲買、古物商、旅館、薬局、薬屋			各二軒
市場、桶屋、看板屋、木賃宿、靴屋、畳店			
コンクリート製造業、材木商、土建業、			
左官、雑品屋、産婆、指圧、自動車店、			
写真屋、新聞店、石材店、染物屋、代書業			
縫物屋、塗物屋、ハイヤー、馬車屋			

電工、肉屋、花屋、澱粉工場 各一軒  
勤め人と判別できるもの」

### 「公共施設」

職員七人、保線区員六人、教員五人、郵便局員二人  
役場、議事堂、小学校、図書館、農会、郵便局、会館、  
産業組合、商業組合、消防望楼、寺院、布教所、駅、  
巡査派出所、北電散宿所、殖産銀行出張所、芝居小屋、  
一番多いのは、当然のことながら食料品、雑貨店の十三軒です。  
次が料理店の十軒。当時は、料理店と飲食店がはつきり区別されて  
いました。料理店には女給がいて金持ちの遊ぶところでした。  
これは製麻会社の影響がたぶんにあったといわれています。  
お菓子屋さんが多いですね。ほとんどが自宅を工場にして製造小売  
りをしていました。それがあたりまえの時代だったのでしょうか。  
次に多いのは大工さんです。でもこれは棟梁さんの数です。  
実際には、この何倍もの人たちが働いていたことでしょうね。続いて  
精米所の六軒です。たぶん大型の精米工場がなかったのでしょうね。  
牛馬商つまり馬喰さんが五軒もあります。馬が運搬、農耕  
の主力をつとめていた時代だったのです。これは鑑札(許可証)を持って  
いる人の数であって、実際には五人に一人くらいは馬喰をやっていたの  
ではないでしょうか。

蹄鉄所の三軒は年中多忙<sup>たぼう</sup>だったそうです。

豆腐屋さんは、豆腐と油あげとこんにやくの製造小売りでした。

枳屋さんは、工場で枳をつくり屋根ふきもやりました。当時は、お風呂のない家がたくさんあったので、浴場<sup>せんとう</sup>（銭湯）が三軒もあり、そこではお風呂場談義<sup>だんぎ</sup>を楽しむ人もたくさんいました。

二軒ものの中で撞球場が目につきますね。ビリヤード場の

ことです。今のパチンコとは違<sup>ちが</sup>い、ごく限<sup>かぎ</sup>られた恵<sup>めぐ</sup>まれた

人の娯楽<sup>ごらく</sup>ではなかったでしょう

うか。街の中心部ではなかった

ようですが、縄工場が二軒も

あります。需要<sup>じゅよう</sup>があったのです

ね。このように二軒の同業者の

多いことに気づきませんか。

ここには微妙<sup>びみょう</sup>なバランスと競争

社会が背景にあつたこと

がうかがわれます。一軒もの

の中には、聞きなれない商売

がありまね。木賃宿は言いかえれば安宿のことです。



行商人<sup>べんぎ</sup>に便宜をはかったのでしょうか。雑品屋は廃品回収業<sup>はいひんかしゆうぎょう</sup>です。自動車屋は、整備工場ではなく運送業です。

馬車屋は、馬車、馬そりの製造販売や修理屋のことですが、馬車を使つての運搬業のことにも使われました。

染物屋はもちろん工場を持つていました。古い着物をほどこき、染めかえる人がたくさんいたのです。縫物屋は、着物の仕立てや手なおしをしたそうです。塗物屋は漆塗り<sup>うるしぬ</sup>が商売です。

建具屋から回つてきた家具や仏壇<sup>ぶつだん</sup>なども塗つたそうです。どの商売を見ても心のこもった手作りの温かさが伝わってきますね。

さて、清真布とはどんな街だったのでしょうか。

当時を再現<sup>さいげん</sup>してみましよう。

ある朝、突然<sup>とつぜん</sup>大雪になりました。でも心配はいりません。

農家の人が木製のラッセルを馬に引かせて街に入ってきました。

次から次へと何台も入ってきました。

こうして街はまたたく間に生氣を取り戻<sup>もど</sup>すのです。

こんなこともありました。ある遅<sup>おそ</sup>い春のこと、供<sup>きん</sup>出<sup>しゅつ</sup>米<sup>まい</sup>をたくさん

積<sup>つ</sup>んだ馬そりが街の中で動けなくなりました。街の外はまだ雪が深い

のに、街の中では土が出ていたのです。そこで、街の人は総動員<sup>そうどういん</sup>で道路

に雪を敷きました。清真布とは、このように人々の心と心がおのずか

らふれあう優<sup>やさ</sup>しい街でした。

# 春水の記憶

春水は『ハルミズ』と読みます。文字や語感から伝わるものは、どことなくのどかです。ところが、この意味は雪解け時期に石狩川が増水して逆流水となつて幌向川を溯り、清真布川を大洪水にしてしまうことを、古老はこのように言っていたのです。

兩列島の我が国では、天恵も大きい、ひとたび気象のバランスが崩れると、目を覆いたくなるような大災害をもたらします。

特に堤防の決壊や山からの土石流はあまりにも無惨で言葉にもなりません。町史によると、栗沢町における洪水の記録は、明治三十一年から昭和五十九年までの八十四年間に、年に二回あったのを含めて三十一回も数えここでは、昭和三十年四月に発生した春水について話したいと思います。春水は田畑の作付け前なので、農業災害として記録には取り上げておりません。しかも激流にさらされるといふ緊急事態ではなかつたので、あまり語り継がれてはいません。しかし、浸水面積の広さは異常なほどで、最深部では三メートルにも達しました。当時の防災対策はないに等しく、避難命令が出るわけでもなく、炊き出しがあるわけでもなく、ただただ自己防衛ひとすじだつ

昭和30年4月上旬の平均気温と降水量

	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日
平均気温(℃)	6.6	5.3	5.7	3.1	4.7	9.5	14.6	16.9	11.6	12.4
降水量(mm)	0	0.1	4.7	7.5	0.5	2.4	0	9.1	0	8.3

たので、水上生活は惨憺たるものでした。

春水は音もなく突然やつてきます。ある家では緊急避難用の船を納屋から出すのに、屋根の庇を切り落とさなければならぬほど増水が早く、見る見るうちに茶の間に水が上がってきたと言ひ伝えられています。

畳を一枚でも助けたいので、部屋の中に積み上げました。あとは馬を堆肥場の上に引き上げるのがせいじつぱいでした。あれよあれよと思う間もなく、積み上げた畳が水にどつぷり浸かつてしまい、人間様は米と鍋を抱えて、二階や屋根裏へと避難です。

夜の明けるのを待って、架木稲を掛けて干す丸太を組み合わせて筏を作らなければ動きがとれません。うす汚い水は流れる方向を失つたようにその辺を漂うばかりです。

そのうちに滞留水独特のドブの匂いがします。こうして幾日も水浸しの生活を続けたのが当時の実情でした。浸水区域は、どこからどこまでといったはつきりしたものではな

く、東三号道路をまたぎ、清真布川沿いの南四線から南七線付近まで、さらには南十線の東六号から東八号付近までの低地帯などが湖のようになり、カモメが悠々と飛ぶありさまでした。岩見沢測候所の記録によると、昭和三十年四月六日は積雪ナシでした。参考までに同年四月上旬の平均気温と降水量を記してみます。昭和三十年四月の降水量は平年並みであつたそうです。四月の気温平均値は確認しておりませんが、四月六日以降の気温の急上昇は異常とも考えられます。この時期は積雪ゼロ日を境にして、突然気温が上昇することが起こり得ますが、遠く石狩川源流大雪山系の膨大な雪解けも確かにこれらの気象の変化に刺激されてのことでしょう。栗沢に横たわるプリヌプリ丘陵でもどんどん雪解けが進んだことでしょう。いろいろと原因はあつたでしょうが、このとき起きた春の大洪水は単なる異常気象として片付けられませんでした。上流部の乱開発こそこの惨禍の引き金になっているのです。

戦中戦後の山林の乱伐、石狩川

上流部のショートカットなどを考え

ると、治水計画が全くお粗末だつたことが浮き彫りになってきます。



記録にはありませんが、このときの春水で馬を流した人もいます。雪のかたまりの上に乗つて流れる馬を見ながら、どうすることもできませんでした。納屋にあつた籾や貯蔵野菜を全部腐らせた人もいました。長い人は一週間も建物が水浸しでしたから、その後の建物の傷みの激しさは、説明するまでもありません。他にも、もつともつといろいろな被害があつたでしょうが、少しでも書き残し、後世に伝えたいと思ひこの話をしました。



## 開拓初期のあいさま

かいたく

移住者の多くは厳冬に入植したが、一様に酷寒におののき入植地の大樹林の前に、『こんなところが開墾できるのか』と思つたという。

ヨシの繁る低湿地ではヨシを刈り倒し、火をつけて焼き、すぐ起こすことも出来たが、大部分は太陽もさえぎる大木に覆われ、幹が一メートル以上のものになると表と裏から切つて倒さねばならず、随分骨

が折れたし、危険の伴う作業であった。茂世丑での開墾時の事故の話はなく、よほどの注意が払われたと思われる。切り倒した大木は枝払いをし、幹は転がせる程度に切つて所々に集められて焼かれたが、炎が高く夜空を焦がし壯観であった。笹を刈り取り焼いてクワ入れとなつても、木の根や笹の根が網の目のように張つていて開墾は容易ではなかつた。来る日も来る日も根気良く拔根を続け、一畝二畝と開いては当座の食料として粟、稲きび、馬鈴薯等が作付けされていったのである。栗沢村に限らずこの開拓地でも当初の作付けは、まず食料の自給を第一の目的とし、耕地が整うにつれ換金(経済)作物の耕作へと手を広げたのである。初期の作物の種類としては、粟、稲きび、そば、とうもろこし、馬鈴薯、菜種に始まり次いで大豆、小豆、小麦、裸麦、亜麻などが作付けされるようになった。

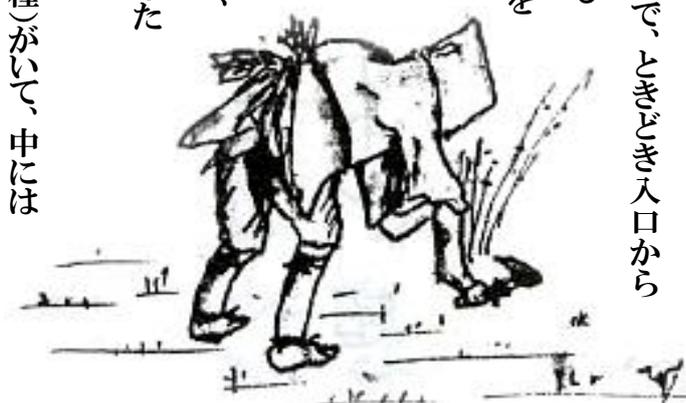
収穫量は作付期と地味のよしあしでかなり差があり、また年々の気象状況によつても違つた。原始の土地は肥えていたので、粗放な栽培法と無肥料の割りにはよく穫れたといわれ、平年作の収穫量はおよそ次のようであつた。

肥沃地 粟、稲きび 〓 四〓十俵 亜麻 〓 八百〓千二百貫  
 大豆、小麦 〓 四〓六俵 菜種、そば 〓 四〓五俵  
 麦類 〓 四〓五俵 とうもろこし 〓 八〓十五俵  
 泥炭地 粟 〓 三俵 燕麦 〓 二俵 大豆、小豆 〓 半俵

未開の原始林は野生動物の天国で、植物同様に存分に繁殖して、鶯や郭公のように疲れを慰めてくれる鳥もいたが、開墾や耕作の障害になるものも多かつた。無数の虻、やぶ蚊、ぶよなどが吸血鬼のようにまつわつてきて、作業の手でそれを追い払うのが大変であつた。朝夕や曇つた日は特にひどく、知恵を絞つた開拓者は、枝切れにボロ布を巻いたものに火をつけていぶし、それを笠や腰につけて野良に出たのであつた。折角の汗の結晶が稔りの秋を迎えるころ、また時には播きつけたばかりのころ、りすやねずみによつて荒らされる作物被害には随分泣かされた。余談になるが、たくさんいた狐や狸は害をもたらさなかつたようで、ときどき入口からぞいたり、畑の道で出会つても逃げもせず、敵意のないことを知ると、仕事をしている近くで遊んでいた。また、鹿の角が全地に、多いところでは一反歩に十数本も散在していたが、鹿の姿は一頭も見たという話はない。

これは明治十三年春の大雪と寒波で、全道の鹿がほぼ全滅に近いほど斃死したという記録でうなづけよう。

なお、マムシや青大将(縞蛇の変色種)がいて、中には



二メートルも超える大きいものにたびたび驚かされたという。

大部分の家は、間口二間、奥行三間ほどの掘つ建て小屋で、雑木の丸太を、釘を使わず荒縄で縛りつけ、屋根や囲いは葦や笹を用いたが、まれには松葉や割板か木の皮を用いたものもあった。木の皮はオヒヨウやハルニレ(赤ダモ)の樹皮を長さ一八〇センチメートル、幅六〇センチメートルにはぎ取ったものであり、割板は割りやすいタモやセンを長さ一八〇〜二四〇センチメートルに切り、それを薄く割り裂いて用いた。入口には笹を垂れ下げ、窓を設けた家ではガラスなどなく寒冷紗を張つてわずかに明かりを取った。家の中の炉は丸太で大きく三方を囲つて、あいた一方から薪を入れて暖をとり、炊事にも供したが燃えの悪いときは煙がくすぶつて、目を

開けておられないほどであった。特にハルニレはくすぶりがひどくて目を痛めた(目腐れ)ので気がついてからは嫌だったという。

また、屋根裏に煤が垂れ下がり、時には火勢にあおられ舞い上がった火の粉が煤につき、慌てて払い落とすこともあった。風呂は母屋とは別に小屋掛けをしたり、露天のままに据え風呂したりしたが、



風呂のない家が多く、近くの風呂のある家で『もらい風呂』(入浴させてもらうこと)をしていた。水に恵まれず、そのうえ多忙であったから入浴回数は少なかった。今考ええると、実に粗末な住居であったが、それ以上粗末なものがあつた。単なる拝み小屋があり、横に伸びた立木の枝に両側から丸太を立てかけて、それを草で囲つた例もあった。

いずれにしても冬の寒さと吹雪に安眠を妨げられたのは確かで、息で夜具の襟が凍り、吹雪では夜具の上に雪がたまつていたという。

ただ、薪だけは焼き払うほど木が豊富であつたから不自由はなく、唯一の救いであつた。なお、照明は石油(灯油)やナタネ油を、消費の少ないカンテラや小灯しを用い、ささやかな灯火としていたが、炉火も明かりの役目を果たしたのである。

主食は粟、稲きび、稗、とうもろこし、そば、馬鈴薯、裸麦、豆類で、米は盆、正月、神社の祭りのとき以外はめつたに食べず、病人の粥がせいぜいであつた。従つて、一年で米を一俵も消費する家は裕福な家で、普通は一、二升であつた。副食は大根のほか野菜がよく穫れたし、野生のウバユリ、ミツバ、セリ、フキ、ワラビなどが豊富であり、川魚や川エビもたくさんいたので不自由しなかつたが、ほかに煮干しや身欠き鯿の買いだめをする者もいた。しかし海産鮮魚や肉類は思いもよらぬことであつたし、調味料にもかなり不自由したようであつて、買うにも岩見沢あたりまで出かけなければならず、塩以外は無しです

「ごすこともあったという。悩み深かったのが飲料水で、川や排水溝の水、または井戸水を用いていたが、井戸といつても枠のない浅いもので、しかも大方の家では、これらの水を濾さずに使っていた。」

衣類や寝具は、すべて郷里から持参した木綿の質素なもので、着物はおおむね筒袖か袖無しで、股引またはもんぺに手製の足袋を履いていた。外出したり仕事に出る時は、脚絆、三角首巻、草鞋を用い、冬にはてつかえし(大手袋)で手を暖め、足にはつまこや藁深靴を履いていたが、それらはいずれも手製のものであった。また、雨の日や冬の外出用として毛布が用いられていた。とにかく、現在のようなゴム、ビニール製のものがなかったうえ、悪路であったから、雨が降れば濡れ、足は泥だらけになり、冬になれば着物の裾も股引も、つまこまでも凍るありさまで、特にかわいそうなのは遠路通学児童であった。なお、当時は水に恵まれぬため洗濯も不十分で、そのうえ着替え衣料も少なかったたので、蚤や虱が多かったのはやむを得ないことであった。

話は変わるが、当時の男の頭髪はおおむね斬切りで、男の子は丸坊主(剃刀や鋏)であり、バリカンが使われるようになったのは、明治三十五年頃からのことであつたと伝えられている。また、女の場合には長く伸ばして束ねたり、まるめて結んだりが一般的であり、整髪には梳櫛を用いていた。

## ドッコイシヨ

母ちゃんは畑で『メッコ鳥に石な、かつけるようにして』豆まきをしていました。わかりやすく言えば、『目の見えない鳥に石ころをぶつけるように』の意味で、無我夢中で働く様子を昔の人はよくこのように言っていたそうです。

母ちゃんは、あと二畝で豆まきが終わるところ、どう考えてもあと一畝分の種豆が足りないようなので、娘のイトに、隣りに行つて種豆を一合借りてくるようにたのみました。

「おーい、イトやー、イトやー、おらんかい」、妹の子守をしていたイトは、母ちゃんが呼んでいるので畑に行きました。

「イトや、お隣りに行つて種豆を借りてきておくれ。チュウナガという種豆だよ。隣りのおばあちゃんに言えばわかるからね」

「母ちゃん分かった。チュウナガだね」

イトは忘れずに、「チュウナガ、チュウナガ……」と、声に出してくり返しながら隣りに種豆を借りに行きました。

「チュウナガ、チュウナガ……」と、一生懸命声を出して歩いて行くと、小さな排水溝があつたので、イトはその排水溝を「ドッコイシヨ」と

勢いをつけて飛びました。

そして、「ドッコイシヨ、ドッコイシヨ、ドッコイシヨ……」と言いなながら隣りの家に着きました。

「おばあちゃん、ドッコイシヨの豆ちようだい」

「ドッコイシヨの豆？」隣りのおばあちゃんは首をかしげて、

「イトちゃん、なんていう豆だとお母さん言ったの？」

「違うの……？ まちがえたかな……、えーと……、そうだ、ナガナガ  
なんとかつて言ってたよ」

「イトちゃん、そうか、きつとナガウズラだよ」

結局イトちゃんは、ナガウズラの種豆をもらって帰ってきました。

その豆を見た母ちゃんはびっくり。

「イト、どうしてチュウナガがナガウズラになっちゃったの？」

「おばあちゃんのところに着いたとき、ドッコイシヨになっちゃったの」

母ちゃんは叱るより可笑しくて吹き出してしまいました。きつと、『ドッコイシヨの豆』といわれた隣りのおばあちゃんの方が、もつと驚いたかも知れませんね。



## 嫁どり

昔ばなしの中には慣習、因習的な話も多くあります。その地方の慣習を代表するものに結婚式があります。昭和三十年頃ま

での農家の『嫁どり』の話です。当時嫁どりは

三日がかりで両家で行われました。

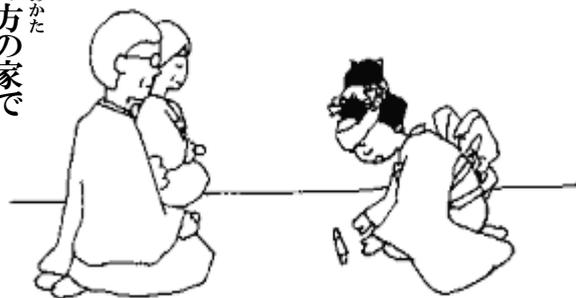
一日目は、『出立ち』といって仕立て見舞い

(今のお祝い)をもらった人たちを招待して嫁方の家で

盛大な祝いの宴が行われました。二日目は、花嫁を迎えに来た人たちに対して、花嫁側が歓待の膳を出します。時にはお酒もあり、あれやこれやで花嫁の発時刻が大幅に遅れることもありました。

このあと夏なら馬車で冬なら馬籠が列を連ねての嫁入り道中です。

一台目に仲人、二台目に花嫁、三台目以降には親族や嫁入り道具が進みます。婿さんの家に着くと、まず玄関先で『縁水』といって花嫁が持参した盃に婿家の井戸水を注いで飲み干し、その盃を玄関上がりの石の角にぶつけて割ります。これは『実家と縁を切る』という婿家に対する挨拶の儀式なのです。



このあと嫁入り道具を入れ、それが終わると初めて花嫁さんが中に入り、客人が続いて最後に花嫁の親が入ります。

家に入った花嫁さんは、姑しゅうとに手を引かれて

仏壇の前進み、合掌がつしやう、礼拝れいはいをして二人の部屋

に入り、仲人立会なこうどいで三々九度の盃さんさんくどを交わし

結婚式が終了します。それから披露宴ひろうえんです。

始まりも遅おそくなり、二の膳ふたのぜんが出される頃は

夜中になることもあります。

三日目は嫁どりのためいろいろお世話になった手伝いの人たちや裏方うらかたで支えてくれた人たちを改めて招待して膳ぜんを振舞うのでした。

三日間の行事が終わっても、そのあとは花嫁の里から奇数日ごとに

重ね餅もちが贈おくられたり、花婿よめにお呼びがかかったりして、一連の行事が

終わるまでにはかなりの日数を要したものです。



まうことが度々たびたびありました。

ここは幌向川の支流清真布川の流域りゅういき

ですが、本流の石狩川が増水ぞうすいすると、

逆流ぎゃくりゅうしてくる泥水どろみずが長期にわたり

停滞ていたいし、大きな災害さいがいを繰り返してき

たところでもあります。

栗沢のことを語るには、もう一方の

夕張川のこともお話しなければなり

ません。旧夕張川は、極端きょくたんに蛇行だこう

ひどく、その氾濫はんらんは南空知の脅威きょうゐ

ともなっています。これらの水害を

防ぐため、千歳川に合流していた

水路をほぼ直線にして、石狩川に直接放流する新水路工事が大正九

年（一九二〇年）に始まったのです。もともと泥炭質でいたんしつの地盤じばんのため、難

工事となり、さらに工事中も数回に及ぶ洪水およ、昭和初期の経済不況けいぎふきょう、

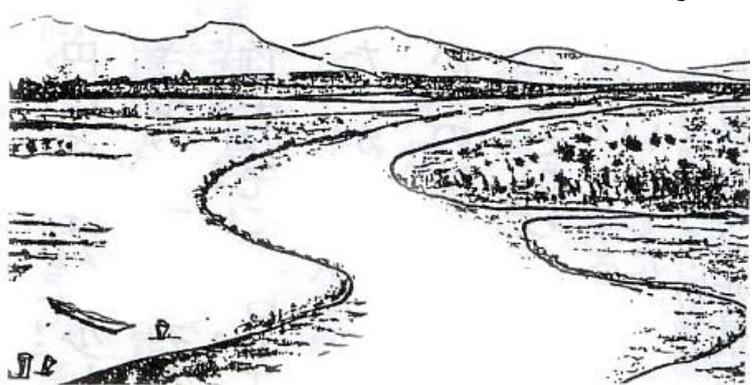
満州事変まんしゅうじへんなどの影響えいきやうを受け、全工事の完成は、着工から十六年後

の昭和十一年秋になっていました。

これに先だつ昭和十年秋に、栗沢町と幌向村（現・南幌町）を結ぶ、

全長五四〇メートルの清幌橋きよぼろばしができたのです。

小学校一年生の私の目には、清幌橋渡り初めわたの印象いんしょうが、強烈きやうれつに焼



## 夕張川と私の少年期

ゆうばりがわ

わたしのふるさと栗沢は、石狩平野の南東部に位置し、平野部は

夕張川と幌向川に挟まれた肥沃な穀倉地帯こくそうちたいです。恵まれたこの地も、

春先の雪解け水ゆきどや台風時みずなど集中豪雨しゅうちゅうこううに襲おそわれると豹変ひょうへんしてし

きついています。それは本家の祖父、伯父夫婦、従兄夫婦の親子三代が選ばれたからでした。やや興奮していた私は、お祝いのまんじゅうを大事に抱え、家まで駆けて帰ったけれど、それをどのようにして食べたのか思い出せません。私の生家の近くには、清真布川の枝川ともなる川幅三メートルほどの排水溝がありました。

この川で釣りをしたり、泳いだりして遊んだ楽しい思い出もありましたが、新夕張川の影響もあつたのか前述の春先の洪水や台風などの水害にはよく泣かされました。

小学校三、四年生の頃でした。普段の水面は二メートルも下なのに、大雨になるとたちまち道路まで冠水してしまいます。ときには納屋の土間まで浸水することがあるのです。私は父にいわれてびしょ濡れになりながら、納屋の周りを囲む土嚢積みの手伝いをしました。

土嚢は、カマス(わらで編んだ袋)に砂利や砂を詰め込んだもので、小さい私にとって、それを運ぶのは大変な仕事でした。

また、台風の強い風で、茅ぶきの屋根がところどころむしられて、飛ばされそうになります。そんなとき、私自身も飛ばされないように屋根にしがみつきのながら、ロープかけの手伝いをしたものです。

だんだん戦争が烈しくなるにつれ、鉄材が不足し、鉄くずが意外と高値で買い上げられるようになってきました。私たちが、いつも鉄くず拾いの六場(あなば)にしていたのが夕張川の河川敷(かせんじき)でした。ここには、夕張川

の掘削に使われたトロツコのレールが残っていました。工事終了後に撤収(てつしゅう)するはずだったが、撤去前の洪水で土砂に埋まってしまったのです。その後、今度は逆に数度の大冠水でレールが所々土砂から顔を出していました。レールの継ぎ目の長方形の鉄材やボルトを、雑品屋(ざつぺんや)が高く買ってくれるので、よく友だちを誘って自転車で出かけたものです。継ぎ目の鉄材は錆びついていて外すのにも苦労しました。石で少したいてからペンチを使って外すのですが、時間がかかります。たまに、自然に外れたものを見つけたときは、叫び声をあげたいくらいに嬉しかったものです。

あるとき、約六貫目(約二十二キログラム)の鉄材を拾って麻袋に入れ、堤防の上で自転車の荷台に縛りつけようとしました。

このとき誤って左足の甲に落とし、思いつきり親指を潰してしまいました。その痛さといったら、まさに『目から火が出る』、そのものでした。友だちに助けられ、血止めに効くというオオバコの葉を揉んで親指に巻きつけてもらい、持っていた手ぬぐいで縛って、なんとか家に帰ることができました。潰した親指の爪は青黒く内出血をおこし、徐々に浮き上がり、下から新しい爪が二重になって伸びてきました。

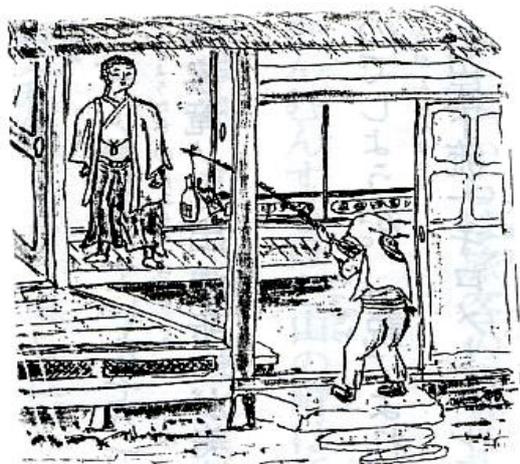
爪が元の状態に戻るまで半年ほどかかったと思いますが、新しく出てきた爪は今でも光沢がなく、シワシワに変形したままなのです。

# 樽ころがし

昔から農村では結婚式と青年会とは特に深い関係がありました。

花嫁さんが来ると、近くの子どもたちやお年寄りも、花嫁さんを一目見ようと婿さんの家の周辺に集まり、窓という窓に群がって中をのぞくのです。それを整理するために、提灯を手に歓迎と警護をするのも青年会員でした。また、花嫁さんが嫁いで来るのは、大半が冬の農閑期で、迎えの馬橋を担当するのも青年会員でした。

雪道はとても不安定で、おまけに花嫁さんの馬橋には幌がかけられているので重心が高くなっています。それをよいことに、馬の手綱さばきを誤ったふりをして、わざとひっくり返すこともあったとか。面白半分に歓迎の挨拶代わりといったところでしょうか。慶事にあやかり祝い酒をせしめる悪遊びもありました。膳のお酒では足りない青年たち



は、ワルの代表にされた一人が深い頬被りをし、裏返した印半纏を頭からすっぽりかぶって顔を隠し、「本日はおめでとうございませう」と言つてあらかじめ用意した空の一升瓶を奥に転がします。一升瓶には今の五円か十円ほどのほん

の少しのお金を入れた、『のし袋』が貼つてあります。婿さんの家では、その空瓶に四、五合の酒を入れて返してやるのです。瓶を転がさずに竹竿の先にぶら下げて差し出すこともあったとか。転がすのは瓶ですが、昔から酒は樽入りだったことから、その悪遊びを『樽転がし』と言っていました。自由奔放な時代背景が想像されます。



## 美流渡小咄

美流渡地区の昔は『滝ノ上』といわれていたそうです。そういえば『岩見沢農協滝の上出張所』が美流渡市街にあります。

では、なぜ『滝ノ上』なのでしょう。一説によれば、岩見沢市朝日町から幌向川右岸下流一キロメートルほどに『朝日不動明王堂』が

あつて、すぐ手前の小さな支流に落差数メートルほどの滝があり、これから上流を、『滝の上』と言ったそうです。

美流渡地区には、明治二十八年『坂東農場』と『群馬農場』によって開拓されています。同地区では奈良炭鉱の開鉱が大正五年とされ、万字炭鉱は明治三十八年、上美流渡地区の農林業の開拓は大正元年、炭鉱の開鉱は大正六年ころと推定されます。

ここで美流渡と上美流渡間（二・八キロメートル）の鉄道の歴史について触れてみます。この区間の石炭輸送の馬車鉄道は、大正七年から始められ、同九年には新たに美流渡専用鉄道が敷設され運行しています。同十年十一月からは、国鉄の運輸管理下方字線の支線的な位置づけで、石炭輸送を重点とした貨物線として運行していましたが、昭和二十一年からは

旅客の取り扱いが始まりました。

最盛期は旅客車が一日十往復するなど、人いきれでむんむんするほど山の町は活気に溢れていました。

人々からは、『豆汽車、豆汽車』と呼ばれ、すごく親しまれていました。

その後、昭和三十三年八月以降は再び美流渡専用線（私鉄）となり



豆汽車

ましたが、石炭産業の衰退とともに同四十三年十二月を以って運行休止となりました。ちなみに万字線は同六十年三月に廃止となりました。私が生まれたのは大正五年で、ものごころついた頃は美流渡に住んでいました。父は山が大好きな人で、造林造材や炭焼きの仕事をしていました。ですから、一旦山に入ると何日も帰ってきませんでした。あるとき父について山に行つたことがあります。そこには掘り立て小屋があり、屋根は笹で葺かれ、周りも笹で囲われていたので、大變びっくりしたことを覚えています。母は苗圃へ苗木を育てる仕事に行っていました。ある日、父母と兄と私の

四人で山へ植林に行くことになり、

みんなで苗木を背負って行きま

した。苗木を縛つた二把（二把）

は、小学校五、六年の私の目

は大變大きなものに見えました。

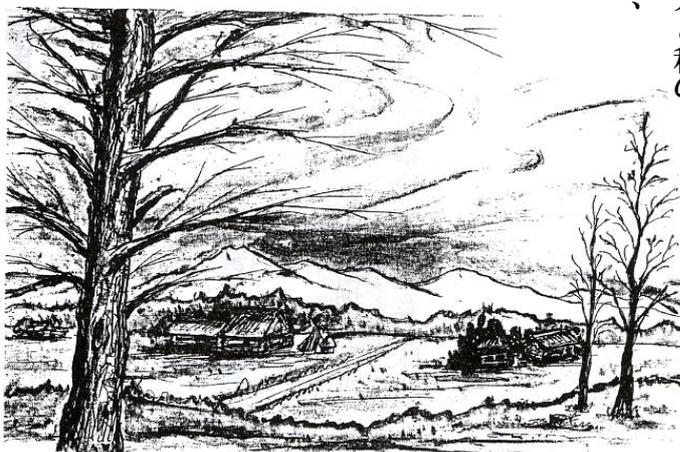
これを二つも背負わされて山道を登って行つたのです。

それがカラマツだったのかトド

マツだったのか分かりませんが、

あの重かったことは今でも忘れ

ません。でも、父母や兄はもつ



ともつとたくさん背負ったことでしょう。現場についてから、私は苗木を一本ずつにわけて父に渡すと、父は黙々と植えていました。

あのとぎ植えた苗木はどうなったことでしょう。

もしもそのまま生長していたら、相当な大木になっているのかなと思うと、心が晴れやかになってきます。

私は毛陽小学校に通学していました。美流渡小学校の方が近いのに、どうしても岩見沢地区の毛陽に行つたのか分かりません。

美流渡は幌向川を挟んで右岸は奈良町(岩見沢市)となっていますが、地下の炭鉱はつながっていました。地上でも両地区は美流渡の経済圏として一体化していたように思います。

あるいは万字炭鉱に通じる道路の状態の方が良く、奈良町や毛陽町の人たちと古くから交流もあり、親が毛陽小学校に入れたのかもかもしれません。小学校五年生くらいだったと思いますが、ある朝のこと、登校途中に突然白い灰が降ってきたのには驚きました。

髪の毛や肩に灰が積もったのです。私たちは一所懸命に頭や肩を払いました。誰かが「樽前山が爆発したんだ」と言いました。

その後父は炭鉱に入ったので、家の生活も安定してきました。

でも今考えると、貧しかった時代のごとくても懐かしく、苦労だったとは少しも思っていない。

## 万字の地名の由来

ゆらい

明治三十六年、朝吹英二氏よりこの地域の鉱区権を買い取った北炭(北海道炭鉱汽船株式会社)が調査した結果、良質な炭層が発見された。明治三十八年、開発のため地名の必要が生じたことから北炭重役会は、元鉱区の所有者であった朝吹家の家紋が『卍』であったことから、万字坑と命名された。

後にこの一帯は万字炭山と称されることになったのである。



◎ 相生沢 あいおいざわ

炭層調査の一行が夕張を出発し、二手に分かれ調査中に出合った場所を相生沢と名づけた。葵坑開坑当時は炭鉱住宅が建っていて、夕張越えの起点となっていた。場所はもとの万字温泉に向かって、左の沢で、夕張よりに位置する。葵坑は昭和八年に閉坑した。

◎ 二見沢 ふたみざわ

万字温泉のあったところで、前記調査隊が相生沢より別れ、再び会った場所から二見沢と名づけた。相生沢、二見沢は万字発祥の地ともいわれ、往年は二見沢尋常小学校が設置され、住宅が山の上まで建ち並んでいた。

◎ 寿町 こといふき

開坑時に、万字小学校付近に坑夫の棟割長屋が建てられたのが始まりで、人口が増え、ポンネベツ川の深い沢向かいにも長屋が建てられた。時の炭鉱長日野律郎が、古長屋と呼ばれていたのを寿部落と命名した。

◎ 英町 はなふさ

新長屋といわれていた新住宅地を、前記、日野律郎が英部落と命名した。

◎ 睦町 むつみ

昭和十五年頃、坂田主任により、いつまでも仲睦まじく暮す地域で

あるようにと命名された。

◎ 巴町 とまえ

昭和二十三年、炭住建設のため松井岩吉所有の農地一町歩を買収し、道有林三町歩をもって六十四戸の炭住を建設した。地区名を一般公募した結果巴地区と決定、二十四年に新設した。

◎ 錦町 にしき

万字小学校と炭鉱クラブ間に深い沢があり、ここにかかっていた木橋の名称が錦橋であったことから山神社一帯を錦町とした。ここには職員住宅が建ち並んでいた。

◎ 旭町 あさひ

太陽の昇る方向にある高台ということで旭台とされ、職員住宅地であった。

◎ 三楽園グラウンド さんらくえん

昭和初期の不況時に、坑内より搬出されたズリで小学校の裏沢を埋め立て、グラウンドを造成したときに(昭和七年完成)、炭鉱長古谷金一郎が、孟子の孟尽心、『第一の楽しみは父母の生存と兄弟に事故のないこと、第二の楽しみは天に恥じず人にやましくない清澄な



心境であり、第三の楽しみは英才の教育である』という、三楽をとって三樂園と名づけた。

### ◎ 万字市街地

万字炭鉱が開発され人口が増えると、生活用品や食料品を扱う商店が必要となった。商店は炭鉱住宅地に置かず、明治四十三年から沢向かいに市街地を形成し、魚屋、呉服屋、料飲店、料亭、旅館、風呂屋、劇場、寺院などが建てられた。

この地区は昭和三十一年くらいまで万字市街地で通用していたが、栗沢町の字名及び地番改正によつて、万字新市街地を曙町、万字市街地を仲町、幸町とした。

万字の地名で忘れてならない所がある。開発の頃は『学校の沢』といわれ、父母が私費を出し合い、山崎玄左右氏に依頼して私宅で教育を始めた地であり、万字小学校発祥の地でもある場所だ。

現在の万字炭山森林公園の管理棟より上流地で、今は狭い地所になっているが、開発時は滝が三段になった溪流があり、片側は断崖で風光明媚な所だった。当時は住宅が立ち並んでいて、集金に歩いていて断崖より転落して大怪我をした商人が、「地獄のような所だ」と言つたのが起源で、後年は地獄の沢で通っていた。

## 万字炭山

### 百年の基礎を築いた人々

万字地域は明治三十六年一月、北海道炭鉱汽船株式会社が万字地域の鉱区の所有者、朝吹英二より鉱区の譲渡を受けた時より歴史が始まる。本章では先人の足跡をたどりながら、万字炭山の歴史を紹介したい。

### ◎ 朝吹英二

寛永二年、豊前国(今の大分県)宮園村で、庄屋の二男として生まれた。慶應義塾で福沢諭吉の下に学び、後に三菱、鐘紡、王子製紙、三井系各社の重役を歴任した福沢門下の英才であり、大隈重信の懐刀として財閥形成期に活躍した明治の人物である。伝記には、万字鉱区の入手のいきさつは記されておらず、人跡未踏の地であった鉱区がどのように設定されたかも明らかではないが、北炭に売つて料亭で友人たちに大盤振舞をしたとある。大正七年に没している。

### ◎ 地質調査隊

主査の加藤勘吉、係員の宮前周造、平岡金次郎ほか、人夫十数名の一行は、明治三十六年五月より二年間にわたつて、炭層調査地形測

量を行った。第一班は福寿坑口付近に本抛地を置き、第二、第三班は二見沢川岸、第四班は相生沢、葵坑付近にそれぞれ本抛地を置いた。人跡未踏の原始林で住居はテント張り、食料などはすべて夕張第一鉱の倉庫係が背丈以上の熊笹をかき分け、定期的に供給していた。熊の襲来、やぶ蚊に悩まされながら、二年間に及ぶ調査は詳細を極めたという。

### ◎ 開坑準備

明治三十八年八月、建築係員の太田福太郎、札幌支店倉庫係員の田中幾助ほか直轄人夫十四名がこの任務に当たった。まず田中らは福寿坑付近に笹ぶき小屋一棟を建てて居住し、開坑に必要な建物や施設の建設を開始した。

万字の草分け中の草分けといわれる西原文治は、開坑準備のため、当時働いていた幌内炭山の請負師、関寛太郎の幹部として造材土建を請負い、活躍していたが、万字開坑のため関から独立し、柚夫やとび職人など二十数名を引き連れて、明治三十八年八月、地獄の沢、西原の沢に掘立小屋式の飯場を構え、開坑準備を殆ど一手に引き受けた。道路の開削から家屋の建設、万字々夕張間の高架索道の設備工事等に携わり、また私設の教育所が有志によってできるや、その家屋や学具を寄贈するなど教育面での功績も大きかった。

さらには二見沢、相生沢方面を調査の際、川を真っ白に染めて

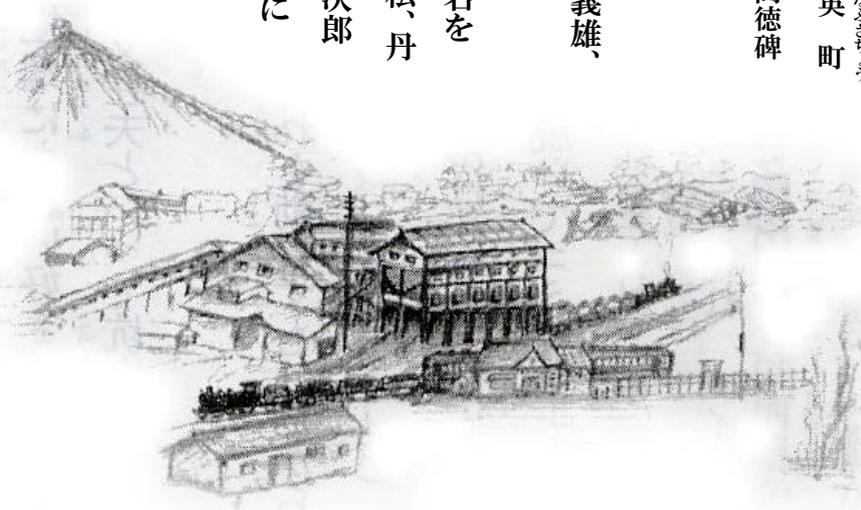
噴出している冷泉を発見、二階建ての温泉施設を経営した。

西原温泉と名づけられたこの温泉は、療治やいいの場として大正末期まで営業を続けていた。こうした功績を讃え、有志の手により『西原翁開村高德碑』が万字山神社の境内に建立された。

《注》 平成十六年、社殿を英町に移転。それに伴い高德碑も移設した。

### ◎ 開坑当初

万字派出所主任技師の佐藤義雄、係員の田元善松、太田福太郎、若林某、斎藤誠太郎ほか数名を中心に、内村久太郎、青山春松、丹野徳治、小沢久五郎、石井与次郎など坑夫二十四名で本坑開坑に当たり、明治三十八年十一月には早くも本坑から夕張炭と同質の優良炭が産出された。



◎ 炭住で活躍した人々  
炭鉱従事者以外でも、万字の発展に尽力した人々がいる。

診療所医師の吉田甫は、開坑の翌年からこの原始林の山奥で、

電気もなく医療品や器具も不足しがちな中、五年間に亘り住民を疾病から守ってくれた。彼の功績を忘れてはならない。山崎玄左右は万字小学校教育の創始者ともいべき人で、明治三十八年十一月、私宅で教育所を開設した。伊藤徳四郎と広本金次郎は、万字に定住した請負師である。彼らとともに開拓に従事し、筆舌に尽くせない辛酸をなめた人々は数多いが、個々の名は資料に残っていない。

### ◎ 信仰の灯火

明治三十八年、北炭が万字開発に着手してから約一か月を経た頃、曹洞宗の布教のため万字に訪れていた僧侶、安彦真孝を佐藤技師が知るところとなった。佐藤は安彦にぜひ留まってくれと願ひ、交通の便や水の便の悪い未開の地で頑張っている人たちの心の支えになってくれるよう懇請してその錫を留めさせたという。こうして安彦は孝禅寺初代住職となった。住職は万字炭山駅前説教所とは名ばかりの粗末な堂宇を建て、未開の大地に挑んだ人々の荒んだ気持ちを和らげたのみならず、土着心の養成にも功績を残した。

### ◎ 市街地の形成

初代高崎商店主の高崎久米蔵は、まだ交通手段のない時代、住居のある幌内から、荷物を背に美流渡石油沢を経て万字まで往来し、飯場や長屋を廻って生活用品を販売していた。万字の人々は、彼が行商してくる日を待ち焦がれるほどだったという。

高崎は明治四十二年春に西原の沢に店舗を構えたが、ちょうど炭鉱の肝いりで、商店を万字市街に移転しての市街地造成途上にあつたため、高崎商店も翌年市街地に店舗を移転し、万字市街地発展の中心となって活躍した。開坑当時よりの営業努力が実り、万字線では屈指の呉服商に成長し、ついには蔵屋敷を建てるまでとなった。

また学校関係では、現在のPTAともいべき教育会の会長を長く務め、大正から昭和にかけて万字小学校を側面から支えた最大の功労者でもあつた。子どもたちにも慕われていて、『かくれんぼ遊び』をするときは、『タカサキのハゲアタマ』と十回数えるのが万字独特のルールだったとか。いかに小学校の名物男であつたか、その人柄が窺がえるエピソードである。高崎のほかにも明治四十二年以降商店街が形成されていった。これは炭住用地が狭く限られていることや、労務管理が徹底しづらいことなどから、炭住街と商店街を切り離すため、当時道有林だった市街地区を炭砒用地として払い下げを受け、商店街形成を積極的に行つた結果である。初年度、長屋の一角を借りて店舗を開いていたのが滝沢直次、内村某、宮本某。三十八年に佐藤技師とともに開坑に従事した抗夫の須山清三も移り住んだ。

翌四十三年には前記西原の高崎呉服店、夕張、幌内、岩見沢の各地から田村、金津、太田呉服店、長栄堂菓子店、村田餅屋、石川、水原両瀬戸物店、諸橋味噌屋、天野、大高、佐藤料理店。

四十四、五年には、溝口鮮魚店、門馬旅館、鈴木理髮店、万字座（芝居小屋）、佐藤写真館等が開店している。鉄道が開通すると、市街が万字の中心街となり、十数軒の料理屋、酒場が軒を連ね、夜遅くまで賑わっていた。

### ◎ 万字に名を残した坑夫たち

坑内作業をする時、明治、大正時代はカンテラ、昭和に入ってから各自が腰に電池を携帯し、頭にキャップランプで照明を取っていた。だが、暗い中での作業だけに一つ間違えば大事故につながる危険があった。それだけに坑夫同志の連帯感強く、仲間内での会話もユーモアに富んでいた。そんな坑夫たちがつけたあだなを二つ三つ紹介しましょう。

### ※ 熊の喰い残し

開坑当時は、相生沢で長屋生活が始まったが、何分山の中、若い者は一日の仕事が終わると夕張の飲み屋に馳せつけ、その日のうちに帰ってきたそう。ある夜、一人の坑夫が夕張からの帰り、熊に襲われて肩の肉をむしりとられた。

彼はそれ以来“熊の喰い残し”の異名を取ったという。

### ※ オイラン坑夫

花魁 || 江戸吉原の遊郭で姉女郎の称（広辞苑）注釈を加えなければ理解できない言葉となった感のある“オイラン”だが、ここでいう

オイラン坑夫は極端にきれい好きで、病的だと感ずるほどの人。

仮にAさんとしておこう。Aさんは、支柱夫といって坑内の坑道を支えている留枠を修理して坑道を維持するのが仕事だった。

この留枠には炭塵や石の粉などがびっしり付着している。それを動かすものだから粉塵がもうもうと立ち込め、顔や作業服が真っ黒になる。ほとんどの坑夫たちは真っ黒な顔で出坑してくるのだが、Aさんは仕事の最中でも先山の眼をかすめては、パタパタと服をたたいたり果ては上着を脱いでゴミを落とし、ポケットからクシを出して髪の毛をなでつける。暇さえあればこれをやるものだから、仲間から、「あいつはきれい好きを通りこしてオイランのようだ」と言われ、オイラン坑夫で通ってしまった。

### ※ 扇風機野郎

炭鉱の扇風機は坑内の隅々に空気を送っているから、一日も休むことはできない。炭鉱でまじめな人は、「あの人は扇風機のような人だ」と言われる。Gさんはそれにあてはまる人で、日曜日でも出勤して窓口に仕事をくださいと動かない。坑内には日曜日でなければ出来ない仕事が必要があるので、日曜出勤者は何組もある。会社は予定された出勤者がいるので、何回かは断っていたものの、それが毎日曜だから会社もついに折れて日曜出勤に入れてしまった。今では考えられないことだが本当の話である。

# 砺波の夜明け

## (1) 砺波団体の創立

明治維新後多くの人々は、人口の増加に加えて農地の狭い府県から、広大な北海道に強い関心を持ちはじめたが、特に次のような情報が公然と巷に流れていたからであろう。

- 1 土地は無償で与えられる。
- 2 土地は肥沃で無肥料で耕作できる。
- 3 税金は免除される。
- 4 酒は安く手に入る。
- 5 徴兵は免除になる。

富山県砺波地方の人たちも、北海道へ渡り一旗揚げようと、明治二十年前後から札幌近郊へ仮移住し、未開地貸下の機会を待っていた。本田幸彦は篠路村レップに僅かな土地を求め、土地貸下情報を集めていたが、明治二十六年(一八九三年)一月、白石村に寓居する縁戚の本田久三郎を通して、同村の新潟県人、笠原治郎が夕張郡長沼村字馬追に、水田有望の貸下地ありの情報を得ていることを知った。本田は早速笠原を訪ね、団体に願い出ることが有利なことが

分かり、笠原を団体長として本田を副団体長に、笠原は白石村近辺の旧仙台藩士族らを、本田は札幌近郊の富山県人らを中心に、それぞれ団体の募集を始めた。

長沼村の情報は準備不足で間に合わなかったが、将来的に水田可能であることを念頭に、本田は道庁の石段が磨り減るほど殖民課に通い、貸下地の情報収集に全力を尽くした。これほどまでに運動を展開した理由として、貸下地の願書受付がいつ何処で行われるのか、地勢や交通事情はどうなのか、そのほか土地貸下出願に関わるさまざまな制約が不明であった。その辺の事情に精通していなければせっかく団体を募集しても、名分が立たないと本田は考えた。

国策として定住移民を奨励していた時代だが、当時は他人の戸籍謄本を借り集め、仮貸下が受理されると、未開拓のまま直ぐに転売し、売買益を稼ぐ山師が後を絶たなかった。いわゆる「土地転がし」である。古文書などから考察すると、仮貸下地が未開墾のものから開墾途中までのものなど、条件の差はあったが一戸分五町歩が、三十円前後の相場で動いたらしい。本田としても最初のうちは永住を考えず、自作農に成功し小金を貯め、出来得ることなら農場主になつて、故郷に錦を飾ることが夢だった。だから奥地ではない札幌に近くて、比較的交通の便がよい所を第一に考えていた。こうして水田有望地の情報を元に、笠原は幌向村バンケソーを、本田は岩見沢村キヨマップ

を下見していた。キヨマップへの道筋は、その先に本田がある人との運命的な出逢いがあったことが、貸下地選定に大きな影響を与えたのである。岩見沢に降り立った本田は停車場通りで情報収集のため、たまたま立ち寄った丸茶紙店で、旧店主の石川県人、吉川五郎と出逢ったのである。吉川は、空知集治監(市来知)元監視で、夕張道路開削の際、キヨマップ付近の地勢にかなり精通していた。本田の豊かな開拓者精神に惚れた吉川は、知人ら数名と一緒に砺波団体に加入した。このような経過があったあと、笠原、本田組のもとに幌向原野貸下地願書受付のため、殖民課の係官が出張する旨が伝えられた。

明治二十四年施行された殖民地区画法によると、石狩原野の大部分は直角法によつて方九百間の大画を作り、これを九等分して方三〇〇間の中画とし、さらに間口百間奥行百五十間の一万五千坪に六等分して一戸分(小画)とした。

明治二十六年五月一日、二番列車で本田組五十七名は幌向駅で下車、幌向川堤防内の殖民課出張所(松山為造方まで二十余丁を歩き願書を提出し、その夜はおそくなり野宿した。笠原組は一日遅れて五月二日、七十余名が出頭した。午後二時三十分前日の出願者と合わせて百二十余名は、双方の人数に比較して願書を増やし、百四十二通の願書を提出した。殖民地割渡官の上田載憲は、本田組代表の本田幸彦の団体員をまとめる誠実な人柄を信頼し、一枚の切

図面に依つて幌向川と清真布川間の方九百間の大画二つ分を指定し、その内の百五十戸分を一括して割り渡し、個々の割り当てを本田に一任した。

しかし、提出願書百四十二通に対し百五十戸分では、各自に該当する地所はかなりの数が不足し、笠原組と本田組の間で大きな紛議となつた。

ここで本田は笠原組に対し、「我々全員が富山県砺波郡出身で、全員が門徒(浄土真宗)で、固い団結のもと貸下地が決まるまで、幾晩でも野宿する覚悟で来ていること」を誠心誠意説得した結果、その場合は笠原組が折れて、本田組がキヨマップの地所を確保するに至つた。翌五月三日正午

に本田組は抽選をして、九十三戸分を割り当てた。こうして、現在の岩見沢市栗沢町砺波集落の基礎が成立した。笠原組はキヨマップを諦め幌向村(バンケソー)(現在の南幌町晩翠地区と推定される)の貸下を受け現地に入ったが、本田組が確保したキヨマップとは土地条件に雲泥の開きがあることが判明した。キヨマップは地味肥沃で交通の便



も比較的よく、バンケソーは、千歳川の氾濫による水害の常襲地であることが立木の状況により実証され、泥炭湿地であった。結果として笠原組の不満は頂点に達し、双方共同の団体なのに不公平が甚だしく納得がいかないと本田に激しく詰め寄った。白石村在住の元仙台藩士族で、白石村元老の黒沢成教ら数名が、本田幸彦を札幌のある飲食店に呼び出し、隔離監禁して直談判となった。

つまり、「双方の貸下地を混同して抽選やり直しをすべし」とい強硬な申し入れであった。そのむかし、人の一人や二人殺めたかもしれない強面の連中であり、この申し入れを拒否するようなら、本田の命の保障はないと殺気立っていた。時に本田は若干三十一歳。渡道前にある政党に入党し、政治運動に関わったこともあり、弁も立ち肝つ玉も据わっていた。「あなた方の選定された土地はあまりにも不運でした。しかし、我々の多くは小作人や寄留者です。あなた方は白石村に自作地を持っておられる。この地白石村開拓の先駆者となって村の発展に尽力して下さい。北海道はこれからです。きつと良い条件の土地が見つかると思います」

本田の涙ながらの熱い説得に、笠原組の剛の者たちも夜半になつてからようやく軟化し、団体を二分してそれぞれの道を選ぶことになった。歴史を塗り替えるような紛議が全面解決に至り、このとき名実共に本田幸彦が団体長となり砺波団体が発足したのである。

## (2) 本田兄弟の確執

東九号道路(道道中幌向、栗沢線の南七線及び南十線十字路脇に、札幌軟石の道路標柱がある。

豪雪時の除雪や自動車の衝突などで

何度倒され、その原型を留めないが、

『従是、砺波団体、東西千八百間南北九百間』と彫られている。

この道路標柱は、明治二十六年五月一日、百八戸の砺波団体移住成功集落の証である。殖民地割渡官の上田載憲が、本田幸彦に指示した『切図面』は、道路標柱と同じで、東西は東六番地通りから東十二番地通りまで、南北は南七線通りから南十線通りまでの範囲である。但し、同年五月二日の記録によると、実際に割渡しを受けたのは、大画二つの百八戸分の中の百五戸分であり、さらに抽選をして個々に割当てたのは九十三戸分であった。当時の『切図面写し』から考察すると、東七番地通りから東十二番地通りまでは、該当地所すべての九十戸分が割当てになっているが、残りの三戸分は、東六番地通りから東七番地通りまでの間にあり、ここは後にされたと判断される個所があり、該当地所の推定はむずかしい。

昼なお暗い原始林と膝まで没する湿地状態の中で、特に入地困難な地所が相当数あったことは確かである。なお、指示された大画二つ



の中で五月一日以前に、個人へ仮貸下であったと推定される地所が、古文書により数か所が確認されている。

入植当初は、個々の地所が確定するまでに、交換や譲渡が多数見受けられ、一年後の明治二十七年に至り暫く落ち着いたように考えられる。仮貸下の許可がおりてから一か月以内に入地して、開墾に着手しなければならぬことが周知徹底されておらず、一か月経過した時点で誰一人開墾のため入地している者はいなかった。

越えて六月七日、殖民地割渡官の上田載憲から、常本照憲(後の常照寺開基住職)ほか全員の仮貸下地の返還命令を示唆する電報が本田の元に届いた。本田は生涯を通じて、このときほど驚愕狼狽したことはなかったと伝えられている。つまり仮貸下を受ければ、あとは各人五町歩を貰ったも同然と安心していたのである。

本田は団体の有力者数人を連れて上田載憲を訪れ、開墾の遅れを心から詫びるとともに、「自分たち団体員に不心得者は、神仏に誓って一人も居らず、貸下地を団体員一致協力して開墾し、自作農定住を目指す決意であること」を切々と訴えた。

本田らの真剣な訴えに上田の心は動き、先に指示のあった切函通りに、前例のない再貸下が許可された。一括貸下を受けた後の詳しい経過は不明で、実際には北部二戸分十町歩が砺波集落から欠けているが、団体長本田幸彦は団体団結の求心力として、仏教の百八煩惱

を砺波団体と結びつけたとしても単なる偶然ではない。

団体員は本田のことを気軽に『髭さん』と呼んでいた。

髭さんは、もみあげ、口髭、あご鬚、いずれも男がほればれるような、清潔で男らしく、きりつとした髭の持ち主であった。

しかも博識で雄弁であり、古文書を見る限り毛筆は流麗に達筆である。おまけに頭が低く、小さなことでも気軽に引き受ける優しさがあった。砺波入植は両親と同時にあったが、貸下運動の難儀が一段落してからも、多くのことがらを集落や知人から頼まれ、一家を省みるとまがなかった。

例えば貸下地の請願、選定などに要した運動費が一戸当たり二円くらい必要とされたものの、事情があつて未納になった分もあつたらしい人の良い本田はそれをどのように処理したのだろうか。

当時酒一升十五銭で良いものが手に入ったそうだが、昨今は千五百円出せばまあまあのもが入手できる。単純に考えると、物価はおよそ一万倍である。仮に運動費一人分未収になれば二万円の計算になり、それが実直な本田は自分で責任を負つていたとすれば、お金が続かない。本田三兄弟の末弟で三男栄三郎は、長男幸彦と両親の入植を確かめた上で、砺波団体員充足のため郷里からの募集に応じ、翌明治二十七年四月、西砺波郡広瀬村(現在の南砺市福光町)から六戸の家族二十八名を引率して、砺波団体に合流した。

栄三郎は、長兄幸彦と両親の住む隣接地に入植し、同行の家族と共に分家した。幸彦は、団体入植を思惑通りに成功させたが、生来の世話好きは一向に納まらず、懸命に開墾に精を出す栄三郎の見たものは、兄幸彦の経済的破綻であった。このままでは幸彦はもろろん、両親が救われない。親族会議の結果、次男源蔵（本田農機の開祖）は大工を生業としており、三男栄三郎が兄弟の確執を超えて、本家に戻り、本家を継承することにになった。

このような次第で、幸彦家を清真布市街地に分家させることになった。このとき栄三郎は入植五年後で二十七歳。入植直後に他の集落に先駆けて青年会を組織し、続いて私立小学校設立、住民組合、産業組合など多くの団体の創立育成に尽力した。つまり砺波集落が、北海道団体移住の成功例として、全国にその名を広め、『先進集落』として脚光を浴びる道筋を立てる役割を大きく担ったのは本田栄三郎である。一方、砺波団体の入植と共に、『五町歩自作農経営』の基礎を作る大事業をなし遂げながら、本田幸彦は砺波集落の前途を栄三郎に委ね、栗沢村役場の前で代書業を開くことになった。

その後の幸彦は、団体を力強く引つ張る弟に安心したのか、人が変



本田幸彦頌徳碑

わつたようにひっそりと代書業に専念して幾星霜が過ぎた。幾多の困難を乗り越えて、夢を追求しながら挫折こそしたけれど、砺波団体長の終身現職として、髭さんの愛称のまま惜しまれながら、昭和十二年六月、波乱万丈七十五歳の生涯を静かに閉じた。

#### 《参考文献》

① 「清真布貸下願地万端控」(本田幸彦、貸下地現場野帳

|| 資料発見平成四年)

② 「本田栄三郎、自分史」

③ 「砺波団体発達史、記念誌など」

④ 「栗沢町史」(昭和三十九年刊)

⑤ 「北海道庁指令第三二六四号など、土地貸下関連書類数件」

※ 砺波開拓史については諸説ありますが、経過を簡潔に  
つなぎ、私考としてまとめてみました。

#### 《参考》

・ 代書業は、今でいう司法書士や行政書士などのことです。  
官公庁に提出する登記書類などの公文書作製を代行するのが仕事でしたので、多くは役場の近くに事務所を構えていました。また、当時は読み書きのできない人が多かったので、私的な手紙や文書なども頼まれました。

# 新長屋と古長屋

## 万字炭山のはなし

万字炭山は、明治三十八年に北炭夕張一砒万字派出所主任技師の佐藤義雄氏が係員、坑夫二十四名を引き連れて入地したのが始まりとされている。万字小学校沿革史によると、その当時の万字一帯は地名もなく巨木や熊笹が密生し、熊が出没する原生林であり、山子をしながら熊狩りをしていたアイヌの人がたくさん居住していたという。開坑準備のため、万字小学校付近に坑夫の棟割長屋を坑務所付近岩見沢夕張道路覆道より約五〇〇メートル万字温泉側)に係員住宅を建て、鉱脈調査に当たった。それにより夕張炭と同質の優良炭層が発見され、採炭が開始されたが、前述のように原始林の中の炭鉱。石炭を掘つても運搬手段がなく、坑務所横に貯炭し、送炭のため玉村式複線高架索道の建設を行いなから、職員住宅、坑夫長屋の建設が行われていた。鉄索により石炭が夕張一坑の洗炭機に運搬され、そのバケットで生活必需品の輸送が行われると人口も徐々に増え始め、大正三年の万字線開通によりにわか人口が増加した。そこで現寿町の山地の傾斜地を切り崩し一号長屋、二号長

屋と建設してきた。しかし、人口の増加に合わせ児童数も増加して学校の教室が不足し、ついに炭砒より建設中の十二号長屋を急遽借り受け、棟割二十戸長屋を教育所学舎にするなどの処置をした。さらに長屋の建つ場所がなくなると、ポルネベツ川(水源地の沢)の深い沢の向こうに新しい長屋を建てることになり、この沢に大吊橋(延長約七十五メートル、高さ約十数メートル)が架けられ、長屋がどんどん建てられると、こちらの長屋は新長屋(現在の英町)、明治から大正に建てられた長屋(現在の寿町)は古長屋と呼ばれるようになり、それが地名として通用していた。

昭和十二年、大吊橋からコンクリート製の近代的な橋へと竣工した時、炭砒長、日野律郎が古長屋を『寿部落』、新長屋を『英部落』と命名したが、今でも古長屋、新長屋で通用する。

そんな古長屋時代の逸話を一つ。  
Kさん夫婦は東北地方から、景気の良い北海道で一旗あげるべく列車を乗り継ぎ連絡船で北海道へ向かった。道中、万字炭山の景気が良いと聞いて、予定を変更して万字炭山へ。幸いにして万字炭砒に採用され古長屋の一戸を貸与された。



## 開拓期の医療事情

隣近所の世話を受け、長屋生活にも慣れた頃、世話役さんから、「今住んでいる長屋を壊して炭鉱の施設を作るので新長屋に移れ」と言われた。Kさんは、「せつかく古長屋に慣れたので残してほしい」とお願いしたが聞き入れてもらえず、泣き泣き新長屋に移ったが、古長屋に比べて部屋も広く、設備も整っていた。

開拓時からの坑夫が多かった古長屋と比べ、新しく採用された坑夫が多く、こんな狭い地域でも気風が違ふというか、Kさんにとっては、なんとなくしっくりいかず、Kさんは世話役さんに何回も古長屋に移してもらいたいとお願いしたが聞き入れてもらえなかった。それでもKさんは、東北から移住して来て、初めて住んだ長屋であり、また隣近所の人々から受けた親切が忘れられず、世話役のところへ酒を一本持つてお願いに行った。世話役は、「そんなに古長屋が良いのか」と言つて、間もなく古長屋に移ることを許可されたという。Kさんの古長屋への気持ちを通じたのか、酒の一本がきいたのか。その後、新しい長屋が建つても、Kさんは古長屋から動かなかつたという。

### 《参考》

・炭鉱の従業員は完全な職階制で、職員(通称係員)と坑夫の身分制であり、住宅も職員住宅、坑夫長屋などのように、待遇は歴然と差別されていた。世話役は、会社の労務係で各部落に一名配置され、生活の世話もしたが、坑夫たちの監視にも当たっていた。

開拓期における拓殖の進展と村治の重点のひとつが、医師の確保であった。このため道庁では、明治二十一年四月、町村医設置規則を公布し、公立病院のない町村に開業医を設置して俸給を補助した。

栗沢村に初の医療機関ができたのは、明治二十八年のことで、必成社が岩見沢の森川病院との特約によつて、出張所が清真布駅前開設された。栗沢村の村医が設置されたのは、栗沢村戸長役場が置かれた明治三十年のことであった。町村医設置規則に基づき補助を受け、村から給料を補給することとし、前田範栄医師が清真布市街に開業した。次いでほぼ同じ時期に漢方医岡田源吉、灸師の村分助、森川病院の出張所が開設され、また、薬局も開設されたが、広い地域では無医に等しい状況であった。特に、茂世丑からの距離や交通不便の当時は容易なことではなく、薬局や富山の薬売りが配置した薬が唯一の頼りであった。大概の病氣や怪我は、この売薬で間に合つていたようであったが、開拓地特有のオコリ(マラリア)には特効薬のキニネが手に入らず、随分悩まされたようである。また、盲腸になつて岩見沢まで馬車や馬櫓で手術に行ったが手遅れで、命を落とすこ

とも度々あった。明治の終り頃には村医が定着したことから、既に森川病院の出張所はなく、大正七年には大木玄碩による栗沢病院が開業した。大木は急患に対して寒暑を問わず即刻往診に応じ、住民の感謝と信頼が厚かった。昭和六年には太宰直志が清真布市街に太宰病院を開業したが、既に村医制度は廃止されていた。一方助産婦については、明治の末期から大正の初期には資格を持った産婆が開業していた。しかし、産気づくと馬車、馬車で迎えに行かねばならず、間に合わないことも多かった。それで、地域の年配婦人で出産を手伝った経験のある人とか、さもなければ出産経験者を臨時の産婆役にしたり、あるいは巧者な素人産婆取り上げ婆さんがいれば頼んだりしていた。また、そうした人も得難い場合は、自分だけで出産しなければならず、難産ともなれば手の施しようもなく、新生児はおろか母親の生命まで落としかねない危険なものであった。昭和時代が経過する中で、開業助産婦が増え、夏は自転車、冬は馬車で活動が大きくなる。特に戦時下には『生めよ増やせよ』の掛け声で、十一人以上の子持ちに対して厚生大臣や道庁長官から賞詞が与えられる時世であったことから、多く出産することが『愛国の至誠』といわれ、助産婦も昼夜を問わず大活躍したものであった。



## 赤貧を見た

大正八年五月中旬、私は北陸本線のある駅に下車しました。

そのころ私は全国の優良町村、優良産業組合、優良青年団などの視察のため、汽車を乗り継ぎながらおよそ四十日間の一人旅を続けていました。すでに夜の十時を廻り、お腹も空いていました。

宿を取り、ひと風呂浴びて暖かいご飯を戴こうと思い、汽車弁当(駅弁)も買わなかったのが大きな誤算でした。小さな駅といつても、ここは全国に知られた有名な組合の所在地なのです。宿屋の一軒や二軒は必ずあると確信していましたが、駅で尋ねると宿屋は一軒もないということでした。駅長兼駅夫らしい男は、「二里余り行けば宿屋はありますが、もう遅いので一台だけの人力車も帰りが困るので無理でしょう」と言いました。終列車もすでに発ったあとで、私は藁にもすがる思いで町へ出て、俵屋を探してみました。寝てしまったのか分かりません。駐在所も遠いらしく町の明かりはほとんど消えていて心細くなりました。このままでは野宿になり、浮浪者と間違われても仕方がない、切羽詰まった状態になっていました。

万策尽きて私は元の駅まで戻り、待合室のコンクリートの上でもよ

いから寝かせてもらおうと決心しました。

そこで駅長らしい男に名刺を差し出し、しかしかかと事情を説明し、雨露をしのぐだけで結構だからと頼み込みました。

駅長は心から同情してくれて、「これは何とものになりそうだと、ほっと胸をなでおろした矢先、細君が顔を出しました。

細君はさかんに亭主に対し、口ばくで顎を



しゃくつて断りなさいと言っている様子でした。まさに形勢逆転です。私は頭にきました。「なんだこのクソ尼。他人の難儀を何とも思わないお前は鬼か。邪険なひどい女だ」と腹が立ちました。でも、ここで腹を立てていたのでは実も蓋もありません。私はそのとき不思議にも親鸞が越後に流罪となった道中の御絵伝を思い出しました。

『あるとき一夜の宿を断られた親鸞は、雪を褥に石を枕に一夜を明かされたお話』を切々と語り、「私は只の凡夫なので、雨露をしのげればそれだけで満足です」とさらに頼んでみました。

駅長はいいづらそうに話しました。「誠にむごいことを申すようですが、我が恥を忍んで事の次第を明かしたいと思えます。貴方様が、たとえコンクリートの上でも良いといわれても、そのようなわけにはまいません。私は勤めてから日も浅く、家には恥ずかしいことに

布団は一枚きりしかありません。それでお断りしているのです」

私は、「布団を着て寝ようなどと贅沢な事は思ってもいません」と言いながら、部屋へ無理に入れてもらいました。部屋には炬燵があり、それに大きめの掛布団が掛けてあるだけでした。子どもが三人いて、親子五人が一枚の掛布団を共有するありさまを、私は目の当たりにしたのです。『赤貧洗うが如し』とは、このことだと胸を打ちました。

こうして私は野宿でもなく、コンクリートの上でもなく、この家の五人と共に炬燵に足を入れ、一枚の布団で寝ました。

いろいろ考えると寝付かれず、小さな虫に顔を何カ所も刺され朝になりました。細君はご飯の支度にかかっています。ご飯の炊き上がる匂い。このおかずの匂いで腹がぐうぐう鳴りました。

それは牛蒡の匂いだったのです。世の中には、断食で一週間も十日も物を食べない修行や抗議行動がありますが、私はたった一度の夕食を食べなかっただけで、何というありさまだったのでしょうか。

今でもあの時の牛蒡の匂いが忘れられません。

そのころは大正八年ですから、栗沢村も開拓以来二十数年から早い所でも三十年でしたけれど、あの内地で体験した赤貧の暮らしは考えられません。私は視察によって多くの事柄を学びましたが、あの駅長一家の実態を身を以って体験したことは、何物にも代えがたい自分の一生の財産になったと思っています。